UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 008 762 719 6

University of California Library
Los Angeles
This book is DUE on the last date stamped below.

Phone Renewals
310/825-9188

APR 12 2004

國民道徳と基督教

JAPANESE
CHRISTIAN CHURCH
C. E. LIBRARY
936 WALL ST., L. A.
BOOK No. 128

Digitized by the Internet Archive
in 2015

https://archive.org/details/kokumindotokutok00ebin

East Asian Library
BJ
47
E25
1912

序

日清戰爭までは支那人が日本人を嘲笑して、突飛なり、生意氣なり、猥りに西洋に摸倣して、東洋を忘れ侮るものなりといつたが、不思議なるかな、近時となりて、日本人は支那人を評して、突飛なり、生意氣なり、西洋の共和政治を摸擬するが如きは小癪千萬なりと嘲笑して居る。實に日本が覺醒して開國進取主義を取つた曉には、支那は獨り東洋第一等國を以て誇りたるのみならず、列國の公使を視ること猶我屬國の使臣を視るが如き態度を示したのである。然るに支那が覺醒して歐米の政體を學ばんと奮起するに際しては、日本人は世界第一等國を以て自任し、祖先崇拜を

旨とし、神社崇敬に心を寄せ、日本は世界に於ける特別の國柄なりと誇つて居る。兎もすれば支那に先を越さるることないともいへぬ。支那にては革命の結果として、舊道德は頓にその權威を失し、新道德之に取つて代らんとするは、亦勢の免れ難き所であらう、新道德とは何んである。基督教が鼓吹しつゝある所のものである。日本が强ひて舊道德を振興せんと務めつゝあるうちに、支那には盛に基督教が傳播するやも知るべからず。然らば支那は行く行く日本に基督教の宣教師を派遣するに至るかも分からない。支那は由來日本の先生である、儒教も支那より來り、佛教も支那より來り、陰陽道も支那より來つた。獨り基督教だけは日本より支那に傳はるであらうと思つて居つたが、日本人の

基督教に對する態度は飽くまで保守的である故に、恰も朝鮮が基督教を以て日本人に優れりと思惟するが如く、支那は基督教を日本に傳ふべき任務を取るやも知れぬ。日本の精神界は比較的に進歩して居らぬ、昔時ながらである。その迷信の如きは上下を通じて猖獗を極めて居る。

予は近時我同胞が保守的となり、孤立的となるを慨し、教壇より又文壇より國民の警醒を促したのである。假令當路の人々や教育家などが保守主義を維持せんと欲するも、舊來の道德は日を追うて頽廢しつヽある。夫れ興廢存亡は萬般の社會を通じて行はれつヽあるが、廢するもの多くして興るもの少なく、亡ぶるもの大にして存するもの小なるときは、社會は到底廢亡に陷らざるを得ない。予は我日本國

民の間に廢亡の多大にして、興存の甚少なるを觀じ、慨歎せざるを得ない。然れども基督教は有ゆる反對のあるにも關せず、その新進の歩武を取りつゝあるを悦ばずんばあらず。帝國の高等教育を受けつゝある學生青年の十分の一乃至、十五分の一は基督教徒である。是れ實に驚くべき人數ではあるまいか。是等がその信仰を維持し、その品格を保全し、社會に於て奮闘するときは、日本は二十年を待たずして、その面目を一新するや疑ふべかちず。予が絶叫の聲は時に悲哀の響ありと雖も、亦大なる希望を含んで居る。帝國に於ける基督教の進歩遲々たりと雖も、亦侮り犯すべからざるものあるは、事實に徵して明である。基督教は帝國の宗教たらざるべからず、又宗教たる、運命を有すると

思ふ。然れどもその運命を早速ならしむるは國民の覺醒如何に存する。此書はその前編に於て我國民道德の興廢存亡を論じ、併せて新領土の朝鮮が早く既に基督教を以てその活路を開きつゝあるを論ずる。新領土の人民は一千二百萬の多數を占む。是れ人口の五分の一である。此國民の五分の一は侮るべからず、看過すべからず、その興廢存亡は我帝國の運命に關するのである。故に予は之を前編の終に論じたのである。

而して後編に於ては專ら予が教壇の聲を揭げて、基督教を論じた。由來プロテスタント教を以て淨土眞宗の他力主義と認め來つたもの多い、然れども予の長き信仰の實驗によればプロテスタント教の奧義はナザレの耶蘇の宗教である。

この宗教は自力を發揮する、自信を鼓吹する、神の子たる意義を高調する、神人對立の自主を目的とするものである。我日本の同胞はこの耶蘇基督の宗教に來つて、その國民的要求と、その人格的憧憬とを滿足し得ると、予は信じて疑はぬ。予が帝國臣民として又基督教徒としての立脚地は深く自信する所あれども、亦見る人の立場よりして、批評は免かれないのであらう。是等の批評多からんを豫期するが爲に、予の勇氣反つて振ひ、遂にこの書をものした譯である。然れども予はこの書を以て滿足せず、傳道の爲め東奔西馳の際なれば、到底本意を遂ぐる機會を得ないが。隣國の變亂もあり、時機逸すべからずと思ひ、乍不滿足この書を公にした次第である。我が敬愛する同胞に警告せんと欲

するもの、之にて盡きざるを遺憾とする、序して以て讀者の諒とせられんことを望む。

大坂天王寺堂ヶ芝町友人の宅に於て

著　者　識

國民道德と基督教目次

前編

（一）支那內亂と帝國民の覺醒……一
（二）國民道德の究境……一一
（三）國民道德の根本を發揮せよ……一八
（四）國民道德の進化……二八
（五）神社崇拜の疑問……三五
（六）祖先崇拜か子孫崇拜か……四四
（七）帝國敎育家の反省を促す……五二
（八）國民の發展に於ける敵愾心と博愛心……六〇
（九）日本化か將た基督化か……六七
（十）國情の變遷と基督敎……七五
（十一）敎育勅語と基督敎……八三

(十二) 列國大家族と其宗教……九三
(十三) 朝鮮新同胞の將來……一〇二
(十四) 朝鮮の教化……一一一
(十五) 併合後の朝鮮……一二〇
(十六) 朝鮮基督教徒の使命(一)……一二八
(十七) 朝鮮基督教徒の使命(二)……一三六

後編

(一) 基督教の發展……一四九
(二) 自力主義の基督教……一五六
(三) 基督教の二大根據……一六五
(四) 靈界の饑饉……一七三
(五) 現代に對する基督教の使命……一八五
(六) 神の自現……一九三

（七）人格の價値……二〇四
（八）知識と信仰……二一六
（九）罪惡の自滅……二二九
（十）希望の生活……二三九
（十一）利己主義の自滅……二四八
（十二）信仰と國民の品格……二五八
（十三）新道德の基礎……二六八
（十四）新生の風光……二七六
（十五）信仰と忠君……二八七
（十六）自信……二九四

目次終

國民道德と基督教

海老名彈正著

前編

支那の內亂と帝國民の覺醒

支那の內亂は世界列國が大なる興味を以て注目する所、殊に我同胞は一葦帶水の隣邦なるが故に、甚深の興味を懷いてその發展に注目し、斷じて對岸の火災視して居らぬ。日々の新聞幷に號外は內亂の報道を以てその紙面の重要部分をふさぎつゝある。注目する所の人は千種萬樣の心を有するだらうが、革命軍に同情を注ぐことは不思議にも殆んど凡ての人の一致する所である。日本人は革命の文字さへ之を忌み嫌ふのであるが、隣國のことゝいへば、擧つて革命を歡迎するの觀

JAPANESE
CHRISTIAN CHURCH
C. E. LIBRARY
936 WALL ST., L. A.
BOOK No. 120

あるは頗る異樣の感を與ふる。しかも誰れとはなしに革命軍の勝利を祈るものの如し。吾人は別に滿人政府を厭ふ譯にもあらず、又漢人政府を歡ぶ譯にもあらず。支那人の間には滿漢の愛憎もあるべけれども、我等日本人には何も此の如きものはない。また立憲君主制であれ、民主政治であれ、日本に取りては、さまで意とするに足らぬと思ふ。東洋に雄大なる共和國が打ち建てられたればとて、日本には日本の歷史あるが故に、毫も心配する所なしと思ふ。吾人は日本國民として唯この革命軍の勝利が如何なる影響を日本人の頭腦に及ぼすべきかを思はずんばあらず。殊に日本の宗敎改革家として之を觀るときは、その亦た意を强うするものの少くない。

吾人の觀察する所によれば、今回の革命軍は斷じて排外主義にあらず、その表面には排滿主義を標榜すれども、之れは表面の名義にして、その裡面に一大文明國を建設せんとの意あるは疑ふべからず。排滿主義は一時的のものたるべし、干戈治りたる曉には、滿漢一視同仁の政を施かんは明である。革命軍は文明主義を旨とせぬならば、列國の同情を受くることを得ない。故にその旗幟は鮮明である。排

外主義にあらず、又排基督敎主義にあらず。支邦の暴民は古來基督敎會堂を燒き、又は破壞したのであるが、今回の革命軍は此の如きものを斬に處すと宣言する。之を單に外國の干涉を避くる政略に過ぎぬと思惟するは過りである。試に思へ、支邦人の米人及び歐人間に居る者の數は實に九百萬を數ふ。是等は長く文明國に居住して文明の空氣を呼吸し、文明の恩澤を承知するものである。彼等は皆革命黨にくみするものなれば、革命黨の中に文明の分子多きは疑ふべからず。しかのみならず、支那に約五十萬のクリスチャンが居るといふ。是等は兼て敎民と呼ばれ、時々迫害を受けたのであるが、今回の革命軍は毫も之に危害を加へざるのみならず、大にその便利を計り、又之を保護するやうに察せらる。支那のクリスチャンは歐米の文明思想に養成せられ居るが故に、支那にては最も進歩したる者といはねばならぬ。是等五十萬のクリスチャンが方今如何の地位を占めつゝあるかは、明瞭に知り難しと雖ども、革命軍の宣言と外國宣敎師の態度とに照らして考ふるときは、決して推察するに難くない。彼等は多く革命軍の味方であらう。由來大に迫害せられたる敎民が此革命黨に加入し、却つて保護を受くるものとなりた

るは、驚くべき國情の變化といはねばならぬ。

支那内地に傳道する新教の外國宣敎師は歐米にある五十有餘の傳道會社より派遣せらるゝものにて、その數は實に四千二百名に達し、支那内地傳道會社に屬する宣敎師のみにても、約九百名の多きを占め居る。是等の宣敎師は支那内地の到る處に居住し、敎會堂を建て、學校を設け、病院を興し、數多の講義所を造りて傳道しつゝある。内地傳道隊の如きは支那人の服を着し、支那人の食を食し、支那人の如く辮髮して毫も土人と異なる所ない。彼等の感化は獨り五十萬の信徒に及ぶのみならず、實に幾十萬、幾百萬の支那人に及ぶ。彼等は歐米の文明を携帶して支那内地に入り、歐米の民主的思想を吹き込みつゝある。今回の革命軍中には若し夫れ直接ならざれば、必ず間接に宣敎師の感化を受くるもののあるに相違ない。是等外國宣敎師の革命軍に對する態度は、英米二國の支那に對する態度に徵して、察し難きにあらず。四千二百の宣敎師が五十萬の信徒の裡面に居るを忘れてはならぬ、しかして又是等五十萬の敎民が革命黨の味方たるは吾人が最も注意を要すべきことゝ思ふ。

由來敎民と暴民との軋轢は支那の一大外交問題を惹き起す導火線であつたが、革命軍は公然暴民を壓して敎民を保護して居る。基督敎に對する暴民は全くその勢力を亡ふに至つた。是れ基督敎傳播の爲に一大妨碍を除かれたものといふべし。しかして若し敎民の力が革命黨の一大要素たらんには、基督敎は、今後一大功勞者の地位を占むるであらう。果して然らば儒敎よりも道敎よりも又は佛敎よりも基督敎は支那の文明的宗敎として尊敬せらるゝに至るであらう。基督敎が革命黨の成功と偕に、驚くべき勃興を遂ぐるに至らんは豫知せらるゝのである。

支那には古來定りたる國體はない、時代によりて幾何の變遷をなすも更に差支はない。基督敎は支那國體上より何も嫌疑を受くべきものを持たぬ。支那人が歐米の文明的政治を採用し、その法律を應用するに當り、基督敎の傳播は寧ろその歡迎する所たらずんばあらず。何んとなれば歐米の政治法律と基督敎とは深い緣故の存するものにて、日本に於ての如く之を引き離さんとする方が、寧ろ不自然である。故に基督敎は文明の宗敎として、今後破竹の勢あらんは、吾人その然るべきを知りて、其然るべからざるを知らぬ。支那從來の排外主義は大に基督敎の傳

播を妨げたれども、若しこの主義が退治せられんか、基督教傳播の故障は取り去られたりといふべし。基督教は歐洲文明と偕に盛に勃興するに至らんは豫言するに難からず。

日本は支那の隣邦なれども、英米を度外して單獨の行動を取るは不利である。假令識者中には立憲君主國を建てんと欲するとも、若し英米が革命黨の共和主義を賛成せんと欲するならば、結局之れと協力するに至るべきは亦已むを得ない所であらう。況んや日本には革命黨の共和主義に賛成するもの甚だ少くないのである。支那は由來亞細亞大陸の大國であつて、世界主義の勃興には斷じて不便利の土地にあらず。外國人は驚くばかりに多く入り來るが故に、支那は將に世界人類の雜居地たらんとする。基督教の如き世界主義がこゝに勃興せんは實に當然の事と思はる。

又基督教も歐米に於て近頃大にその面目を新にし、從來の褊頗なる思想を去り、その生來の面目たる世界主義を發揮し來り、一時科學と衝突したる所ありしも、之に由つて却つて愈その眞相を磨きたるを以て、その自から有したる絆累を脫し得

たのである。基督教の儒教に對する態度は從前の如く排斥にあらずして、併呑である、完成である。道教又は佛教に對するも同樣であれば、基督教が新興の支那に於て勢力を逞うせんは豫期し難きにあらず。加之基督教は北米に於て實業と結託し、從前の如く之を蔑視するにあらず、却て之を聖化するに至りたれば、支那人の實利主義とは斷じて衝突することはなからう。又英米はドコマデも支那人を華主となし、その商品の販路をこゝに廣めんと欲するが故に、支那人と英米人との交際は愈親密になるであらう。英米人は支那人教育には前日に倍して務め、一方には支那の留學生を自國に招きて之を教育し、一方には多數の宣教師教育家等を派遣し、實業家と協心同力して支那を開導するに至らん。支那は今後二三十年にして驚くべき進步をなし、油斷すれば、日本の文明を凌駕するに至らんも知るべからず。日本は一面に於て大進步をなしたれども、宗教道德に至つては未だ斷乎たる去就を決し得ず、國民性を維持せんが爲に祖先崇拜の復興を促しつゝある間に、支那は歐米の宗教道德を採りて、目覺しき長足の進步を奏し、日本をして後に瞠若たらしめんも知るべからず。帝國の運命を双肩に荷ふ所の人々はこゝに深く鑑み

る所ろあらねばならぬ。

試に朝鮮を視よ。日本の識者が基督者を排撃しつゝあるうちに、外國宣敎師は朝鮮人を敎化して、忽ち三十萬の多きに及ぶ。形骸は日本の版圖たるも、精神の權力は宣敎師の手にあり、基督敎の勢力範圍にあるにあらずや。日本人は古來基督敎を防がんが爲に瑣國主義を取り、爲に歐米諸國に先きを越された。今にして奮闘努力すれども、尙及び難きをかこちつゝある。維新以後とても尙基督敎に對して頭痛をやみ、躊躇逡巡して手の出す道を知らず、恐々として姑息手段に訴へつゝあるは笑止千萬のことである。要路の人々は支那の內亂を僅に政治上よりみず、軍事上よりみず、又は經濟上よりみず、宗敎道德上より觀察するの必要がある。支那の革命が果して吾人の觀察するが如くならば、その勃興は實に驚くべきであらう。

抑維新の改革と神道の勃興とは並行して勃發し、神道は宗敎として尊王の大義を神聖視したのであつたが、之れには復古的保守主義がその威を逞うして居つた、故に尊王は開國進取主義と提携して神道を去つたのである。然れども此神道の

保守主義は日本國民性と結合して、幾度もその頭を擡け、國民の進歩を妨碍するのであるが、支那の革命黨は儒教主義よりも基督教主義に深い緣故を有し居るやうである。果して然らば、支那の勃興はその中途に於て固陋主義に絆さるゝことなからう、文明進歩の精神を以て勇往邁進せんこと疑ひなからん。基督教の信仰は結局世界を風靡すべき使命を有して居る。日本の如く妨碍多い國と雖も、その普及は侮るべからざるものがある。試に新敎徒の數約十萬あるを思へ。是れは佛教徒の如く祖先の遺鉢を受けて居る名簿上の信徒にあらず、幾多の妨碍を排して斷然その信仰を告白したるものである。佛敎徒の百萬よりも有力なるものである。然して高等敎育を受けつゝある高等學校、高商、又は大學の學生間の比例を見れば、學生の百分の七、又は十は新敎徒である。之に引きかへ、無學の下等社會に入れば、新敎徒は五千人のうち一人位に減ずるであらう。基督敎徒が日本の社會に於て高等の敎育を受け、高等の地位を占めつゝあるは明確なる事實である。基督教の侮るべからざるは之を以て明に知り得らるゝ。日鮮人の融合は近き將來に於て先づ日鮮新敎徒の間に行はるゝであらう。然らば帝國に於ける新敎徒の數は無

慮五十萬に達すべく、しかして此五十萬の信徒間に確乎たる輿論行はれ、協心同力の行動を取るに至らんか、殆んど敵すべからざる勢力を形作るべし。支那に於ける革命の勝利が同時にクリスチャンの勝利とならんか。是れ單に支那大陸のクリスチャンの爲に祝すべきにあらず、我帝國の新敎徒の爲に祝すべきである。島帝國のクリスチャンと支那大陸のクリスチャンとは、早晩相提携して亞細亞大陸の敎化に當るべければ、吾人帝國新敎徒たるものは大に意を强うすべきである。帝國の政治家、敎育家がこゝに鑑る所なく、徒らに基督敎を危險思想となし、その傳播を防ぎ止んとするが如きは、帝國の進步を阻害するものにて、拔くべからざる固陋主義の禍根を益將來に深うするものである。吾人は當路者の覺醒を促し、基督敎に對して斷然積極的態度を取らんことを欲する。吾人の言は當路者を威嚇するに似たりと雖も、支那革命黨の勝利に付て、偶クリスチャンの勝利の遠きにあらざるを祝し、併せて帝國新敎徒の勇奮を望まずんばあらず。今や帝國は獨り經濟界のみならず、實に精神界に於ても行き詰りの姿である。吾人は先づ帝國新敎徒の覺醒に一大活路の橫はるを見る。新敎徒の大なる覺醒はやがて帝國々民の覺

醒である。支那革命黨の勝利はその影響する所豈に唯支那大陸に止るべきでない。吾人はこゝに不可思議なる大能の攝理を窺ひ知らざるべからず。日本帝國は基督敎に對し、何時までも腫物にさはり、臭物に蓋する如き姑息手段を取ることなく、宜しく斷乎たる積極的態度に出づべきである。しからざれば、我が國民道德に力ある生命は遂に之を吹き込むべからざるべし。國民道德を振興する爲には幾多の方法手段を盡したるや知るべからず、しかも未だ見るべき著しき功を奏しないのである。基督敎は最後まで遺れる唯一の實驗的材料である。誰れか之を實施するの勇あるであらう。

國民道德の究境

我が國民道德の頽敗を慨歎するもの日を追うて多くなる。敎育家も大に狼狽を始めた。然かも未だ根本的に之れが解決を求めんと欲する者はすくない、是等憂國の志士も同じく時代の淺薄なる思潮に漂ひ、その渦中より以外に飛び出す術なきやうである。偶時代の醜體に憤慨して忠孝の道を講ずる者は、砂上に家を建

つる愚を學んで居る。近頃頻りに家族制度の國民道德を鼓吹するものあれども、何ぞ知らんや、少壯の人民は旣に此幼稚なる思想を超越し、別にその自我の要求を滿足せしめんと煩悶しつゝある。個人は家族と離れ、國家を離れ、個人そのものに價値を知らんと苦悶しつゝある。之れは最も注意を要すべきことではなからうか。此要求を一概に撲滅せんと欲するは、恰も沸き出る源泉を塞ぐが如し、何等かの機會を利用して必ず勃發し來るは疑ひない。此要求は偶政海に顯はれ來るとき、直に之を撲滅することと難からざらんも、或は文學に、宗敎に、藝術に顯はれ來り、驚くべき社會の暗流となりつゝあるは、識者の看過してならぬ所である。個人はその自我を認め、家族に對し、國家に對し、その權利を確守せんと苦鬪する。假令忠孝の大義を以て之を壓抑せんと欲するも、自我は竊に時代と偕に道德の變遷するを主張して心服しない、我國民道德の頽敗はギリシヤ羅馬の國民道德の頽敗に彷彿たるもの果してないといへやうか。大聖ソクラテース出でずんば、到底國民道德の新なる基礎は据ゑられざるべし。しかもこの大聖は國民道德の破壞者として毒杯を飲まざるべからざるか、個人の要求には從來の忠孝を顚覆せんと欲する熱

烈なる離反心がある。この離反心は青春の生氣に伴ふ。而して青年の最も深刻なる煩悶は、則ち此離反心に存するを識らねばならぬ。

我日本の敎育主義は久しく唯物主義であつた。現象界の外に信ずべき心靈の世界を認めなかつた。塵より造り成されたる身體は復々塵に歸るのみと主張した。王公も賤民も等しく塵の凝りである、豈に貴賤あらんや。人生は朝露の如く、風前の燈である。盛衰生死は自然界の常である、何も別に怪むべきことはない。弱肉强食は自然界の法則である。一日の生活を維持せんと欲せば、一日の利己心を發しなくてはならぬ、十日の生活を維持せんと欲せば、十日の利己心を發しなくてはならぬ。唯物主義と利己心とは双子である。利己を保有せんには、眼中父母あるべからず、主君あるべからず、國家あるべからず。國家も塵なり、主君も塵なり、父母も塵なり、本來價値あるものにあらずとは、唯物主義敎育の結論とならねばならぬ。父母に服從するも利己の爲め、國家に關係するも利己の爲め、主君に事うるも利己の爲め、主君も國家も父母も利己の目的を達する方便に外ならぬとは、實に利己主義の覺悟である。こゝに於て無神無靈魂の幸德秋水と加藤弘之博士とは

一味同心である。二者共に唯物主義である、二者共にその根本義に於て一である、幸德は加藤博士、中江兆民等の唯物主義を忌憚なく大膽にも國家に應用したものである。吾人は我敎育界の猛省を求めざるを得ない。しかも現代の青年は既に此淺薄なる唯物主義を超越し始めたやうである。

個人の眞面目なる要求は終に物欲を以て滿足せしめられない、又その破壞的方面を以て永く痛快とはなし能はない。個人の根本は物質にあらず、物質以上のものたらざるべからずとは、個人そのものゝ自覺し始めたる所である。何んとなれば個人は物質界を以て飽き足らず、物欲を以て飽き足らず、物質と共に破滅するを欲せず、物質と等しく離散するを欲せず、物質そのものに歸るを無上の悲哀となす。個人は父母に離反して懊惱し、國家に謀反して發狂し、物質に飽き足らずして煩悶する。個人は物質界以上である、利己主義以上である、絕對に孤獨たり能はないのである。故に個人は到底自然界にはその眞乎の悅樂を保有すべからず。こゝに於てか、現代の思想界は一歩を靈界に進め、唯物主義を排して凡神敎に入る。個人の根本義は無窮の靈界に根ざすを自覺し始む。個人はその靈的性格に於てその

價値を見出し始む。神は我が衷心に存する。自己自から神たるを自覺するは何たる滿足である。こゝに不生不滅の生活がある、我は塵土の凝り固りたるものにあらず、宇宙の神そのものである、彼我の別を立つるが如きは我見のみ、皮相の觀想のみとは凡神敎の聲である。こゝに利己主義は煙の如くして消滅する。平等の見地、無我の境涯、忽焉として開展し來る。各ゝ個人たるを超越し、宇宙大我の境涯に入るときは、最早離反もなく競爭もなく殺倒もなくして、悠々自適するのみ。此邊旣に理智の見地を超越して無限の光明洋々として流るゝのみ。何ぞ亦理智の齷齪たるを要せんや。凡ての知識を超越する平安界は之をいふのではないか。現代の思潮はこの洋々たる靈海に注がんとして、最中流れつゝあるやうだ、文藝然り、哲學然り、宗敎亦然りである。

凡神主義は確に唯物主義に對して、一歩を進めたるものなるや疑ふべからず。然れども個人の煩悶は尙未だ息まざるのである。個人はその本來の性格が集散離合の物質に根ざすにあらずして、無窮の靈能に原因するを自覺する丈それ丈個人の價値は增加する。個人自から神そのものなりと自覺するに至りては、個人の

権威は至尊ならざるべからず。此の如き個人は果して永久に存すべきであらうか、永久に存せねばならぬ筈である。暫時の存在は人格そのものゝ忍ぶ所にあらず。凡神主義によれば、個人は無窮の靈光に沒入すべき運命を有する。之を光榮と觀想するは影を捕ふるのみ、水中の月に憧憬するのみ。所謂人格なるものは永遠の價値を有せず、現象界に出沒するものに外ならぬ、超個人は宗敎の極致にして、人生の終局たらざるべからずとは、無我の境涯を想見するものである。凡神主義は終に個人を殺倒し、人格を無視す。一時凡神に沒入するを以て無上の樂土と心得るものあらんも、是れ到底無上の價値を自覺して健鬪する人生を滿足せしむるものでない。人生は復々醫すべからざる煩悶に陷らざるを得ない。現代の人々未だ此深刻なる煩悶を實驗するに至らず、何んとなれば未だ人格の價値を認め居らざるが故である。然れども此煩悶に來らずんば、禍である、死である。此深刻なる人格の煩悶は早晩必ず凡神主義に來らねばならぬのである。クリスチャンにして偶凡神主義に陷り、自から高しとするものあるが如きは、東洋思想の影響のみ、斷じて基督敎の深遠高大なる實驗より來るものではない。此凡神的思想は到底

人格を無視するのである。我日本人の如きは、此人格を得んと欲して奮鬪すべきを敎へらるれども、その終局は非人格に終らざるを得ずと諭示せらる。倫理に於て人格は重ぜらるれども、哲學に於ては忽ち之を無視する。我日本の倫理と哲學とはこゝに自家撞着しつゝある。こゝに大なる煩悶がなくてよからうか、思はざるのみ。我がこの奮鬪して贏ち得たる人格は果して風前の燈に等しいのであらうか、物質の集合したる肉體と同じく消滅するであらうか、生命は一代、名は末代と見るは、これ影を捕ふるものにあらずして何んであらうか。末代に及ぼす感化に生き、名の爲に奔走せんと欲するは、是れ影を追ふに外ならず、人格は果して永久に存在すべき價値を有つて居らぬであらうか。個人の價値果して如何、個人の確立果して望むべきか、その國家に對し、家族に對し、維持せんと欲する權威は果して意味があるか。個人を殺して無限の靈光に沒入するは、人格の消滅ではあるまいか。此煩悶は煩悶中の最も深刻なるものである。然るに基督敎は人格の權威が無限の人格にその基礎を有すと主張する。此確信は數千年の健鬪によつて贏ち得たる勝利の冠である。ことに吾人は平等中に差別を認め、差別の中に平等を認むる。

宇宙は驚くべき靈界のハーモニーを作りつゝある。このハーモニーに於て個人はその無限の滿足を完成するのである。此ハーモニーの中に家庭は改造せらるべきではなからうか。このハーモニーの中に國家は改造せらるべきではあらうか。個人は斷じて孤獨にあらず、自己の中に無限の相を有し、無數の個人と調和し、無窮の靈能に養はる。人格は顯象にあらず、實相である。是れ基督敎の個人觀である。所謂國民道德の如きも、この個人の權威を要素として磨き來るにあらざれば、砂上に家を建つると同斷、大雨降り、大風起り、洪水汜濫すれば、その顚覆や實に恐るべきである。憂國の士こゝに鑑みる所なくしてよからうか。唯物主義一轉して凡神主義となる、而も凡神主義は斷じて人格の權威を確立することはできない、我が國民道德は終に基督敎とならねばならぬ。

國民道德の根本を發揮せよ

大逆事件が我が國民を如何ばかり覺醒したるかは、思ひ半に過ぎるものであらう。要路の人々は殆んど狼狽の觀を示した。然れども斯る忌むべく恐るべき禍

根は近き過去に植え付けられたのではない、遠き明治の初年にその種子は蒔かれたのである。明治の教育は一面に於ては舊思想の打破である、舊道德破滅の因となつた。日本古來の道德は非科學的思想の上に建設せられたるものである、非文明的思想の形式を有するものである。忠孝の如き道德そのものは、永久に保存すべきものなれども、之が非科學的思想の上に立ち、又は非文明的思想の形式を有する以上は、そが破滅の運命を免れざらんは、豫め期すべきであらう。然るを忠孝の爲に新しき根據を見出すことなく、之に新しき形式を取らしむることなく、因襲のまゝ舊思想の上に舊式の衣服を着せて、之を永久に保存せんとするは、益々忠孝の道德を時代後れ、陳腐のものと輕侮せしむるのみである。故に國民道德は何時も動搖して、その歸依する所を知らざるのである。試に過去の教育策を回顧すれば、新しき布を以て舊き衣に縫ひつくるものといはねばなるまい。

明治の科學的教育は從來の支那教育とは全くその趣を異にするが故に、用捨なく四書五經を廢した。流石に道德教育を全廢する譯にも行かず、四書五經の教訓に代ゆるに西洋の宗教道德を以てし、神は天地の主宰にして人は萬物の靈なりと

敎へ、又勸善訓蒙といふが如き飜譯書を讀ませた。基督敎は此の單純なる思想を更に深うし高うするものなれば、小學敎育はやがて敎員や生徒をして基督敎に至らしむる傾向をあらはした。小學校の德育は偶々勃興し來りたる自由民權論と因緣近き道德なるを以て、要路の人々は是等宗敎道德的敎訓を全廢し、復々支那の小學などを敎へ始めた。所謂儒敎主義道德は鼓吹せられたのである。是に於て敎育家は甚しく倫理敎育の方針に迷うた。王政維新の志士も開國進取の進步主義を忘れ、何時とはなしに保守主義となり、民權思想を危險思想と考へ、基督敎を危險道德と想ひ、從來の歐化主義に反抗した。歷史付のものならば、事物の善惡を問ふとなく、盡く皆之を貴重することゝなつた。舊物に戀々たるは因循姑息なりと、大膽に打つて出でたる元氣は何時しか消耗し、偶々西洋人がその珍奇を愛する見地より日本在來のものを譽むれば、恰も事物その物に價値あるかの如く考へ、無暗に之を賞美して措かざる保守根性は勃發した。故に科學は西洋の科學たるべし、道德は日本の道德たらざるべからずと揚言する學者は起つた。何ぞ知らんや、こゝに恐るべき衝突の潜伏し居るを。此の時に際し敎育勅語は授けられたのである。

こゝに於てか國民道德の本義は明確となり、その教育方針の歸趣は確定したるが如しと雖も、之を解釋する頭腦によりては、保守主義ともなり、進取主義ともなり、排外主義ともなり、博愛主義ともなり、宗教的ともなり、非宗教的ともなり、一夫一婦主義ともなり、一夫多妻主義ともなり、戰爭道德ともなり、平和道德ともなつた。遠く萬古に鑑み、近く現在を照らす教育勅語も、之を解釋する人々の不見識なるが爲に、國民教育上希望したる程の功を奏せず、日清戰爭の際には一人の非戰論者もなかりしに、日露戰爭には幾十幾百の非戰論者を起すに至つた。僅々十年をも待たずして非戰論者中より大逆事件の罪人を出したるは、畢竟するにその原因の基く所近きにあらざるを知らねばならぬ。是れは國民教育に飽き足らざる不平の曝露といはねばならぬ。この事件に覺醒せられて、頓に小學中學生徒等をして祖先崇拜をなさしむるが如きは、狼狽も亦甚しきものといはねばならぬ。こゝに復々恐るべき衝突は胚胎して居る。

日本の祖先崇拜は歐米諸國の祖先尊重主義とは大にその趣を異にして居る。日本の祖先崇拜は古代宗教の遺物なるが故に、未だその宗教たる性質を脱し居ら

ざるのである。神殿の存する所にはそこに鎮守の神靈ありと思惟する、思惟せざる可らざるのである。この神靈は崇拜者の心膓を照鑒するものでなければなるまい、從つて冥福を祈るは至當の事といはねばならぬ。然るに敎育ある人々には既に此信念は消え失せて居る。神殿は最早昔時の威嚴を有しない。村々の神殿は子守共の遊び塲所に外ならない。此の如き塲所に果して何の威嚴があるだらう。又神殿に祭られて居る神々は皆確實なる史的人物であらうか、多くは是れ神話時代の半神半人ではなからうか。史的研究を用捨なく應用するときは、雲と去り煙と消ゆる神話に外ならざるもの甚だ多いかも分からぬ。斯るものを祖先として崇拜する時代は既に過ぎ去つたのである。唯蓋を以て之を蔽ふが故に、辛うじてその陳腐の形骸を表さざるばかりである。知識ある人民はその既にミイラとなり居るを知る。焉んぞ之に向つて崇拜することができやう。この神話中に日本忠孝の基礎を据えんとするは、實に危險千萬の事ではなからうか。この祖先崇拜は一方に於て基督敎の如き進歩したる宗敎思想に對し、必ず反抗心を喚起し、愈々その頑迷固陋を曝露するに至らんは目に見るやうである。又一方にはそ

の崇拜を冷笑する人々を增加するの憂がある、恐れずんばあるべからず。

國家の精神たる忠君愛國の人々を尊重せんとならば、全然從來の宗敎より區別し、從來の宗敎的儀式を去り、現代式の禮法を以て之を尊重し、クリスチャンも、門徒宗の人々も、無佛無神の唯物論者と共に、謹んで之を尊重するやうに取り計はねばならぬ。此儀式には神官を採用すべからず、宜しく村長、郡長、知事、又は國務大臣が自ら其祭主となり、凡ての儀式を取り計ふやうにせねばなるまい。兎に角全く宗敎より脫却せしむるを要する。而してこの忠臣義士の崇拜と祖先崇拜とは根底からその精神を異にして居ることを人民に知らしめねばならぬ。然るに古代宗敎の遺物たる神社をそのまゝにして崇拜せしめんとするは、人間各自の敬虔心を侮辱するものである。之れが多くの不敬漢を造らなければ幸である。

又崇拜せらるべき人々は史的硏究の銳利を應用して、之を撰擇せざるべからず。彼の南北朝正閏問題の如きは、遠慮なく之を討議するを要する。赤穗藩士の如き果して國民の崇拜すべき資格があるであらうか。兎に角一々詮索する時は案外の結論に至る事もあるべし。北朝忠臣の子孫が果して南朝の忠臣を崇拜するの

精神が發るであらうか。發らずとて之を譴責する譯にも行かないのであらう。況や神話の神々を崇拜するとは到底知識ある人々の爲し得る所でない。然るを頑是なき小學生徒に之を强ゆるは、恰もアダム、エウの神話を信せよといふと何んで異ならうか。

歐米諸國に於ては古代宗敎の始末を付けたる後なれば、國家人民の祖先を祭りても、何も宗敎心と衝突はしないのである。よしや多少は神話的のものが附加したればとて、元々史的事實を有するが故に妨げない、又人々その關係する所の異同に由つて尊重する程度は異同あるも、固より神にあらざるが故に、その全きを望むことは不可能である、各々適宜に之を尊重すればよい。然るに日本にては之を神明視して居る。兒童と雖も之に反抗する理由を有する。眞に困つたことではなからうか。兒童の心底に發し來る信念と衝突する國民敎育ほど將來の禍根たるものはない。又是ればかりにして國民の精神を敎育せんと欲するは、猶一掬の水を以てその渴を滿たさんとするやうなものである。人心の關する所は、人類的である、宇宙的である、民族を以て限るべきものでない。

近頃の祖先崇拜は彼の所謂家族主義と甚だ關聯して居るやうである。家族主義も國家主義と同じく一面の眞理を有すれども、是れ決して人間の凡てではない。人間は個人として偉大なる價値を有する。家族主義は斷じて之を輕視すべからず、之を輕視するときは、個人は恐るべき反抗力を發揮し來つて、不平を鳴らすのである。又人間は世界人類に大關係を有するものである。此大關係は家族主義以上である、國家主義以上である。之を輕視するは則ち人そのものを輕視するのである。驚くべき能力を發揮し來つて、人は彼の所謂家族主義國家主義に反抗し來るは、火を見るよりも明である。

國民敎育は如何に包括主義を取るも、到底人民の凡てを啓發し敎育することは不可能である。當局者は斷じて自らその萬能主義を振り舞はしてはならぬ。通俗敎育や、文藝院の如きものを設置することは、その學校敎育のみに國民の敎育を一任す、べからざるを證するものである。宗敎の如きも之を看過すること能はずして、早晩宗敎院をも設置せねばならぬやうになるやも知れぬ。宗敎は國家の中にその生存を有する以上、固より國家を擁護するは至當の事なれども、宗敎の關す

る所は國家を超越することを忘れてはならぬ。佛教も基督教も本來國家民族を超越して生れたるものである。そが民族の中に入つて民族教化の任を取り、一面民族化する所ありと雖も、その民族を教化し得る所は、却つてその之を超越する性格を有するが爲である。國家は宜しく世界的宗教を尊重せねばならぬ。何となれば世界的宗教にして、始めて國民の指導者たる資格あるからである。若しその資格なく、徒らに國家の進運を妨碍するものあらば、そが民族固有の宗教であつても、國家は用捨なくその存在を奪ふても敢て不當の處置ではない。

之を要するに當局者は明治の初年既に思想界に爆裂彈を投じた。科學的教育は昔時に於てギリシヤ、羅馬の思想界を攪亂した。近代に於て復歐米の天地を攪亂しつゝある。歐米の國家思想も宗教思想も之が爲に痛く攪亂せられたのである。故に識者はその信念の基礎をより深き所に見出し、その同胞民族をして之を覺らしめ、以て泰山の安きに之を置かんと務めつゝある。我帝國思想界の動搖も斷じて免るべからず。一方には科學的研究の自由を與へて、科學的教育を施すが故に、舊來の思想が攪亂せられ、忠孝も何も彼も破船の狀態に陷りつゝあるは、心あ

る者の杞憂する所であるが、之は仕方がない。舊き思想や宗教や習慣を以て之を支へんと欲するも駄目である。科學はその觸るゝ所のものを破壞せずんば止まぬ、しかも科學は破壞そのものが目的にあらざるは明である。宜しく之をして永遠の眞理を發見せしめよ。先づ日本の神話的傳説を破壞し得べき丈は、之を破壞せしめよ。彼の正閏問題の如きも、政治家の利機たらしめず、感情家の絶叫に恐れず、冷靜なる頭腦を以て明確に論斷し得る科學者に一任し、破壞し得らるゝ丈破壞して、史的眞理を發見し、そこに國家信念の基礎を置くべきである。彼の通俗講話の如きは科學的研究の結果を平易に語らしめよ、文藝としても彌縫策に終らしむることなく、成るべく根本的に之を發揮するにあらずんば、青年文學者は之を骨董視するであらう。當局者が一方に科學的研究を鼓吹しながら、一方に彌縫策を講ずるは自から矛盾を作るものである。吾人は當局者が大なる確信を以て根本的研究を遂げ、科學的研究の結果の上に國民道德の基礎を確立せんことを希望する。時宜により儒教主義を再興したり、民族主義を鼓吹したり、家族主義を主張したり、祖先崇拜を奬勵したり、色々と手を變へ品を變るが如きは國家百年の爲に取るべ

からざる所である。當局者は宜しく敎育百年の大計を立て、堂々として國民を指導せんことを希はずんばあらず。彼の時宜に依り右顧左眄するが如きは國家の爲に取らざる所である。

國民道德の進化

皇統の正閏論よりして、端なく藤澤代議士の辭職演說となりたるは近頃面白からざる現象であつた。是れは名分を正うする學者の議論としては、眞面目に討議すべきことならんも、事五百年前の歷史に關するとなれば、孰れと決定せらるゝとも、現代には毫も關係ないのである。一體斯る議論が帝國議會にまで提出せられねばならぬやうになりたるは、過去の歷史を偏重して、現代の國民道德に大關係あるものとなし、古を以て今の標準とせんと欲するが爲である。日本歷史は獨り文學技藝に於てのみ進步し來りたるのみならず、國體に於ても道德に於ても驚くべき進步をなしつゝあるは疑ひない。現代の國民道德よりして過去二千年間の歷史を批判するときは、眞に幼稚なりしものといはねばならぬ。或時代には皇室分爭

の痛ましき事實もある。近江朝廷の時代の如き、保元の亂の如き、源平爭奪の如き國體より見ても、臣民の去就より考へても、甚だ幼稚の時代たるを免れない。所謂勝てば官軍、敗くれば賊と申す時代ともいふべきではなからうか。近江朝廷に奉仕したるは悉皆逆臣にして、大海人皇子の軍に馳せ參じたる者のみが忠良なりとはいはれまい。又保元の亂に於ても義朝は忠臣にして爲義は逆臣なりとはいはれまい。平氏の一族は盡く逆臣にして、源氏の將卒のみが忠臣なりとはいはれまい。若し夫れ戰雲變轉して、勝敗顚倒したらば、どうであらうか、近江朝廷の臣は賞せられて末代までその光輝を放ち、源平全くその盛衰を異にしたらんは疑ひない。

王家と武家との衝突の如き亦甚だ忌々しき事であつた。然れども歷史の發展上亦已むことを得ざりしものとせねばなるまい。此時代に於ける臣民の出處進退の如きは、一概に順逆を以て判決する譯には行くまい。承久の亂の如きはその最も著しきものである。久しく鎌倉の恩顧に與りたる者が北條氏の命を受けて戰場に奮鬪したるは、忠勤を擢んでたるものと賞せられたのであらう。しかして京都に忠勤を盡したる者は、國家の逆徒として刑罰に付せられたのである。

現代の立脚地より論ずれば、日本史上に於ける逆賊の多きことを數ふるに遑ない。是れ恰も三十歳を超え、四十歳にも近き練達の士がその十歳内外の時代を顧るが如きものにて、背上冷汗を催さざるを得ない。日本は此の如き幼稚なる時代を經過して貴き國體を造り、臣民の道徳を發揮し來たのである。建國の當初より國體も完全に出來上り、道徳も圓滿に發達して居りしと思惟するは、毫も歷史の發展を認めざるものゝ空想である。彼の天壤無窮の神敕の如きは日本國家の理想を啓示するものにして、幸に時代を追うて實現し來りつゝあるのである。その圓滿に實現するまでには前途尙遼遠である。吾人は日本史を以て國民道德を完全に敎ふるものと思惟するの謬見を質さなくてはならぬ。

しかのみならず、或る時代に於ては上に萬乘の主君在すといへども、大多數の臣民は各々其直接に奉仕すべき主君ありて、その所謂忠君といふは皇室に奉仕することにあらずして、その藩主に事へたることであつた。文藝界に久しく歌はれたる千代萩の如き、又は忠臣藏の如き、一として王室に忠勤を盡したるものではない。故に封建時代の忠義はその藩主に奉仕する臣民の道德にして、臣民の意識には殆

んど藩主のみありしといふも失言ではあるまい。彼の專ら皇室に忠勤を盡さんと熱中したるものは、當時勤王家といふものであつて、天下の人々に逆賊視せられ、帝國到る處家なきの逆境に居つた。現代より視れば、恰も外國の事かと思はるゝ程である。佐幕たらんか、官軍に屬せんかは、藩主及武士の去就を決する所であつた。僅々五十年前に此樣の事があつたのではなからうか。現代より觀察すれば、全く別乾坤のやうである。此に由て觀れば明治の日本は新に生れたるものである、深き意義を以て復生したる帝國である。固より過去二千年の歷史ありてこそ此新日本は生れたれ、然れども彼れと此れとは大にその樣子を異にするものあるが故に、一々過去の事實を以て現代を律すべからざるは論なきのである。此の如きは亦大に現代の人を過るものといはねばならぬ。五百年前の王位正閏論を提げ來りて、現代人の國民道德を律せんとするは、腐儒の論爭である。論者は甲乙を問はず、憂國の士であることは疑ふべからずと雖も、その識見の乏しきは驚くばかりである。論者は忠君の意義がその適用に於て如何に變遷しつゝあるを知らないのであらうか。

昔時は皇族の神孫にして、人間の種ならざるを尊しと心得、遙に皇族を神視して仰ぎたれども、是れは明治の時代に於ては不可能の事となつた。何んとなれば文部省の科學的敎育は斯る思想を根底より破壞するが故である。去らぬだに世界の新運は斯る思想を迷信となし、斷々として之を排斥して顧みない。彼の神孫天降の古事は生物進化論と兩立することと不可能である。然れども此神孫の傳說が過去二千年の日本歷史を支配したるは疑ふべからず。然らば則ち此神孫の傳說が破壞せらるゝが爲に、皇室の尊嚴はその權威を減ずべきものであらうか。斷じて然らざるのである。現代人は新なる意義に於て皇室の尊嚴を見出さゞるべからず。然らずんば古傳說の破壞と偕に如何なる不敬漢を生ずるやも知れぬ。歷史や古傳說に拘抳するものは其心底や同情を表すべきものありと雖も、その識見は寧ろ悲むべきである。

日本史上に於ける忠君の思想は亦何の動機に動されつゝあつたか。吾人は報恩の一念に想ひ到らずんばあらず。君の祿を食むものは君の爲に死すとは、則ち武士の道德であつたらう。彼の家子郎黨はその君父の家に養はれて居つたもの

である。大事の場合君家の爲にその身を殺すは、則ち大義を立る報恩に外ならなかつた。故に恩顧を蒙らざるものは固より一身を捧げてまでも奉仕する必要はなかつた。是れが武士には忠君の義務ありしと雖も、農工商に至つては藩主とその盛衰興亡を共にせざりし所以である。若しもこの類があつたとすれば、是れは特別なる理由の存するものといはねばならぬ、藩主より特別の恩顧を蒙りたる事實があつたに相違ない。現代に於ては家子郎黨なるものが居らぬ、又過去に於ける士族の如く祿を世々にするものがなくなつた。若し之れがありとするならば、是れは皇室の藩屏と自稱する華族であらう。過去の歴史に鑑みて論ずれば、忠勤を抽んづべきものは少數の華族にして、又その家令たるの外はなからう。斯る時代は既に過去に葬られたのである。國民道徳が此の如き歴史的事實を標準とすべからざるは明である。然るを今にして之を盛り返さんとずるは不見識である。新なる日本帝國は新なる國民道徳の上に建設せられねばならぬ。

吾々は斯く論ずるが故に、過去二千年の歴史を無視せよといふのではない。何んとなれば此歴史ありたればこそ、此大帝國は生れたのである。諺に曰く三ッ兒

の魂は百までと、新日本帝國は偶然に生れ出たるにあらず、既に業に過去二千年の歴史に胚胎せられて居つた。故に誕生後新なる性格を發揮するものありと雖も、從前の道德は獨り之を棄てざるのみならず、新なる意義に於て之を發揮するを要する。例へば前段に述べたる神孫說の如きは、一面科學によつて破壞せられたりと雖も、亦そこに破壞すべからざるものがある。神孫の傳說には深遠なる宗敎的意義がある、敬神の至誠は深く此傳說中に根ざす。天佑は皇祖皇宗の國を肇め給ひしときに既に業に存して居つた。此深遠なる敬神の至誠は建國の生命にして、忠君となり、愛國となるべきものである。凡ての迷信を取り除きたる後、斷じて取り去るべからざる敬神の至誠は、永久に國家の生命たる價値を有する。既に天佑を保全して誕生したる新日本帝國は敬神の至誠の宿る所とならねばならぬ。而して萬世一系の皇室は此帝國の頭首にして、又之れあるが爲に此帝國は生れたのである。然らば則ち此敬神の至誠と忠君の至情とは、切り放たんと欲しても得べからざるのである。是れ古より傳へ來り、磨き來りたる國民道德の源泉ではなからうか。若し夫れ報恩の情念を深うすべきものがあらば、此無限に沸き來るべき

源泉に溯らねばならぬ。是れ即ち敬神にあらずして何んであらう。國家は君臣一意この無限の威靈に對し、報恩の至誠なかるべからず。然るを我國民教育が科學を以てその國民道德の形式を破壞しながら、肯てその根本に溯ることをなさず、その歷史上の形式に拘泥して困却するが如きは、眞に憐むべき見苦しき狀態である。何ぞ破壞すべきものは用捨なく之を破壞し、而して恭しく天地の本源に溯り、堂々として我新帝國の國民道德の基礎を据ゑざる。吾人は吾が國民教育家が甚だ氣迷ひしつゝあるを慨歎するのである。悲まずんばあらず。

神社崇敬の疑問

內務省と文部省とが昨年殊更に神社崇敬を奬勵し始めたのは、定めて時勢に感激したる深き仔細の存する所であつたらう。吾々は當局者が國家の爲にする腐心の程を察せねばならぬ。然れども神社崇敬は古代の遺物なるが故に、科學教育を受けつゝある今時の者には、明確なる理由を示さずして之を强ふる譯には行くまい。單純にも祖先が崇敬したりとの理由を以て、吾人に之を崇敬せよといふが

如きは、今時の日本人を馬鹿にするものである。神社崇敬には幾多の疑が起らないのであらうか。

第一に起るべき疑問は神社崇敬は宗教なるか、しからざるかである。明治政府從來の方針によれば、神社を以て宗教以外に獨立せしめやうとしたかの如く思はれる。果して然からんか、神社崇敬は斷じて信教の自由を妨ぐるものではない。耶佛の異同を論ぜず、信教の一事は各人勝手に營み得べきことである。神社崇敬を以て之に干渉すべからざるは明々白々である。神社崇敬と信教自由とは衝突なくして何處までも並行すべき筈のものである。此の如く神社崇敬をして宗教以外に獨立せしめんと欲せば、全然之れより宗教的分子を取り除かねばならぬ。若し日本人には日本の神あり、外教の神を信ずるは、日本の神々に對して不敬なりと主張するものあらば、是れ取りも直さず神社と宗教とを混同するものである。當局者は斯る愚論の跋扈を取締る責任があるのである。苟も信教の自由を憲法に於て公言したる以上は、若しこゝに神社崇敬を以て帝國臣民の信教自由を妨碍するものあらば、神社崇敬の奬勵者たる當局者はその責任の甚大なるを自覺せね

ばならぬ。世間には神社と宗教との區別を辨へず、神社崇敬を以て信教を妨碍し、以て帝國憲法の權威を無視せんとするものもある。當局者は果して之に注意し居るだらうか。神社崇敬は全然宗教より區別するにあらざれば、之を奬勵する當局者自からが信教の權利を奪ひ、憲法の違反者となる恐れないともいへぬ。吾人は二者の明確なる區別を聞かんと欲する。

吾人は當局者が神社崇敬に古代の迷信が附隨し居るを承知し居るや否やを疑ふ。日本の神社は從來神明の鎭み安んずる所なりと思惟せらる。然らば個人の靈魂不朽は先天的に承認せられて居る筈である。古來鎭魂祭なるものあり、又近時招魂祭なるものあり、是れは孰れも靈魂不朽を承認して居る仕方である。しかしてこの靈魂不朽は物質不滅の如きものにあらずして、個々別々の靈魂不朽を意味するや疑ひない。此の如き信念は從來の神社よりは除き去られない。此の信念を除き去るならば、神社は忽にしてその尊嚴を失ふのである。當局者は果して靈魂不朽の明確なる信念を有するのであらうか。若し是れなからんか、神社崇敬の主張は是れ己を欺き又人を欺くものといはねばならぬ。神社崇敬は果して文

部省の眞面目に重大視する所であらうか。然らば上は大學教授より下は小學教員に至るまで、苟も靈魂不朽を承認せざるものは、斷じて教鞭を執る資格なきことゝなる。文部省は果して不信の教授教員を免職する勇氣があるだらうか。さて靈魂不朽の信念は宗教問題であらうか、將た國家問題であらうか。若し夫れが宗教問題であるならば、之を信ずると信ぜざるとは個人の自由である、誰れも之に干涉し、又は之を强ゆる譯には行かぬ。若し夫れが果して國家問題であるならば、苟も日本人たるものは之を信せねばならない。然るに內務省と文部省とが神社崇敬を奬勵するのは、從來の信念を承認した上の事とせねばならぬから、是れ取りも直さず宗教問題に干涉するものといはねばならぬ。靈魂不朽の信念を神社より取り去らざる限りは、神社崇敬は依然として宗教問題である。當局者は果して此重大なる宗教的分子を神社より除き去る識見と勇氣とを有するのであらうか。

しかのみならず、日本の神社には、靈魂不朽以上の意味なくてはならぬ。何んとなれば次に起るべき問題は某々の靈魂が神殿の中に鎭み居るといふことゝなるのである。靈魂不朽を信ずるものも、その靈魂が特別の意義を以て特別なる家屋

に鎭み居るといふことは、容易に信じ得べき所ではない。神社崇敬を奬勵する當局者は果して之れが證明を立て得ることが出來やうか。この信念は民族幼稚の信念にして、本來證明を要する價値あるものではない、しかし神社崇拜を奬勵する當局者は必ずこの幼稚なる信念を價値あるものとするものである。然らずんば之を奬勵する筈はないのである。神殿に於ける靈魂鎭在の信念は今日より之を見れば、則ち迷信である。當局者は國家の爲めに尙此迷信を鼓吹せんと欲するのだらうか。此迷信には更に又面白き迷信がある。そは他にあらず、靈魂分(ミタマワケ)のことである。同一の神靈が一個神社に鎭在することすら、極めて訝しきことであるが、所々の神社に靈魂分(ミタマワケ)せらるゝの一事に至つては、全く迷信といはねばならぬ。然れども之を信ぜざれば、同一の神靈を二ヶ所以上に祭ることは不可能である。此迷信を承認せざる限りは、神社の尊敬と神聖とは保たれないのである。神社崇敬は果して古代の宗敎觀念より脫却せらるべきであらうか、吾人は疑ひなきこと能はぬ。當局者の意見果して如何。

日本の神社には必ず神體なるものがある。鏡劍玉等卽ち是れである。幼稚の

人々はこの神物に神靈が宿るとの信念を有する。世界何の民族を問はず、蒙昧の時代には此の如き信念があつた、之をアニミズムといふ、卽ち死物を生物視し、神靈の身體と視するのである。日本の神社には今尙此信念の遺存するではなからうか。又トテミズムと稱して、狐狸猿蛇等の動物を祖先とすることがある。我日本人の中には此類の動物を祖先として崇め奉れるものがあつた。故に祖先崇拜の鼓吹者は深く此邊の事を硏究して置かねばならぬ。若し十把一束に祖先崇拜を鼓吹せんか、是れ我明治盛代の人民をして動物崇拜の愚を學ばしむることゝなる。是れは吾人を侮辱するものにあらずして何んであらう。此の外フェテシズム鏡劔玉等に奇妙不思議の靈能ありと信じ、驚くべき奇跡をなすものと思ひ、眞面目に之を畏敬するものもある。之れは野蠻時代の崇敬にして、現代の蠻民にも依然として存するのである。我日本の神社には是等野蠻時代の遺物が崇嚴なる神體として、神殿に飾られ居るではなからうか。是等の信念と科學思想とは天地も啻ならない。我日本の當局者は果して是等迷信の巢窟たる神社を我明治盛代の人民に崇敬せしめんと欲する意あるだらうか。吾人はその然らざるを知ると雖も、當

局者にして若し是等の迷信を除き去らざる以上は、神社崇敬の實行を奬勵す權利ないのである。從來の神社にはこの迷信あることは疑ひない。本居宣長の玉鉾百首の中に

神といへばみなひとしくや思ふらん
　鳥なるもあり虫なるもあり

とあるを以て見れば、日本の神社には此の如き愚なる動物崇敬も混同し居るが故に、神社崇敬の奬勵は正しく迷信の奬勵となるのではなからうか、又虛僞の鼓吹とならないのだらうか。當局者は果して此邊に留意したことがあるだらうか。

以上述べたことのみならず、天體及び自然界の現象を神として崇敬することは、アニミズムの一種として見るべきものである。此迷信は古代より傳へ來つて、日本神社の眞髓となつて居るもある。日輪は申すに及ばず、月輪も暴風も、雷鳴も神靈あるものとなし、之を崇敬したのではなからうか。本居宣長の歌に

いやしけどいかづちこたまきつねとら
　龍のたぐひも神のかたはし

日本の神社には現代の人より見れば、實に驚くに堪へたるものをすら裝置することがある、鏡劒玉を始として狐狸の屬、甚しきは生殖機をも安置することがある。內務省や文部省は神社崇敬を獎勵せんと欲する以上は、先づ神社の神體調査をなして、一大改革を斷行せざるべからず。所謂神體なるものには取り片付くべきものもある。若し之を斷行することができないならば、其希望に反して驚くべき不敬漢を生じ、虛僞の奴を作らんは、智者を待つて知らないのである。

此外尙研究すべきものがある。日本の神社には史的事實ならざる神話より成立つ想像を神視するもあるだらう。元來古事記や日本書記にあるものを、そのまゝ史上の事實として信ずる時代は、旣に遠き昔しと過ぎ去つた。現代の科學的研究法を應用し、精密に古代の傳說を批評したならば、吾人はその神社に祭られ居るもの丶多數が妄誕不稽となるを驚くのであらう。是等は悉皆神殿より除き去らるゝを要する、然らずんば我が敎育ある明治盛代の崇敬を鼓吹すべからざるや明である。內務省や文部省は果して之を斷行する勇氣と確信とがあるだらうか。然らずんば當局者の獎勵は深き根底と厚き眞實とより出たものとは思はれない。

當局者は帝國臣民の崇敬心を古代迷信の上に築いてはならぬ、宜しく科學研究の結果の上に建立すべきであらう。是れ正しく現時の盛代に爲すべき事ではあるまいか。

之を要するに政府當局者が帝國臣民の恭敬心を高調せんと欲し、淺薄なる唯物主義以上のものを青年男女に與へんとするは、正しく明治敎育主義の過れるを看破したるものには相違ない。吾人はその識見の寧ろおそかりしを悲しむのである。國家の忠臣義士を尊重し、碩學名工を頌譽して、以て國民的道德の生命を發揮せんと試むるは、所謂忠孝の道を顯揚するものであつて、吾々も當局者の意見に同意を表するを躊躇せぬ。然れどもその目的を貫徹するの方便として神社崇敬を携へ來りたるは、日本現時の狀態としては亦止むべからざるものもあらうが、こゝには深慮遠思を要することである。若し輕卒に之を實行せんと欲すれば、却つて忠孝の道を傷ふものとなる。以上論じたる如く、神社に祭られ居る、所謂神明なるものは、神話や荒唐の傳說を旨とし、アニミズム、トテミズム又はフェテシズムなどの迷信に由れるものの多きが故に、之を現代の敎育ある人々に强ゆるは、恰も或人に

幼時の犬張子人形、竹馬等の娯樂を強ゆるが如し。盛代の人民を馬鹿にするものにあらずして何んであらう。甚しきは信敎の自由を奪ひ、憲法の權威を無視する恐れともなる。忠孝の道を顯揚するに際し、古代宗敎の遺物たる神社崇敬を奬勵するは、却て忠孝の道そのものを閉塞することゝなるの憂がある。當局者は我精神界に正反對なる復古主義と進取主義、迷信と科學とを投げ入れ、我思想界を益混亂せしむるものではなからうか。明治の精神界を攪亂するものは果して誰れの所爲だらうか。神社崇敬を奬勵する者は是等の疑問を辯明する義務がないのであらうか。

祖先崇拜か子孫崇拜か

祖先崇拜に對し、子孫崇拜をいふは餘りに突飛のやうなれども、虚心坦懷、宇宙の道理を照らし來れば、祖先崇拜よりも子孫崇拜の方が寧ろ當然のやうに思はる。崇拜は目上に向つて捧ぐべきもの、目下に臨んで與ふべきものでない。祖先は目上にして子孫は目下であるか。試に世界人類史に就いていへば、支那人などの考

へたやうに、人類は果して光明界より墜落して漸々暗黒界に陷りつゝあるであらうか、又は近世科學の敎ふるやうに、人類は野蠻より進歩し來つて、段々文明に赴きつゝあるであらうか。前者は舊式の人類史觀であつて、後者は新式の人類史觀である。舊式によれば祖先は子孫に優るもの、新式によれば子孫は祖先に優るもの、舊式によれば祖先は天降つて地上に來つたもの、新式によれば子孫は劣等なる祖先の進歩し上達したるものである。金の世界一變して銀の世界となり、銀の世界一變して銅の世界となり、鐵の世界となり、泥の世界となるが如き歷史觀を有する民族は、その過去を追想するとき、聖人たり、神々たる祖先を觀想するが故に、うたゝ敬慕の情に堪へず、崇拜の念亦禁ずべからざるものがある。是れ心理上自然の發作にして至當のことゝ思はる。然れども人類世界は泥より一轉して鐵となり、再轉して銅となり、銀となり、金となりつゝありと觀想するものより過去を追想すれば、祖先は蠻民なり、野人なり、禽獸に近きものなり、之に對しては敬慕の情を起さんと欲するも得べからず、何の權威も之を崇拜せしむることは出來ない。

加之人類の祖先はアダム、エバにもあらず、諸册二尊の如きものにもあらず、天之

御中主神の如きものにもあらず、猿族なり、下等動物なり、蝌斗（オタマジャクシ）なり。四十年前までは報本反始といふて、古に復るを何よりの目出度ことと考へたが、現代となりては、過去に思想を溯らする丈、輕侮の情を起さねばならぬやうになつた。この感想は帝國の科學的敎育主義に基くのである。此に由つて觀れば日本民族の如きは、幸ひに進歩發達の歴史を有するが故に、過去の見上ぐべきものにあらずして、却つて眼下に見下すべきものなるを知る。しかして子孫は此進歩の理法に從つて上達すべきが故に、體格に於ても品格に於ても、智識上、心靈上、凡ての點に於て遙に現代の人々に優る筈である。吾人の理想として仰ぎ慕ふべきものは過去にあるにあらずして、將來に存するのである。左らば吾人の崇拜すべきものは祖先にあらずして、子孫に存するといはねばならぬ。祖先崇拜は帝國の科學的敎育主義にも反し、又社會進歩の理法にも違ふものとなる。宜なり、祖先崇拜が近世に於て旣にその宗敎たる價値を落し、又その資格を失ふたのみならず、その倫理的價値に於てすら、亦大に制限を加へねばならぬやうになつた。

　祖先崇拜は宗敎として全然其價値を落したのみならず、之に伴ふ迷信の多きが

爲に、宗敎としては之を排斥せねばならぬ。苟も之を宗敎として觀ずるときは、祖先の靈魂は佛壇又は神棚にましまして、家族を鑒視すると認めざるべからず。從つて朝夕之に茶水を捧げ、食物を供ふるが如き、勢ひ古代の迷信を奬勵するやうになる。此の如き形式には人情の美はしきものありと雖も、道理の眼を開いて見れば、最も憫むべきものといはねばならぬ。客觀的に神佛は佛壇や神棚に存在するにもあらず、又歸依者の供物を受くるにもあらず、之を祭るは全く空を擊つに外ならず、眞に憫むべきことではないか。歸依者は神を祭ること神在すが如しと念ずるとも、是れ假想のみ、その觀想は全く迷信に捕はれて居る、その主觀的狀態は氣の毒の至りである。よしや父母を愛慕する至情は之に由つて多少安んずる所あらんも、その理性を晦ますことの多大なるを如何せん。理性を傷ふと至情を安んずると、さてその矛盾、その衝突、その苦痛、その煩悶の甚しき、殆んど濟ふべからざるものがある。

祖先崇拜は全然其宗敎的分子を棄て去らざるべからず。然らざれば祖先崇拜に含有する眞理は心ならずも迷信の中に葬られ、又眞の宗敎は之れが爲にその發

展を妨げらるゝのである。日本の佛敎はこの祖先崇拜を利用して傳播したれども、佛敎本來の面目は却つて之れが爲に發揮しなかつたやうである。祖先崇拜もその宗敎的分子を放棄しなかつた爲に、國民の大なる感化力とならなかつた。祖先崇拜はその宗敎的分子を去り、全く忠孝と結び付かなければ、その倫理的要素は何時までも發揮しないのである。

靈魂不朽を否定する譯にはあらざれども、祖先崇拜は强ちに之を要しない。この一要素を取り除きたればとて、その道義的効力は失はないのであらう。祖先崇拜は靈魂不朽を信ずると否とに關せず、子孫たるものゝ旨と心得べきことゝなさねばならぬ。既に靈魂不朽の信仰より區別した以上は、佛壇又は神棚を置いてこゝに供物を捧ぐる必要はない。それのみならず、元來佛壇も神棚も必要はないのである。或は寫眞を飾り、肖像を置き、又は掛物を掛くるもよし、望みによつては何物を使用せずともよからう、要は祖先に對する自己の態度を明にし、子孫たるものゝ責任を自覺するにある。何んといふても自分一己が偶然天より降つて來たのでもなく、地より沸いたのでもない、祖先の系統を受けて生れ來たものなれば、祖先

々の性格に存するものは善惡共に之を受け繼いで居る。萬物進化の理法に基き、人類發達の精神を旨とし、祖先に存する善良なるものを發揮するは子孫たるものゝ職分である。況んやその身體を傷け、その智德を晦ますが如きは、子孫たるものゝ恐るべき罪である。祖先の過失よりして或は疾病、或は惡習、或は惡德を遺傳することあるも、是れ固より祖先の本心にあらざるを以て、之を矯正し又は撲滅するは子孫たるものゝ祖先に對する職分である。故に祖先崇拜は全くその宗敎的分子を棄て去りて、偏へに倫理的とならねばならぬ。

祖先を追想する事は强ちに家族のみの旨とする所にあらず、之は亦國家にも應用すべきである。國家は一朝一夕にして生れ出たるものにあらず、幾多世紀を通過して形成したるものなれば、國家にも亦自から祖先がある。有史以前の事は邈乎として知る可らざるが故に、何んとも致方なし、唯有史以後の人物となれば、上は主君を始として下は人民中國家經營上功勞ある者に至る迄、國民の忘れんとして忘る可らざるものである。此の如きは國家の良智良能を發揮したるものなれば、國民はその人格を尊重し、その德性を受け繼いで、大に祖先の志望を貫徹するに骨

折らねばならぬ。國家の祖先に過失あり、誤謬あることは免るべからざることなれば、子孫たるものは祖先の仕事を一々繼承すべき義務はない、否宜しく之を矯正し、改革するの職分がある。この意味にて祖先の經營した國家を維持し、擴充して子孫に讓ることは、國民がその祖先に事ふる所以である。此の如きは國民道德にして宗敎にあらず。然れども從來の祖先崇拜には宗敎の分子多くして、倫理の分子が少ない。國家有事の際には偶々倫理約要素の發揮を見るに至れども、平時は迷信の横行に外ならない。此倫理的意義に於ける祖先崇拜には必ずしも神社の必要はない、然れどもこれあればとて別に差支はないのである。要は國家の祖先崇拜より全然その宗敎的分子を除き去ることである。然らざれば國民道德と善良なる宗敎との發展に大なる妨害を與ふるのみ。從來の祖先崇拜を鼓吹する事は害多くして益少ないのである。

國も家も理想として憧憬し、欽望し、實現すべきものは過去にあらずして、將來にあるを忘れてはならぬ。過去の祖先に對する吾人の責任は消極的にして、將來の子孫に對するものは實に積極的である。吾人は祖先に對して誇る所のものある

も、子孫に對しては恥ぢねばならぬことゝなる。吾人は家の子としても、祖國の子としても、子々孫々の爲に克己し、修養し、智を開き、德を積み、斷じて子孫の血脈に害毒を遺さゞるやう奮勵するを要する。若し自から守ること至らず、自から愼むこと至らず、自から研くこと盡さず、子孫に害毒を遺傳するは則ち子孫に對する吾人の罪である。吾人は將來永久に發展すべく、又は墜落すべき運命を有する家と國との子孫を豫想するときは、戰慄せざらんとするも得んや。吾人の責任は祖先に對するよりも子孫に對する方、寧ろ重且大なるを思はねばならぬ。祖先なくしては、吾人今日あるを得ずとすれば、子孫なくしては、吾人の最も仰慕する理想は遂げられないのである。吾人の小身を授けたる祖先に對し、報恩の情切なるものあらば、吾人の大身を形成する子孫に對し、謝恩の情更に大ならざるを得んや。若し夫れ崇拜すべきものあらば、吾人は過去に向つて捧ぐるよりも、寧ろ子孫に向つて捧ぐべきではあるまいか。孔子が顏回をうしのうて慟哭し、天予を亡ぼせりと涕泣したる心情は、實に後世に對する聖人の至情といふべきであらう。有望の子孫なきときは、吾人は死したるも同樣である。吾人は祖先の中に子孫を見るよりは、寧

ろ子孫の中に祖先を見るべきである。此の如きは萬物進化の理法に從ひ、帝國の科學的教育主義に基くものである。吾人は日本國民が支那流の祖先崇拜を脱却して、全くその方向を一變し、國家社會の理想を將來に實現せんことを旨とするを望む。吾人は我が同胞がその思を過去の神話に馳するよりも、寧ろ將來の理想に集中せんことを祈る。日進月歩の日本少壯國民の思念を縛して、過去の臺前に平身低頭せしむるは、之に僞善を强ゆるものである。諺に曰く子を持つて始めて父母の恩を知ると、自然は如何に子孫を重視するものぞ。彼の復古主義を以て帝國の進取主義を壓せんとするが如きは、自然の欲望に反し、進化の理法に悖るもの、教育家の最も愼むべき事である。吾人は國民教育の當局者に向つて切にその注意を促さんと欲する。

帝國教育家の反省を促す

我が帝國の教育が智育に於て多少の成功を奏しつゝあるは、皆人の承認する所なれども、吾人をして忌憚なくいはしむれば、智育に於てもその自修的又自發的訓

練の乏しきは、即ち我が現代敎育の短處にして、從つて、活世界に於ける應用の才を發揮する機會を與へて居ない。我が敎育主義が餘りに注入的にして、外より敲き込み、學生の腦髓を畏縮せしむることは、獨り自發的才能の發達を邪魔するのみならず、又意志の發育を賊ふに至る。帝國大學の法學士を以て直に無學なる小僧番頭にも及ばぬかの如く無用の長物視するは、餘り苛酷なる批評なれども、比較的に役に立ち難いといふのは明白なる事實らしい。是れは大學より恰も生れ出でたるばかりの普通並々の學士を評したるものにて、實驗といひ熟練といふ學問をさせて見ざる限りは未だ分らない。又特別なる人物は當初より出色の才を顯はして居るが故に、一概には論じられないが、現代の智育に自修訓練の足らないことは、亦大に注意を要すべきである。注入的にもせよ、兎に角智育には十二分の勢力を用ひつゝあるを以て、永久殘るべき多少の知識を授け與ふることは、誰れも承認せねばならない。吾人は智育に付いて今詳に論じやうとは思はぬ、若し夫れ吾人の言はんと欲する所を遠慮なく言ふならば、我が帝國の敎育はその德育に於て全然失敗と論斷せざるを得ない。

昔時士族の子弟はいふまでもなく、平民の子弟と雖も、人間には金錢以上のものあるを知つて居つた。彼等は一種の恩義を重要視して居つた故に、金錢ばかりを以て彼等を動かすことは出來なかつた。佛敎にては四恩を說き、儒敎にては三恩を敎へた。故に報本といふが如き、もしくは報恩といふが如き道德が自然と行はれ、宗敎も道德も謝恩といふ一義に基いて、廣く人心を支配して居つたのである。然るに四恩の道德は何時とはなしに、學生の間に看過せられ、愚夫愚婦にのみ依然として遺つて居るが、多少の敎育を有するものゝ頭腦よりは漸く消え去りつゝある。現代の賢き青年にして四恩の意義を解し、之を心底に修するものは幾人あるであらうか。我が帝國の德育は此四恩に代ふるに如何なる道義的勢力を適用しつゝあるか、吾人の聞かんと欲する所である。現代の青年は金錢を追ふて奔走して居る。その多寡に因て自己の立場を定めんと欲するは恰も水の下に就きて流るゝやうである。金錢といへば昔時より武士の賤めたものなれば、今にも公然と金錢萬能主義を唱へ、五倫よりも重しとし、金錢の多寡を以て旦暮にその進退去就を決し、朝には此店に居り、夕には彼店に移り、今日は此校に務め、明日は彼校に轉ず

るなど、公然とは去就を定め得ざれども、其利己的實情を蔽ふ爲に、何とか他の名分を拵へて、不斷移々轉々するもの擧て數ふべからず。昔時の武士道より觀れば、墮落も甚しく、奈落の底まで墮落したるものといはねばならない。然れども吾人を以て見れば陰に金錢を旨として、陽に何等かの名分を立つるよりも、寧ろ公々然として金錢を標榜するは、その人の德に於て反て失ふ所少なしと思ふ、何んとなれば僞善ほど見苦しき不正はないからである。利己主義と名分主義とは相提携して益々人を墮落せしめつゝある。現代の德育は四恩主義に代ふるに拜金主義を以てするのであらうか、果して然らば吾人亦何のいふべき所もない。苟も拜金主義を以て社會の公德とするを恥づる所あらば、帝國の敎育主義は何の道德を以て四恩主義に代へんと欲するのであるか、吾人の聞かんと欲する所である。敎育家は無雜作に答ふべし、即ち忠君愛國なりと。然り忠君愛國は敎育家の寸時も忘るべからざることである、然れども今の所謂忠君愛國は昔の四恩の如く、日常彝倫の精髓となつて居るのであらうか。今の青年は落第するとき、又は青樓に遊ぶときに當り、果して不忠の罪人なりと自覺するや否、又その怠慢にして品行の修らざるを

恥ぢ、愛國心の乏しきものなりと自反するや否。忠君愛國は戰事道德として賞讃すべき價値を示したるのであるが、日常彝倫の道德としては未だ見るべきものなし。さらば忠君愛國主義は昔時の道德に代はる丈の勢力を有して居ない。帝國敎育の府たる帝國大學及高等師範の學生にして、專ら利己主義を談じ、務めて一身上の事にのみ汲々たるは、皆人の知る所である。彼等が日常の行動を支配する道義心は忠君にもあらず、愛國にもあらず、また昔時の四恩にもあらず、唯々如何にして身の利益を增加し、如何にして自家の幸福を保全すべきかといふことである。吾人は彼等の自家經營を非難するものにあらず、自家經營の動機以上の道義心なくしては、帝國々民敎育の重任を全ふすることは能はざるをいふのみ。

吾人は敎育勅語を拜讀するに、父母に孝、兄弟に友、夫婦相和し、朋友相信じとあるが、この道德は實際何位日常彝倫の生命となつて居るのであらうか。父母に孝とはあるが、不孝なる子女の多數なるには驚かざるを得ない。況んや信義地に落ちて朋友相賣るが如きは、殆んと世間の怪まざる所である。社會の道德は平凡以下に墮落しつゝあるが、學生間に毫も之に反抗するの力なきは如何。吾人を以て見

ればし社會は飮むことと食ふことと着ることと住ふことに汲々として是れ日も足らないのである、別言すれば淺薄なる情慾を遂け行ふことを旨として居る、所謂現實主義の横行に外ならない。現代の人々は豚の食する豆腐のからに飽き足るを以て人生の最も確實なる處世法と心得、文學者もしか歌ひ、倫理學者もしか講ずるのである、卽ちパン問題より切にして急なるものなく、又眞實にして難有いものはないと論ずる學者は決して少くない。然かして世間には法律より嚴格なるものなく、之を犯すものは罪あり、之を犯さざる限りは、青樓に遊ぶも罪なく、幾多の妾を蓄ふるも罪なく、公々然として天下に往來するも、別に恥づべき所なしと主張する敎授もある。文學者も理學者も倫理學者も種々の口實を設けて、嚴格なる良心の明を蔽ひ、その聲を輕蔑して虛妄視するのである。

此の如く心裡に發生し來る理想を虛妄視し去つて、唯觀面に浮び出る皮相の慾情を以て最も確實なるものとし、競うて之を遂くるに汲々たり、固より神輿の湧き來る筈はないのである。帝國の敎育は果して學生靑年の心裡に神輿を喚び起す動機を有して居るか、情慾を遂ぐるには別に道義的意志の鍛錬を要しない。情慾

は情慾以上の意志より制裁を受くるにあらざれば、自滅するに外ならない。此の如き自滅性を有する情慾の横行する所には、斷じて神輿は湧かない。是れ現代青年の意氣が振はない一大理由である。神輿の湧かざる、意氣の振はざる所には、勇健なる意志を見出すことは望まれない。現代青年の如く意志の薄弱なるは日本の史上稀に見る所である。自然主義一派の文學が流行するも正しく意志の軟弱を證明するものである。七八年前美的生活の流行に飽き足らずして、頓に宗敎に心を動したることもあるが、學生青年は一片の理想を示され、一時はその光りに動かされて、渇仰の情念を發したのである。しかも之を實現するには大なる意志の奮鬪を要せねばならない。彼等は幾何もなくして之に堪へ兼ね、或は神秘主義に入り、朦朧としてその目的物を捕捉したるかの如く思惟したるものもあり、或は理想は到底捕ふべきものに非らずとあきらめ、奮鬪の生涯を擲つて、易々たる現實主義に滿足せんとするものもある、その忍耐持久の意志に乏しきこと言語に絶す。畢竟帝國の敎育は心意の能力を啓發するを旨とせざるが故に、持久奮鬪の精神に乏しく、忽ち敗北して淺墓に悲觀し、若し夫れ神經衰弱を免るゝことを得れば、復忽

ち心機を一轉して現實主義に安せんとする。彼の運動家の如きも體格の養成に於ては得る所あれども、その慾情を制馭する意志の勢力には殆んど皆無かと思はる。體格の强健と意志の强健とは宜しく伴ふべきであるに、今の所謂運動家は道義的意志の修養なきが故に、暴飮暴食、更に進んで放蕩無賴を以てその身を持ちくづすもの甚だ少くない。運動家が兎角その身を持ちくづして、亦殆んと救ふべからざるを作るは、道義的意志の敎養に於て大なる缺點あるが爲である。

之を要するに我が帝國の敎育主義は注入的智育に偏して、意志の發達を妨碍し、現實主義を重んじて、神輿の發生を塞ぎ、道義を輕視して、制慾の練修を怠り、終に社會の腐敗に抵抗する能力を發揮することと能はず。學生をして社會の滔々たる濁流に陷らしむる、しかして僅々在學中の學生を保護するものあれば、それにて敎育家の能事了れりと思惟する、その靑年學生をして腐敗せる社會と奮鬪し、健全なる社會を作らしむるといふが如きは、蓋し現代敎育家の夢想すらなすと能はざるやうである。帝國の敎育家も亦墮落せる現實主義に滿足するを以て其本分と心得るのであらうか。東洋多事の際吾人は帝國の運命を思ふが故に、こゝに敎育家の

反省を促さんと欲するのである。

國民の發展に於ける敵愾心と博愛心

現代の人を諭して無抵抗主義を取れと主張するは、猶虎豹の多き山林に生活する蠻人に干戈又は銃砲を取る勿れといふやうである。眞の平和は此の如き無抵抗主義より無雑作に生じ來るべきものではない。萬國の平和は形式的に陸海軍を無視することの一事に由て容易く贏ち得られない。さりとて亦敵愾心ばかりを鼓吹して國家を起さんと欲するが如きは、則ち萬國を敵とするものにて、假令幸にして自から奮興の機會を得ることありと雖も、その一大目的を達したる曉には、忽ち自滅の兆をあらはすものである。何となれば敵愾心の中には既に自滅の種子を孕み居るからである。

眞の平和はその根據を心靈の奧深き所に有するが故に、容易く形式的に社會の表面に顯はるべきものでない、必ずや靈と肉との調和より來るべきである。しかして靈と肉との調和は智情意の最も圓滿なる發育に待たねばならぬ。智情意の

圓滿なる發育は則ち幾多の奮闘錬磨を實驗するより來る。吾々一個人の胸中に多くの苦闘を有する限りは、萬國の平和は斷じて望まれない。人類の現情を觀るに、國家そのもの丶中に苦闘があり、家庭そのもの丶中に紛擾があり、個人そのもの丶中に惡戰がある。萬國平和の如きは前途猶遼遠、僅に干戈砲銃を取り去り、常備の軍隊を解散すれば、必ず來ると思惟するが如きは、則ち痴人の夢にあらずして何であらう。平和なるものは最初より平和として存在するものにあらず、此の如き平和は抽象の假定のみ、架空の想像のみ、實在ではないのである。遂々然として之を追ひ求むる如きは、妄想に魅せらる丶ものと謂はねばならぬ。平和は平和の結果にあらず、平和は惡戰苦闘の結果である。惡戰苦闘を厭ふて平和を求むるは、勤勉力行を厭ふて衣食を求むると一般にして、則ち求むべからざるものを求むるものである。彼の己れ自からを愛せずして、猥りに博愛主義を主張するも、亦同じ一味の人といはねばならぬ。一個人の智能とてもそう單純ではないのである。勃々と起り來る思想の眞僞を判別することは容易の業にあらず、朽つべきものあり、殘るべきものあり、廢るべきものあり、保つべきものあり、永久なるものあり、暫時な

るものあり、廣大なるものあり、狹小なるものあり、圓滿なるものあり、偏頗なるものあり、千差萬別にして亦各その理由を有して居る。生存競爭、優勝劣敗の戰鬪は一個の智能中にも存する。情感に於ける喜怒哀樂愛惡欲の七情の如きも元始より平和を保全するものではない。その生存競爭は時々刻々の間にあり、聖人にあらざれば、その圓滿なる平和を維持すること出來ない。善惡邪正を判別取捨する道義的意志の作用に至つては、更に複雜なるものあるを覺ゆ。この間の惡戰苦鬪は終に人をして無限の煩悶又は懊惱に陷らしむ。吾人一個の精神が未だ仲々平かならざるのである。この平かならざる精神と肉體との調和に至つては更に甚しき惡戰苦鬪を要する。精神をして肉體に勝たしめざる限りは、身を終るまでその調和を見るに至らないのである。吾人は斷言する、人は戰鬪的靈生である、戰鬪に由らざれば人たるを得ない。基督曰く我は刄を地上に出さんが爲に來れりと。基督敎は人生に於ける戰鬪の意義を最も痛切ならしむる宗敎である。義と和と聖靈に由れる悅樂の天國は人生戰鬪の恩賜である。家庭の平和も、國家の平和も偉大なる人格の惡戰苦鬪して齎ち得る所のものである。家族又は國民そのもの

が自から奮戰勇鬪するにあらざれば、その圓滿なる平和は斷じて期すべからず。既に精神上に慘烈なる戰鬪がある、彼の干戈及銃砲の論の如きは末葉のみ、そが現代に必要なるは論を待たないのである。平和の神を美人視するはよいが、之を柔弱なる美人視するは大に不可である。平和の神は神聖にして嚴峻犯すべからざるの貞操を有する美人である。

家族も國家も內憂外患に對して惡戰苦鬪の經驗を要する。從つてそが外患に對する敵愾心は亦之を鼓吹するの必要がある。獨逸軍人が日軍の露軍に勝ちたる秘訣を論じて曰く、詮じ來れば「唯こん畜生」の一言にて言ひ顯はさると。「こん畜生」は敵愾心の最も激烈なるものである。日本人は動物に對しても、人間に對しても、時としては非情の物質に對しても、其の自からを害するものに對しては、「こん畜生」の言を吐く、實に小兒より大人までを通じての敵愾心である。日本人は「こん畜生」を以てその身を起し、「こん畜生」を以てその家を起し、又「こん畜生」を以てその國を起す。その敵愾心の壯烈なるは恰も野蠻人の鎗を提げ、劍を撫し、烱々たる眼光をひからして他人を疾視する風貌に似て居る。「こん畜生」を以て言ひ顯はされたる

敵愾心は共通の敵手に對しては、人をよく團結せしむるを得。故にこの敵愾心は大小に關せず、團隊を形作つて共通の敵を防ぎ、且之を滅ぼすの力を有する。然れども既にその目的を達したる曉に於ては、忽ち徹すべき弱點を示す。その敵愾心はその共通の敵を防ぎ得たるとき、必ず相互に疾視するの已むべからざるものがある。日本人がその內國に於ても、外國に於ても、又隣邦に於ても、百人以上集合する所には、必ず個人々々相互に、又は黨派々々相互に疾視し、「こん畜生」の根性を煽り立て、罵詈し、讒謗し、妨碍し、攻擊し、その同胞相鬩く狀態は、殆んど他國人に見ざる所である。吾人は我同胞兄弟が遠くは北米の大平洋沿岸に於て、近くは韓半島に於て、官民相隔離し、黨派を作り、仲間を拵へ、互に相誹謗し、葛藤し、打ち壞すことの如き、如何ばかり帝國の發展を阻害して居るや知るべからずと思ふ。要路の人が之を統御するの骨折に至つては、殆んどその能力の半を盡すものであらう。若し夫れ官民を問はず、職業を論せず、我同胞がその步武を揃へて進むときは、韓半島を同化する如き、決して難事にあらず。且又世界の人類を敵視して、世界に蔓延せんとするが如きは、自から好んでその進行の妨碍を作るものにて、八方をして塞がらしむ

るものである。是れ敵愾心の大なる弱點にして、一小島國を死守するには、甚だ強味あるべけれとも、斷じて世界に發展する所以ではない。

基督は熱烈なる敵愾心の中に生長し、そが自己を滅ぼし、國家を滅ぼし、民族を滅ぼす所以なるを看破し、博愛の福音を高調し、其同胞兄弟をして敵愾心の上に卓然たらしめやうと骨折られた。彼はその愛の動機を敵愾心に求むるの愚を排し、愛そのものゝ中心に之を求めた。故に彼は家族本位主義を取らず、國民本位主義を取らず、民族本位主義を取らず、人種本位主義を取らず則ち人類本位主義を取つた。既に人類本位主義を取るときは、その所謂博愛は敵愾心を超越する。愛は基督より始りたるにあらず、既に個人的愛あり、家族的愛あり、國民的愛あり、民族的愛があつた。是等は皆敵愾心と偕に生長發展し來つた。基督慨然として萬古を照破し、人類的愛を唱道し、鼓吹し、敵愾心に代ふるに愛敵の福音を宣傳した。彼れいふ、この福音こそ世界を嗣ぐ道なれと、曰く柔和なる者は福なり、その人は地を嗣ぐことを得べければなりと。吾人はこの柔和なる性格が兎角多くの人々に誤解せらるるを歎ずる。彼の舊約書中の偉人たるモーゼにして始めて柔和の德ありと稱せ

らる。新約書に於ては天上天下の權は我れに賜れりと、基督叫びたるとき、彼れ語を加へて「我れは柔和にして」といふた。又萬難を排し羅馬帝國に雄飛した保羅が自から許して、我れ柔和にして爾曹の中に居れりといつた。柔和心は敵愾心を超越して、一私人、一家族、一國家、一民族、一人種を以て安んぜず、實に大世界を嗣ぐ所の大德である。故に大なる目的を完成せんと欲する勇猛心なく英斷なくして、他人の意志に屈するは恥辱である。オメオメと屈從せんよりは、寧ろ白劍を帶して自衞するにしかぬ。是れ蓋し時あつてその弟子に帶劍を勸めたる所以であらう。屈辱よりも自刄を潔よしとする。自刄よりも自衞を貴しとする、自衞よりも道の爲に人の爲に殺さるゝは更に尊い。是が博愛である。

自衞もよい、自刄もよい、屈辱は斷じて受けてはならぬ。獨り博愛心は敵を見て始めて振起するものでない、正しく自動的の本能である。この心は恆心である、常德である、敵愾心の如く屈伸常なきものではない。故に敵を亡ぼして後忽ち沈退するが如きものではない、永久に世界人類の爲に奮勵するものである。屈伸常なき敵愾心の如きものに國民の動機を托するは、國民を永久に發展せしむる所以で

はない。吾人は信ずる國民を偉大ならしむる常德は博愛なりと。此愛を以て國民を養成するときは、内は以てその協同一致の心を增加し、民族公共の利益に注目し、狹隘なる黨派根性と頑迷なる宗派根性とを脱し、外は以て萬國民と出來得る限り、相互の利益を計り、相互の感情を和らげ、相互の敬意を厚うするに至る。亦時あつてか敵愾心を振興するを妨げない。是れ眞に我帝國民を偉大ならしむる所以である。若しこゝに心付くことなく、敵愾心のみにはやつて、戰爭道德ばかりを鼓吹するときは、國家有事の際は兎も角も、國家無事の時に於ては、同胞相食み、兄弟相擊ち、帝國發展の進路を阻碍すること、一にして足らないのである。偉人起ると雖も、その統一に汲々として前進するに遑ないのである。帝國の將來に發展すべき進路を妨ぐる病根は、その今日まで發展し來りたる敵愾心に存する。愼重に深く思はなくてならぬ。

日本化か將た基督化か

基督敎を日本化して、日本的基督敎にせよとの叫び聲は、二十年前より聞き始め

たのであるが、この聲は一朝にして止むべきものではない。實に百年以上の永き年月を經過するにあらざれば、その大目的は達せられないのである。今後幾久しくこの聲は叫ばゝるであらう、否叫ばれねばならない。日本國民の方よりいへば、基督教にして若し日本化せられない性格を有するものならば、國民は二千有餘年の奮鬪を以て贏ち得たるその性格を維持する上よりして、勢ひ基督教を排斥せねばならない。又基督教の方よりいへば、若し日本國民を教化せんと欲するならば、双方の性格に於て同化する結合點を見出さなくては、到底その教化の大目的は達せ得られない。是れ亦據なき次第といはねばならぬ。故に孰れより見ても基督教の日本化は必然の運命と思はるゝ。基督教も二千年の歴史を有し、日本國民も二千年の歴史を有して居る。その人類史上に於ける價値は毫も毀損せられてならない。基督教の日本化はその性格をそこなひ、又その價値を損する所以となつてはならぬ。

ダニエル書又はヨハネ默示錄に示されたるが如く、異邦の帝國を以て悪魔の所爲となすが如きは、淺薄なる二元論の見地より觀察したるものにて、近代の史眼を

以て見れば幼稚といはざるを得ない。若し夫れ基督教が天啓に由來するものならば、日本國民も亦神の攝理に基いて生れたるものと論斷すべきであらう。二つながら同じく神より出でたるものならば、等しく使命を有することは疑はれない。故に基督教の日本化は則ち日本國民の使命を完うせしむる所以にして、斷じてその使命を毀損するものではない。

從來基督教の日本化を論ずるものは、兎角そが歐米式を脱して日本式となることであつた。その歐米式といふも專ら外觀をいふのであつて、國家の大祭日に國旗を建るとか、陛下の御眞影を拜するとか、墓參をするとか、燒香をするとか、斯ることを云々するのであつたが、是等は何も宗教の本領に關することにあらずして、偏に國風に關することであれば、基督教徒たると否とを問はず、無論日本人として行ふべき禮儀である。基督教が是等の風俗にまで干渉するが如き、固より其本領にあらざるは論を待たない。是等の形式的日本化は皮相のことであつて、俗輩より見れば、基督教が能く日本化したと喜ぶべけれども、此位にてはまだ日本化とはいへない。天皇皇后兩陛下の御眞影を會堂又は學校の講堂に安置したればとて、未だ

以て吾人の大和魂を安心せしむることは出來ない。基督教も天主教となつては羅馬法皇を神聖とし、其命令を以て絶對の權威ありとなすが、之れは果して天皇の神聖と尊嚴とに衝突することはないのであらうか。地上に於て二人の主權者を仰ぐことは果して矛盾でなからうか。若し夫れ二者の權威が衝突することあらば、吾人は孰れに服從すべきであらうか。日本人としては無論天皇の命令に服從すべきことである。天主教徒をして此けじめを承知せしむることは、即ち天主教の日本化である。又新教の連中にもナザレの耶蘇を以てキリストと信ずるよりして、恰も地上の主權者であるかの如く思惟するものもある。新舊の聖書中には基督を全く地上の主君として歌うたる所もある。斯るキリストは時の皇帝と衝突を免れない。默示錄のキリストは羅馬皇帝と衝突し、ダニエル書のメシヤはスリヤ國王と衝突して居る。斯の如き基督教は到底日本の國體と衝突を免れない。故に皇國に於ての基督教はその政治的キリスト觀を去つて、全くロゴス哲學のキリスト觀とならねばならない。默示錄の基督觀と約翰傳の基督觀とは甚だ相違がある。彼は日本の國體と衝突し、此は斷じて然らざるが故に、日本のクリスチヤ

ンは全く政治的キリスト觀を去らねばならない。此の如く獨り形式の上のみならず、信仰の見解に於ても、日本人としては其本領を保守する點に於て、斷然歐米に行はるゝ信仰の形式を棄てねばならない所がある。

吾人をして二者の結合する二三の要點を論ぜしめよ。基督敎は歴史の神を信ずる。その起源以前に溯つて遠くユダヤの歴史に神の攝理を認めて居る、從つてまた初代のクリスチャンはギリシャの思想史にも神の攝理の存するを確信して居つた。約翰傳の總論も希伯來書の立論も又は保羅の歴史哲學も史上に於ける神の智惠又はロゴスの內在的靈能を認めて居る。日本帝國は國民を指導し保護し明鑒する神明を信じて居る。此史的神明の信仰は日本國民と基督敎との主要なる結合點である。且又日本國民の神が人格的性質を有して居るは、新舊約聖書の神と酷似して居る。日本國民の神は佛敎と儒敎との感化によつて凡神的傾向を示しては居るが、恰も基督敎の神がギリシャ哲學の凡神的思想の感化を受けながら、その固有の人格的性質を失はなかつたのと同樣の性格をあらはして居る。又日本人は敬神忠君とはいふものゝ、敬神よりも忠君の方面に發展したことは昭

々として史上に明である。それでもその敬神は決して之を輕視しては居らない。舊新兩約聖書は忠君の眞理を輕じたのではないが、專ら敬神の方面に於て著しくその發展を遂げたのである。けれどもその所謂敬神は熱烈なる忠君に外ならない。專ら忠に發達したるは帝國を造り、著しく敬に發展したるは人類の宗敎を生じた。故に聖書の敬神の敎は我が敬神の道と結合して、又能く我忠君の至情を深うすることを得る。しかのみならず嚴格に正義公道を高調する日本國民は、古今を通じて大義名分を主張して居る、二者の倫理的なるは肝膽相照らして、結合し一致し得る所以である。基督敎の方面より論ずれば、その偉大なる理想を實現せんと欲して奮鬪して居るが故に、そが日本國民に同化して、その靈能とならんことは、則ちその深遠なる神國の理想を地上に實現する所以である。夫れ道は器を要する。國民は最も有力なる活ける器である。この器を充實するに非らざる以上は、道は空にして力ないのである。基督敎は本來冥想の宗敎にあらず、又空しく未來を豫想し翹望するの宗敎にあらず、實際國民の中に充實して、天國の實現を企圖し經營する倫理的奮鬪の宗敎である。日本國民はその本來の生命を盛んならしめて、世

界に膨脹せんと欲するが故に、基督教の理想と生命とを取つて自己の能力とするは、則ちその使命を遂ぐる所以である。故に二者の婚姻は世界の最も祝すべき事實といはねばならぬ。

こゝに基督教が日本を基督化する使命を主張し、日本が基督化せらるゝを許容する所以のものは、多くあるべけれども、吾人は僅々その二三の要點を擧げて論じて見やうと思ふ。抑も日本が基督化せられねばならぬ所以は、先づ國民を指導し、訓練し、鞭韃し、慰藉する所の神明を明確に承認することである。日本國民の史的精神はその根ざす所深く、その發展する所遠いのである。之れは深い遠い高い廣い信念なくしては認められない。しかしてこの國民的生命は道義的にして、之を萬國に施して戻らずと確信する所のものである。彼の利己主義の如きは全くこの國民的生命の性格に反するものにして、日本國民の敵である。基督教の所謂信仰に由れる義人は生くべしと主張するものは、則ち日本國民の自覺せねばならない所である。この道義的精神の本源は深く宇宙の根底に發するもの、又その人格的實在は國民の父母として尊敬すべき天父である。この天父は獨り日本民族の

祖先にあらずして、世界萬民の主宰である。この信念の内容には世界が宿つて居る。天父は一人又は一國民の父母ではない、實に世界人類共通の公父である。この公父は獨り大慈大悲の理體にあらずして、公義正道の靈能である。畏るべく恭むべく敬すべく愛すべく又親しむべき活ける神である。日本國民をして雄大ならしむる所以のものは、この世界的信念にあらずして何であらうか。過去二千歲の日本史は光榮あるものには相違なけれども、その敵愾心多くして防禦的なるは、亦已むを得ざる所であつた。日本の僧侶にして韓國又は滿洲又は支那帝國の敎化に從來し、その同胞をして此大事業に貢獻せしめたるものあるを聞かない。基督敎は目下外部より日本國民の世界的運動を促し居ると雖も、未だ內部より已むにやまれぬ博愛心の勃興を奬導するものがない。是れ眞に人民各自の深き信念より來るべきものである。言ひ換ふれば、內在の基督を自覺するものが增加するときは、日本國民は世界に貢獻する博愛の大事業を企圖するに至らんは、吾人の信じて疑はない所。斯くするは則ち日本國民の基督化である。基督敎の精髓は先づ國民の精髓と婚姻して、一身同體となり、その所謂基督敎なるものは、全然日本國

民に併呑されたるの觀を呈せねばならぬ。しかして國民の根底よりその新なる神的生命を發せしめ、その從來の狹隘なる民族主義を脫却して、人類主義を旨とするに至らしむる、則ち吾人の所謂基督化である。日本化と基督化とはその根底に於て一なるが如く、その發展に於ても亦一である。即ち世界人類の幸福を增進するに外ならない。吾人が國民の基督化を主張するは則ち國民本來の性格を完成せしむる所以である。

國情の變遷と基督教

過去五十年前後の日本人は英國人を小人原とのゝしつたが、現代の日本人はその見解が頓に一變して、英國人を士君子と譽めそやす、何たる見解の變化ぞや、小人原と士君子とは天地の相違である。觀る人が變つたのであるか、觀らるゝ人が變つたのであるか、觀らるゝ英人は忽ち小人より君子に早や變りをする筈はない。如何に日進月歩の世なればとて、此の如く速に性情の變化するものではない。是れは觀る人の見地が變つたに違ない。五十年前に英人を批評した日本人は武士

であつた。近頃英人を譽むる日本人は實業家である。少くとも實業を重んずる人々である。昔時は武士の立脚地より英人を批評し、今時は實業家の立場より之を批評するのである。昔時の武士は商人を賤めて小人といつた、武士と商人とは雲と泥との對照であつた。武士は義を重んじ、商人は利を重ずる。君子は義にさとり、小人は利にさとる。武士は十露盤を輕んじ、商人は之を重んずる。義は大山の如く、命は鴻毛の如しといふが、商人は命を貴び、武士は之を輕んずる。故に武士は君子にして商人は小人である。宜なり、十露盤を賤め、命を輕んじ、利にうとい日本武士が十露盤を重んじ、命を貴び、利にさとき英人を批判すれば、英國人は正しく小人原とならざるを得なかつたらう。

然るに日本の國情は王政維新によりて全くその根底より動搖し、武士の所謂小人原を以て國家の基礎とせねばならぬやうになつた。こゝが福澤先生の最も日本人教育に貢献せられた偉業である。日清戰爭以來日本は尙武の國たるを廣く世界に知られたれども、經濟の土臺堅く備はらざれば、到底永くその體面を維持し得られぬは疑ひない。昔時は農と武とを以て立つた日本も、最早農を以て國民を

養ふことは出來ぬやうになつた。農を以て國の基とした時代は鎖國にても差支なかつた。日本國民は日本の土産を以て衣食することが出來た。他國より食料を求めずともよろしかつた。斯る時代の武は最も國防に務め、敵愾心を熾にして、他國の侵害を防ぎ止むれば、事足つたのである。然るに國の農產は到底年々增殖する國民を養ふこと能はずとすれば、勢ひ食を他國に求めざるを得ない。何の方法を以て食を得るかとすれば、一は內工業を盛にして販路を世界各國に求め、一は外殖民を獎勵して、國民を世界に移住せしめねばならぬ。武の如きは國防の意義を減じて、商工及殖民事業を保護する意義を高調せねばならぬ。昔時は武士の爲に農民は生き、主君の爲に武士は生きて居つた。今時は商工及殖民事業の爲に武の必要を說かねばならぬ。國民は武士の爲に生きず、武士が國民の爲に生きるやうになつた。現代の精神は手の裏を反すが如く變つてきた。解り易くいへば日本は日々東洋の英國となるべき運命を有して居る。斯る國民狀態の大變化は亦その道德の進化を促し來る。是れ防ぐべからざる自然の勢ひである、昔時の國民道德では到底やりきれないのである。

外國の侵害を防ぐことを旨としたる時代は敵愾心が必要であつた。その隣人を愛して、その仇敵を憾むべしとは、此時代の國民道德であつた。親鸞も日蓮も此時代精神を超越し得なかつた。外國教化の大望を懷いた名僧は一人も居らぬ。ドコ〳〵までも國防的精神に捕へられて居つた。然るに日本國民が食を海外に求めねばならぬやうになつた以上は、敵愾心ばかりでは一歩も踐み出せない。外國卽ち敵國なりとの舊觀念にては、到底海外に殖民事業を盛にすることは出來ない。斯る狹隘なる根性にては海外何の國に移住するも、快く樂く働く心地なきことは勿論、又その移住する地方の國民も斯る狹隘なる心地惡き民族を受け入ることを好まぬ、これは最も千萬の事である。況んや他國のうちに侵入して、その土地を蠶食せんとするが如き野心あるに於ては、誰れか之を排斥せざらんや。之を排斥するは當然の事である。基督ガラリヤ湖畔に於て天國を論じ、民族の改心を要求し給ふたやうに、吾人は帝國の國情變化に際し、吾が同胞の改心を望まずんばあらず、宜しく基督の博愛心を以て昔時の敵愾心に代はらしめねばならぬ。しかして吾が同胞は世界到る處に於て、そのホームを見出さねばならぬ、己の如く爾の隣

人を愛すべしとの聖訓の旨を守りて、その足跡の達する所に隣人を見出さねばならぬ。所謂狹隘なる民族的島國根性を脱せずしては、雄大なる世界の國民たるを得ない。我工業家はその資本家たると勞働者たるとを問はず、世界人類の便利に供する物品を製造するを念頭に留めねばならぬ。目前の私利小益を貪つて、永遠の公利大益を失はないやうに務めねばならぬ。昔時の如く外國人を欺くを以て自己の爲め國家の爲に成功したるが如き愚に陷らざるやうに務めねばならぬ。日本の工業品は世界の人が之を使用して、その便利を認むるやうに仕向けねばならぬ。商人は直接に外國人を相手にして、是等の工業品及他國の物品を取扱ふものなれば、その國民的敵愾心を脫却して、博愛心を旨とせねばならぬ。經濟界豈に國境あらんやといふ位の度量なくしては、世界に横行濶步する譯には行かぬ。日本の武道も僅に自國の殖民及商工業を保護するといふが如き敵愾心のみに指導せらるゝことなく、世界に利益を與へ便利を供ふる殖民及商工業を保護するといふ博愛心を旨と服膺すべきである。この世界的博愛心が我國民活動の甚深なる意志とならんか、日本國民の面目全く新になり、世界の面に活躍し來らんこと、火を見

るより明である。この博愛心の内容には世界の人々に對する涙もあるべく、世界の人々に信用せらるべき信義もあるが故に、日本武士の善良なる品格は轉化して吾が商工人の德性となるは疑ひない。王政維新以來日本の武士は商人となり、職工となり、しかしてその武士根性を失ひたるは、最も悲むべきことなれども、亦已むを得ないのであつた。今後は我が商工の人々が十露盤を帶び、鋸切を携へながら、武士とならざれば、日本は堂々たる東洋の英國とはなれぬ。英國人は利益を重んずれども、之れが爲に信義を輕んじない、世界に華主を求むるが故に、猥りに小利を貪らない。彼等は世界人類を友として、信義を萬國に施さんことを務む。彼の實業家は文質彬彬の士君子である。故に商工業の國柄にして、君子國たる品格を失はない。我が同胞に希望する博愛心の内容は、蓋し之れにてはまだ盡きないのである。

極東の孤島に自から籠居した時代の日本宗教は、勢ひ一民族に限られたる、所謂民族宗教たらざるを得なかつた。日本の神道なるものは、民族生來の宗教にして、極めて幼稚であつて、古代民族の宗教とその揆を一にして居る。儒教は流石に大

帝國の敎である故に、稍見識の大なるものありと雖も、同じく支那民族の宗敎を重んずるものにて、夷狄を禽獸視する陋見を脱して居らぬ、その中華に重きを置いて居ることは、ドコまでも民族主義である。日本に來つて何等世界的精神を貢献したるものはない。佛敎の如きは既に民族的ブラマ敎を脱して、世界的性格を贏ち得たのであるが、日本に來つては、何時とはなしに民族的宗敎に同化して、その世界的本來の面目を十分に高調し得なかつた。佛敎が日本に同化したことは、日本人の立場より見れば、日本主義の勝利であるやうだが、この日本人をして世界的たらしめ得なかつたことは、正しく佛敎の弱點といはねばならぬ。今日とても佛敎は尙日本人の島國根性と結婚して、その陋習を保守して居る是れ佛敎の爲に遺憾とする所である。吾人は佛敎がその本來の世界的精神を發揮し、日本國民をして世界的國民たらしむる一大光明たらんことを望まずんばあらず。此點より觀ずるときは、基督敎は一日の長ありて、我が新興國民の宗敎たるに、最も適當なる位地を有して居る。基督敎は既に民族的性質を脱却して居れども、その狹隘なる宗派心を脱却し居らざるが爲に、不幸にして十分に世界的たるを發揮し得ないやうであ

る。然れども基督教の精髓そのものはそのあらゆる分派を通じて、世界的精神を鼓吹しつゝあるは、亦疑はれない。この世界的精神に觸れ、萬民共有の公父に依賴し、その無限の恩愛に浴し、その公義正道を重んじ、何の國民を擇ばず、何の宗教を論ぜず、一視同仁の基督教を旨とすることは、以て博愛心の根本を深うし堅うするものである。この根本義の宗教心より養成し來る所の博愛心は、永久に渴くべきものでない。忠孝の鼓吹もよからう、祖先崇拜もよからう、然れどもこの博愛心の鼓吹と、この世界的宗教の主張とは、我與國民の最も留意すべき所である。憂國の士がこゝに心付かずして、維新前の國民道德を振興せんと欲するは、恰も新思想の爲に信念を失ふたる人々が、その信仰を發揮するの道は偏へに舊思想に復歸するにありと思惟するが如し。是れ斷じて行はるべきことではない。日本國民は歐米の新思想の爲に、又その國情の變化したる爲に、その舊來の國民道德を輕視すべく餘儀なくせられた。然るをこの國情の變化を其儘にして、又歐米の思想の旺盛をそのまゝにして、舊來の道德を振興せんと欲するは、恰も二十世紀の戰場に槍長刀を携帶し行くが如きである、斷じて不可能のことである。新與國民は愈之を馬鹿

にして益變調を取らんとするであらう、害あるのみにして何の益もないのである。現代の憂國者は不幸にして現代にふさはしき新らしきものを持つて居らぬ。故に舊物を復興しやうとして居る、實に悲むべきの至りである。吾人は斷じて言ふ、この新興の日本國民には歐米の精神界を指導する人類的博愛心と、熱烈なる宇宙的宗教とあるのみと。國民道德と宗教との形式は國情と偕に變遷すべきものである。この國情の變遷を辨へずして、無理にも舊式の道德を復興せんと欲するは、是れ現代の青年に陣笠を被らすものである。現代の青年は果して之を被る程無氣力であらうか。

教育勅語と基督教

教育勅語の下りてより既に二十年を經過した。吾が教育家は之を服膺して、鋭意教鞭を取りたるに相違なきも、國民の風潮は年を追うて忠孝の觀念を沒却する傾向がある、而して社會の信義に至つては將に地を拂うて見るべからざらんとするは、歎すべきことである。苟も國家民族の將來を想ふものは、憂慮せざらんと欲

するも得ない。畏くも敎育勅語は我が國體の精華を最も簡明に言ひ表はしたるものである。個人、家庭、國民の道德は權威を以て言明せられ、毫も遺漏ないのである。竊に思ふ、誠に善を盡せり美を盡せりと。然れども之を說明し實行する方法と精神とに至つては、國民各自の自由に一任してあると思ふ。是れ蓋し深き聖意の存する所なりと信ずる。敎育勅語は固より間然すべきものにあらず。然るを、輕佻浮薄の氣風は年を累ぬるも改らず、滔々として益墮落の徵候を示すものがある。誰れかその責に當るべきであらう。吾人は之を說明し、實行せんと欲する敎育家と、之を奉讀し、遵守すべき國民がその責任に當るべきを想はねばならぬ。

我敎育の淵源は元來宏遠にして深厚なるものに相違ないが、しかし之を說明するに當つて、極めて淺薄に狹隘に說明するならば、又は之を實行せんと欲する者がその方法のよろしきを得ざるならば、萬代を照らす聖訓ありと雖も、國民の道德として實現し來らないことは怪むべきでない。吾人の見聞する所によれば、敎育家の說明は餘りに淺薄にして狹隘である。而して實行の方法も亦そのよろしきを得て居らぬ。之を聽聞する人々も淺薄に了解して、一向にその深遠なる靈能を喚

發するに至らない。吾々は久しく勅語の吾が國民道德として煥發し來らざるを歎ずる。如何にすればそが著しく煥發し來るであらうかと苦慮すること亦久いのである。吾人は之を奉讀するに當り、未だ嘗てその說明と實行とが基督敎に待つ所のものあるを思ひ起さないことはない。試に吾人をして之を論せしめよ、また吾が愛國者の參考に資するものないともいへまい。

勅語に示されたる國民道德の綱領は忠孝の二大道德なりと信ずる。吾人は先づ孝に就きて論ぜんと欲する。孝は家庭道德にして、父子の關係をいふものである。故に或人は父子を以て我家庭道德の基本なりと論ずる。之は最も深遠なる宗敎の眞理としては動かすべからざる基本なれども、家庭倫理としては、受取り難きことである。古人も君子の道は端を夫婦に造すといつた、人倫としては夫婦ありて後に父子がある。故に夫婦は孝の本たらねばならぬ。勅語には夫婦相和しとあるが、夫婦相和せざる所には、孝の德は育ち難い。夫婦の和が孝の本たるは論を待たぬ。然らば則ち孝を論ずるに先ちて、夫婦の和を論ぜねばならぬ。抑も夫婦の和は如何なる方法によりて最もよく實現し來るべきか、是れ最も注意すべき問

題である。世界には一夫多妻の風習もあり、一妻多夫の風習もあり、又は一妻多妾の風習もある。是等の風習は果して夫婦相和の實現を見るべき家庭を造り得べきものであらうか、吾人は斷じてその然らざるを知る。夫婦の相和は嚴格に相互の貞操を保全するを要する。然らば則ち如何なる夫婦制度が最も圓滿なる相和を全うするであらうか。一夫一婦の家庭道德たるは言を待たない。是れ正しく基督敎の主張する所ではなからうか。勅語に曰く父母に孝にと。この孝は夫婦相和の家庭にその光輝を發すべくして、夫婦不和の家庭には見難き所である。妻としてその夫を怨む如き事情の存する家庭には、孝道は行はるべきものでない。彼の不自然極まる二十四孝の如きは、之れあるかも知らぬが、然れども是れ古人の所謂國亂れて忠臣顯はれ、家亂れて孝子起るといふものである。是れ豈に最も忌はしき事ではあるまいか。若し夫れ二十四孝の如きを以て孝子の龜鑑とするならば、天下には殆んと孝子はないのだらう。吾人は寧ろ此の如き孝子あることを欲せざるのである。

兄弟に友にとあるも、亦一夫一婦主義の家庭に行はるべきである。彼の一妻多

妾の家に於て兄弟に友を求むるは非望の望である。所謂御家騷動といふは、悉く一妻多妾の弊習より發したのではないか。しからば先づ日本在來の弊習を破棄し去つて、一夫一婦の制度となすにあらざれば、勅語に示されたる家庭倫理の實行は斷して望むべからず。吾人は斷言するを憚らない、勅語の家庭倫理は基督敎の一夫一婦主義に由つて始めて實現すべきものなるを。

忠に至つては則ち國民の公德にして、基督敎とは甚だその主義を異にするが如き觀想を有するものがある。然れども、事の眞相に思ひ到るときは、是れ寧ろ基督敎の信念に待つ所がなくてはなるまい。忠とは本來精神の公事に奉ずる最も眞面目なるものではなからうか。利己主義より打算する所には、眞の忠はある筈はない。何んとなれば忠は己れを忘るゝ熱誠なる精神の狀態であるからだ。基督敎の信念によれば、忠は正義公道の神を尊信して、之に事ふるに存すと。力を盡し、精神を盡し、智惠を盡し、意志を盡して神を愛するは、忠にあらずして何んであらう。故にクリスチャンの神に對する態度は唯忠のみである。彼の利益を得んと欲して、信心する利己主義の動機より安心立命を求むるが如きは、クリスチャンの信仰

より觀れば、極めて淺薄なる信仰にして、その良心に恥る所である。至善至聖の神に熱中して自己を忘るゝ、是れクリスチャンの信仰なるが故に、基督教は吾人の最も深奥なる靈能を喚起するものである。この靈能は則ち忠として特別大書すべきものである。既にこの靈能がある、之を國家及君主に對して應用することは、實に之を擧げて之を措くといふに外ならぬ。この豊富なる信念を傾注して、國家道德に應用するは、恰も滔々として流るゝ大河の水を決して、田野に灌くやうなものである。難ずる者は言ふであらう、それ或は然らん、然りと雖も神に對する忠誠は一片の宗敎心にして、國家に對する所以にあらずと。然り、固より同一のものではない、然りと雖も國家道德をこの深遠なる宗敎心より養成し來るは、亦是れ國家道德の淵源を深からしむる所以である。試に封建時代の忠義を視よ。當時の所謂忠といふものは維新以後のそれとは、全くその趣きを異にして居る。日本人は嘗て彼の忠臣藏の如き、又千代萩の如き、最も壯烈なる忠を歌うて居れども、是れは現代の所謂忠ではない。封建時代の忠は何人に對するであつたか。一個の藩主に對する忠であつたらう、皇室に對する忠ではなかつたらう。その忠の範圍は一藩

に限られて、日本帝國ではなかつたのである。而してその所謂忠なるものは報恩にして、君の祿を食むものは君の爲に死するといふに外ならなかつた。然れどもその內容は兎に角一片の忠には相違なかつた。この忠はもとより狹小ではあつたけれども、幸にその應用よろしきを得たるが故に、やがて王政維新を造り出し、廢藩置縣の偉業を成し遂ぐるを得、而してこゝに明治の盛代を見るに至つた。然らば則ち宗敎の奧義に存する忠誠は能く之を國民道德に應用し、幸にその動機となるに至らば、忠君愛國の熱誠油然として勃興せんこと、吾人の信じて疑はない所である。誠に現代の忠君愛國なるものは所謂戰時道德にして、平時の道德ではない。我日本國民は一旦緩急あらば、義勇公に奉ずるの覺悟はあるけれども、この忠君愛國の精神は未だ日常彝倫の動機とはなつて居らぬ。彼の戰時に於て金鵄勳章にあづかる者が、平時に於て最も憐むべき墮落人となるは何んであらう。我所謂忠君愛國なるものが未だ日常道德の動機となつて居らないことは、論よりの證據である。是れその養成する所の淵源が甚だ淺近なる故ではあるまいか。若し此精神が時々刻々深遠なる信念の淵源より養ひ來らるゝものならば、換言すればクリ

スチャン朝夕の祈禱の中に胚胎するに至るならば、忠君愛國の精神は信念と偕に日常彝倫の動機たらんこと、恰も鬱勃たる生命の生々として息まざるが如くなるべし。況んや博愛衆に及ぼすの德に至つては、殆んど基督教主義の特權といふても過言ではあるまい。

　基督教は過去五十年以來この博愛を主張したるが爲に、狹隘なる國家主義を懷きたる人々には痛く嫌惡せられ、折々國賊呼はりすらせられたのである。某教育家の如きは博愛衆に及ぼすとある衆は、世界の人々をいふにあらず、五千萬の我同胞を指すのみとまで論じたることもある。加藤博士の如き、嘗ては帝國大學の總長をまでつとめたる人にして、國家主義と博愛主義との衝突を提げ來り、痛く基督教を攻撃せらるるのである。それも三十年前のことならば兎も角も、現代に於て忌憚なく論せられ、しかして地方小學校教員のうちにも之に同意するもの甚だ多しといふに至つては、如何に日本人の度量が狹隘なるかを驚かずには居られぬ。勅語には之を中外に施して悖らずとあれば、博愛の及ぼすべき所が宇宙的なるは論を待たないのである。昔時は外國即ち敵國なりと思惟したることもあつた、今日

に於て斯る思想を懷くは、則ち勅語の主趣に悖るものではあるまいか。勅語の實行せられざるのは怪むべきでない。クリスチャンが頻りに國民の復生を主張するは亦宜ならずや。帝國民は從來の島國根性を脱却して、世界的精神を發揮するにあらざるよりは、勅語の聖旨は斷じて了解し能はないのであらう。基督敎の大なる博愛主義の説明を待つて始めて勅語の宏遠なる聖旨は了解せらるゝであらう。然るを去頃天長節に於て帝國敎育家の師範たるべき菊地總長が、基督敎は未だ十分に日本化して居らずと公言せられたそうであるが、吾人はその虛傳ならんことを欲すと雖も、是れ我が多數の敎育家中に蟠る一大疑問たるは疑はれない。我敎育界より帝國の世界的大精神を發揮し來らざるも、亦最も千萬ではあるまいか。彼の一旦緩急あらば、義勇公に奉ずるの精神が、則ち基督敎の博愛主義に悖るかの如く杞憂するものもあるが、是れ極端なるトルストイ一派の主張を以て基督敎とするものにして、歐米クリスチャン一般の常識を無視したるものである、取り擧げて論ずるまでもなきことである、吾人は强ちに基督敎を辯護せんが爲に此論をなすのではない。

基督教は祖先崇拜を旨とするものにあらずと雖も、我が皇祖皇宗の國を肇むること宏遠とある聖句に對しては、深き敬意を懷きて默識する所のものがある。吾々は我國家創業の際既に業に天佑の豐なりしを信ずる。我が皇祖皇宗と宇宙の神靈との深奧なる關係を推し究めてこそ、始めて帝國の存在を神聖ならしむることができやう。無神無靈魂の唯物論にては斷じて我國體の靈能を說明し能はざるのである。唯物論に取りては、我が皇祖の威靈とあるが如きは、全く無意味である。又彼の皇祖の威靈と天佑とを同一視する人の如きも、國家創業の際に於ける天佑は到底之を認むること能はないのであらう。加之尊嚴なる天佑の言葉さへも之を僥倖、運氣等の意味に墮落せしむるが如き、深き宗教心のなき人民の常習といふべし。無神無靈魂の唯物論や永遠の人格を認めざる凡神教にては、到底勅語の聖意を了解し能はざるや明白である。而して宗教といふも亦一概には論ずべからず、正義公道を重じ、公明正大なる良心に神の聲を聞く所の倫理的宗教にあらざる限り、國家道德の基本たることはできない。基督教に由つて勅語を說明し、その靈能を以てその聖訓を實行せしむれば、吾人は勅語が更に宏遠深厚なる意義を

發揮し來り、我が國民道德の實を擧ぐるに至らんを信じて疑はぬ。是れ我が敎育界に於ける破天荒の新實驗ではあるまいか。我が新進の識者がこゝに想ひ到らざるは、吾人の深く慨歎する所である。基督敎主義の學校は大膽にその主義を照らし來つて、勅語の宏遠なる意義を發揮し、眞面目にその聖旨を體得する子弟を養成せんこと、その當に務むべき當然の職分ではあるまいか。基督敎主義の學校はこの實行に於て、宜しく深厚にその存在の使命を自覺せねばならぬ。

列國大家族とその宗敎

列國を以て一大家族と見做す思想は專ら基督敎の行はるゝ國民の間に意識する所にして、その由て來ること甚だ遠い。この意識は心裡に顯はれたる觀想の最も公明にして正大なるものである。人類を兄弟視するは、高大なる道德には相違なけれども、之れは個人と個人との間柄にして、一人々々が意識ざへすれば、その意識したる人々の間にのみ行はるべきことである。故に昔時より朋友といふものありて、少數者の間に兄弟の道行はれた。之を大にしては百人、千人、もしくは萬人

の宗教的團體となりて、美はしく地上に花咲きたることがある。然れども國民と國民とが家族的團結をなさんことは、中々理想し難き所である。彼の所謂世界平等の博愛主義は必ず國家の存在と衝突するが故に、博愛主義と國家の尊嚴とは兩立すべからずとは、博く識者の間に行はれたる所の議論である。國家主義に熱中するものも、社會主義を振り撒く者も、個人主義を主張するものも、もしくは博愛主義を宣傳する者も、その衝突を高調して、その圓滿に調和すべきを知らざるのである。吾人は夙に博愛主義を主張し、而して又其の國家主義と衝突すべきものにあらざるを論辯したのであるが、さて此大主義は獨り個人と個人との間にのみ行はるべきにあらずして、又國民と國民との間に行はるべき性質を有するのである。基督言はずや、天國は酵の如し、之を三斗の麥粉に混ずれば、悉く膨脹するなりと。天國は獨り個人の心中に浸潤し來るべき靈能の感化にあらず、又個人々々の社會に感化を及ぼすべきにあらず、實に國民の生命を養育し、列國の間に浸潤すべき靈能を有するは、基督教主義を尊重する列國の發展史に徵して見るべきである。列國に於ける神國の顯現は吾人多大の興味を以て其端を窺はんと欲する。

吾人は日露戰爭の當時獨り日本帝國勃興の爲に祈りたるのみならず、實に基督教の所謂博愛主義の爲に祈つたのである。故に吾人は日本の戰勝を單に日本帝國の爲に祝したるにあらず、實に世界人道の爲に賀したのである。何んとなれば若し日本が戰敗するの悲運に遭遇したらんか、列國の大家族主義は獨り白色人種間にのみ行はるべくして、有色人種國の之に加はるに至らんは、前途餘りに遼遠であるからである。然るを幸ひにして勝利の日本に歸したるは、卽ち黃色人種の面目を施したるものにて、列國の大家族主義は地球の一隅に偏せずして、廣く世界に行はるべき運命あるを證するに至つた。戰爭終りて復た平和となるや、忽ちに顯はれたるは日英の同盟である。之を單に政治上の見地より觀ずるときは、餘り當てにならぬ秋の空摸樣と觀てもよからんが、列國の發展上より觀ずるときは、神の國の機微を窺ふに足る一大現象といはねばならぬ。日英の同盟は露佛同盟又は三國同盟の如き性質を有するものにて、列國家族主義の新方面を開きたるものといつてよからう。而して日英同盟の意味を傷くることなくして、又玆に日露協約の發表を見るに至りたるは、氣運の發展上亦自然の成行きといはねばならぬ。

年前には砲煙彈雨の中に相見たるものが、今日殆んど攻守同盟の如き性質を有する協約を發表するに至りたるは、獨り日露の爲に賀すべきにあらず、實に世界人類の爲に賀すべきことである。戰爭は蓋し之れあるが爲に義とせらるのであらう。戰爭は最も悲むべきことなれども、實に血の雨を降らすにあらざれば、雙方の心事も能力もよくは分らぬのである。凱旋したる日本の軍人が未だ嘗て露人の勇敢とその男らしき氣象とを賞せざるはない。日露の軍人は相互に敵ながらも、又相互に千辛萬苦を嘗めたるものであつて、旅順落城の際日露の兵卒が涙を振つて抱き合へりとの逸事は、千辛萬苦を嘗めたる軍人の赤誠を發表したる同情の涙である。今後兩國の間に不和の生ぜんを顧み恐るゝものは、恐らくは軍人より甚しきはあるまい。彼等は戰爭の辛酸を嘗めたるのみならず、亦互に最も深く同情を注ぎたるものである。彼等は再び戰爭することの不利なると、又旣に明確にしたる政治上の勢力範圍内を他より侵害せらるゝの馬鹿々々しきことを承知するが故に、攻守同盟せざらんとするも得ないのである。是れ全く日本國民が尊敬せらるべき實力ありと、露人に認識せられたるが爲であらう。政治上に於けるこの日露

の協約は、更に進んで兩國民の感情を和らぐるのみならず、又大に意志を疏通するの大活路を開くものといふべきだらう。こゝにシベリヤの大鐵道よりも更に利益ある精神上の大路が開くる徵あるのではあるまいか。

日露戰爭以來日米の感情頓に面白からずなつた爲めに、激昂するものあり、調和するものあり、悲觀するものあり、樂觀するものあり、二國の關係容易ならざるものがあらはれて來た。さて日米の衝突は人種問題もあるべく、勞働問題もあるべく、經濟問題もあるべく、國民發展問題もあらう。その複雜なるは一々枚擧するに遑ない。悲むべき大衝突は早晚免れざるやうに思はる。然れども吾人はこの大衝突の裡面に神の國の發展しつゝあるを認めずんばあらず。日米の接近は個人々々としては既に五十有餘年經驗し來りたれば、その親密は愈深くなり居れども、國民と國民との接觸は米西戰爭以來急に激烈となつた。若し夫れ日本が久しく極東に孤立し、北米合衆國が米大陸に孤立したりとせば、何も衝突はなからう。何んとなれば東西の大洋を隔てゝ、西は亞細亞大陸の政治問題より遠かり、東は歐列國の外交より遠かり、自己はモンロー主義を楯に取つて、單身獨歩孤立の姿勢を維持

するからである。然るに日本は日清及日露の戰勝に乘じ、米は米西の戰勝に乘じ、互にその孤立の狀態を一變して、世界に發展し始めたのである。二國民の衝突は豫め期すべきであらう、然れども亦之を免るゝ道なしとはいはれぬ。假令激烈なる衝突を肯てする事あらんも、吾人は斷じて悲觀しないのである。蓋し神の國の發展はこの衝突の間にその步武を進むるも知れぬ。列國の大家族は此の如く相接觸し、此の如く相衝突することによつて漸く實現し來るからである、是れ蓋し各國民の裡面に神の國が權威を以て生れつゝあるが故である。

列國の大家族を組織するには複雜の要素なくてはならぬ。

(一) 列國民の思想感情を遺憾なく發表し得る共通言語の廣く行はるゝこと。

(二) 外國語の研究を盛にすること。

(三) 飜譯書を增加すること。

(四) 列國經濟上に於ける利益の分配。

(五) 雜婚の廣く行はるゝこと。

(六) 普通教育を盛にする事。

（七）宗教道德の普及を計ること。

等は列國の大家族を作る要素と思ふ。

日本は其發展上到底世界列國の家族に加はらざるを得ないのである。日本帝國は已に黄色人種を代表し、否有色人種を代表し、既に列國の家族に加はつたのである。既にこの大家族に加はつた以上は、出來得べき丈その獨得の性格を失はずして、又大家族に同化すべきは論を俟たないのである。然らば其所謂宗教道德なるものは獨り一國家に限られたるものゝみにては、到底大家族の一部たるを得ない、何となれば一家族の一部たるを得るもの必ず二大要素を有せざるべからず、一は部分的なるものと、一は全體的なるものである。この時に際し部分的即ち民族的宗教を鼓吹して、強ひて全體的即ち世界的宗教と衝突せしむるが如きは、國民の大發展を阻害するものである。例へば神道の如きは一國民に限られたものである。或る時期までは必要なるものにして、之を鼓吹するは當然の事なれども、國民が既にその孤立的境域を超越したる以上は、その民族的宗教にては足らないのである、若し夫れ世界に貢獻するを目的とせざれば、最早その使命を終りたるものと

いつてよい。民族的宗敎は民族發達の自然の聲なれば、固より之に傾聽すべきものあるは論を俟たないのであるが、然れども民族的宗敎道德の性格は世界的宗敎の一大要素として之を認定すれば足るのである。何を苦んで强ひて民族的宗敎と世界的宗敎とを衝突せしむるの理由があらうや、世界列國の大家族は必ず大宗敎を有する、卽ち基督敎である。この基督敎なるものは元々一民族より發展し來つて、世界的宗敎となつたのであれば、之に民族的性質の附着して居ることは、論を待たない。それが列國の宗敎である所以は、民族的と世界的との二大要素を有するからである。その民族的なるものは各國民に屬するものであつて、大家族の共通する所ではない。是れ英の基督敎が露の基督敎と異なり、獨の基督敎が佛の基督敎と異なる所以である。然れども其世界的要素に至りては列國の共有する所である。日本國民の宗敎も宜しく此二大要素を有せねばならぬ。日本國民が基督敎を信奉する必要ありと吾人の主張する所以は、その世界的なる要素をいふものにして、その民族的なるをいふのではない。日本國民の民族的宗敎として信奉すべきは、既に神道に於て發揮せられたるを以て、吾人が之を高調するは亦至當の

事である、然れどもその世界的なるに至つては大家族の共有する基督敎の眞理でなければならぬ。彼の神道を以て國敎とせよなどと論ずるものは、その一を知つてその二を知らざるのである。又彼の猥りに基督敎を主張して、神道を撲滅せんと欲するものは、歐米の宗敎に此二大要素あるを辨へず、その世界的要素を鼓吹するに際し、その所謂民族的要素を國民より奪ひ去らんとするものである。吾人は基督敎の傳播を主張すると同時に、在來の神道に顯はれたる民族的精神を保有せねばならぬ。我國民がその獨得の宗敎と道德を有すると同時に、更に世界的大宗敎の眞理を信奉し、以て列國の大家族に加入するを要する。是れ我國民が其使命の大なるを自覺して、その天恩を列國民に分配する所以ではなからうか。日本國民はその精神に於ても斷じて孤立すべからず、須らく列國大家族の一大要素とならねばならぬ。故に日本の宗敎を論ずるものは、宜しくこの世界大家族主義の見地よりして、立論しないと分らないのであらう。神道の如きは吾人之を基督敎の一部と見れば足る、何ぞ之を基督敎に相對峙せしめて論ずべきものならんや。

朝鮮の文明は滅茶々々に打ちこはしてある、よくも根から葉まで打ちこはしたものである。外國は韓國政府を虐待し、政府は人民を虐待し、人民は自然を虐待した爲に、朝鮮の文明はその跡を絶つまでに至つた。故に朝鮮は我隣邦でありながら、亞細亞大陸の文明を日本に紹介した國柄でありながら、一の見るべき文明を有して居らぬ。佛教も滅茶々々に打ちこはされて、儒教も濟民の學としてはその用をなさぬ、殖産工藝の經營も頽敗し、家屋はヤット風雨を凌ぐ丈の用をなすのみ。その零落さ加減は實に言語同斷氣の毒の外はない。外人をして一見虐政の害毒に想ひ到り、悚然としてそゞろに皮膚粟を生ぜざるを得ざらしむ。王城の偉大にして民家の倭小なるを見れば、民の富むは我が富むなりといひし明君の言は、夢にも王者の心頭に浮んだものとは思はれない。亞細亞大陸の文明が朝鮮半島を通過した迹は歴然として見ゆれども、歐米大陸の文明が輸入された跡は見えない。日本には亞細亞大陸の文明が入來つて、更にその發展の機會を得たのみならず。

又歐洲大陸の文明が加つて、近世文明の土臺を築いたのであるが、朝鮮にては前者は通過したばかり、しかして後者に至つては毫もその感化を及ぼしたやうに思はれない。是れ蓋し日韓の大に異なる所以である。しかも一千五百萬の人民は案外に畏縮しては居らない。之に生氣を吹き込み、發展の機會を與ふるときは、その復活し、振興することは火を睹るよりも明である。朝鮮の將來は實に多望である。吾人をして朝鮮の將來を樂觀せしむるは蓋し朝鮮は貴重なる四大要素を有するからである。

朝鮮の勃興は朝鮮人に待つこと多からざるを得ない。一千五百萬の人口を有する朝鮮人にして、朝鮮を負うて起つ丈の元氣あらば、朝鮮の勃興は蓋し期して待つべきである。曩には頻りに排日の思想及感情が鼓吹せられ、朝鮮人の間に切齒扼腕し悲歌慷慨するもの多かりしといふ。爲に往々暗殺を事として國事を誤つたものありと雖も、是れ人民に熱烈なる氣概あるを證するものにて、強ちに惡むべきことではない。朝鮮人はよく日本人に似たる所がある。日本開國及王政維新の際、慷慨悲憤の輩幾人となく奮起したやうに、近時に至り頓にこの輩が朝鮮に現

はれたのは、朝鮮人に未だ元氣の存するものあるを證するものにて、大に敬意を拂ふべきである。此の如く容易に屈せざる朝鮮人にして始めて日本人の兄弟とし姉妹とし、共に大國家を經營するに足るのである。若し唯々として服從する腑甲斐なき人民ならば、之れ奴隷のみ、到底濟度すべからざる無氣力の骨拔鰌に異らない。故に排日主義を鼓吹するは、今日となりて歡迎すべきことにあらず、寧ろ朝鮮の發展に關して厭ふべき現象を生ずれども、しかもその氣骨の賴むべく、その愛國心の熱烈なるは、吾人をして敬意を拂はしむる性格である。若し夫れ幸に能く之を轉化して雄大ならしめ、日本人の愛國心と共心同力せしむるを得ば、朝鮮人は大帝國を經營するに於て日本人の好伴侶といふべきである。吾人は朝鮮人の中に雄辯家ありと聞く、雄辯を以て舌頭の作用のみと心得るは、猶大音樂家を以て二寸の指先にありと心得ると一般、極めて淺薄なる愚人の判斷である。雄辯は思想を要する、熱烈なる情感を要する、決意の勇猛心を要する。雄辯は人格である。朝鮮人中に雄辯あるは亦大に敬重すべき人格あるを證するのである。朝鮮人には詩文の才あれども、數理の才なしといふが如きは、一概に斷ずべきことではない。記

憶に關することは彼等の長所なるやも知るべからずと雖も、偶々在朝鮮帝國學士を凌ぐ數學家もあることなれば、將來彼等の中に許多の理學者を起すに至らんは鏡にかけて見るやうである。朝鮮人は斷じて腐敗救ふべからざる零落の人民にあらず、舊朝鮮人は共に語るべからずとするも、新朝鮮人は共に國事を任ずるに足る價値を有する。朝鮮の女子の如き、昔時は奥中の寶器に外ならないのであつたが、今や文明の敎育を受け、男子の間を自由に往來し、その活潑なる日本女子に比して毫も遜色ない。過去三四年の形勢に照らして、朝鮮女子の英氣を示す、猶此の如しとすれば、今後數十年を經過するときは、毫も日本女子と異なる所なきに至らん。朝鮮人は斷じて侮るべきものでない、正しく我同胞兄弟として、敬愛するき價値を有する。

日本帝國が、朝鮮國に及ほす影響は實に偉大なるものである。總督府が然るべき人物を採用して朝鮮人の敎育を改革し、過去の儒敎主義敎育を一變して、日本の科學的敎育を實施し、善良なる人民を養成するに鋭意力を盡さしむることは、最も注目すべきことである。此敎育法は日本に於る明治二十年前のそれにあらずし

て、實に最近の實驗に基いて實施するものあるが故に、朝鮮人は幸に日本人の經驗に基いて得たる功果を食ふ所のものである。朝鮮國の教育は數年を出ずして必ず驚くべき結果を生ずるに至らんは火を見るより明である。女子教育の如きも頓に進歩し始めたれば、一足飛に日本女子と同じく高等女學校程度の教育を受くるは、期して待つべきのみ。總督府は農業に力を用ゐ、朝鮮國の小山を一變して、豐富なる農園となし、葡萄、栗樹、林檎、梨、桃、杏、梅、櫻等の森々として繁茂し、驚くべき國產を生ずるに至らしめんこと、蓋し二十年を待たないのであらう。その他甘菜の植付によつて製糖事業行はれ、盛に砂糖の供給をなし、朝鮮の農夫をして富を祝し人生の盛況を謳歌するに至らしむるは、決して遠きにあらざるべし。其他總督府の事業には大理想を孕んで居る。日本人が個人として施す所のものには理想の見るべきもの甚だ少なしと雖も、流石に總督府の企つる所には理想が存して居る、教育然り、農業亦然りであるが、龍山に於ける新市街を經營するが如き一目瞭然として理想の見るべきものがある。日本に於ける大都會も敢て及ぶべからさるものを朝鮮國の都會に於て見るに至らんは、吾人の喜ばざるを得ない所である。その

他新釜山の築港の如き、大なる規模によらずしては、歐亞大陸の極東港とはなれない。安奉鐵道の改築せられたる曉には、釜山港は實に二大陸の一大港となるの運命を有する。此の如くして朝群國は實に多望の將來を有して居る。

日本人が陸續として朝鮮國に入るは朝鮮人に對して大なる刺激劑である。朝鮮人は日本人に屈してその奴隷となるべきか、將奮起して競爭すべきか。競爭すれば生き、屈從すれば死す。朝鮮人はその孰れを取るべきであらうか。吾人は信ず、朝鮮人は死を決して競爭するであらう、否競爭せねばならない。彼等は競爭し得る能力を有して居る。唯之を自覺するばかりである。彼等は農夫として、勞働者として、職工として、商人として、又學者として、日本人と競爭する能力を有して居る。國家としては朝鮮國の日本に及ばなかつたことは論を待たないが、個人としては朝鮮人が日本人に及ばぬ筈はない。國家としては及ばざりしも、國民としては日本人に對して、朝鮮人は遜色なきに至らんこと疑ない、日本人は朝鮮人の好敵手である。朝鮮人は宜しく正々堂々として日本人と生存競爭せねばならない。朝鮮人を覺醒するものは日本人である。故に日本人の朝鮮國に入るは朝鮮人の救

ひである。

福なるかな、基督教は朝鮮國に於て有力なる地位を占めつゝある。基督教は朝鮮人に新なる生命を吹き込み、獨立特行の氣象を振起しつゝある。基督教は朝鮮人の靈の力を自覺せしめつゝある。殊に目下朝鮮國に勢力を得つゝあるは英米プロテスタント教である。プロテスタント教は近世主義の精神を有する。その眞髓に觸るゝものは勢ひ近世活動の新生命を呼吸せざるを得ない。新教はその主義に於て外界の教權に服從するを要求するにあらずして、各自の靈性に神明を自覺せしむるにある。此眞理は未だ朝鮮人の容易に了解する所にあらずとするも、新約聖書が朝鮮語に飜譯せられ、朝鮮人の教徒に讀まるゝ以上は、旣に自治獨立の精神は朝鮮人の胸底に蒔かれたるものといはねばならない。この點に於て朝鮮國の基督教徒が偶々頑迷なる日本人に誤解せられ、非難を受け、困難を感ずることありとするも、到底朝鮮人の勝利に歸するのである。基督教は朝鮮人に新しき心を與へ、奴隷の境遇を脱して、自由の天地に至らしめつゝある。假令朝鮮人は淺薄なる理由に誘はれて、基督教を信じつゝありとするも、その信仰の奥義を自覺す

るときは、實に偉大なる元氣を振興し、高貴なる人格を造るに至るであらう。

基督教はこの道義的能力を自覺せしめて、朝鮮人をして淺薄なる儒教主義の政治論より脫出せしむるを得るであらう。人は役人とならざれば、治者とならざれば、君子でないといふ淺薄なる儒教主教は朝鮮人を茶毒して居る。故に自主獨立といへば、直に政治的に之を解し、干戈に訴へても無謀の企圖をなすべきことの如く思考し、又は他國民の聲援を借らうとする儒教主義は、朝鮮國の爲に厄介なるものである。外國宣教師が此間に處する道は頗る六ヶ敷やうである。しかも彼等の指導者は能くこの消息を承知し、段々と朝鮮人を教化して、基督教主義となさしめつゝある。現今朝鮮國を救濟するものは基督山上の說教である。此新主義を會得して、基督の王國に熱中せば、外形に於ては戰敗者のやうなれども、靈に於て戰勝者たるを得る。活路なくしては日本人の壓迫に由て窮迫し、亂を起さゞるを得ざる境遇にある朝鮮人をして、新に活路を見出さしめ、善良なる自主の國民となし、以て日本人の有力なる兄弟とならしむるものは、賢明なる外國宣教師なるを信んじて疑はない。若し夫れ宣教師にして此見識なく、猥りに朝鮮人の潔められざる

欲望に阿ねることもあらば、是れ正しくクルーゲルの徒である。然らば朝鮮人を滅ぼし、又傳道事業を禍するものは宣敎師である。少數の宣敎師中にはよしや遠慮なきものありとするも、多數の宣敎師は此位の事理に通じて居らない筈はない。時あつてかワシントンを學ぶもよい、しかれども現代の朝鮮國民は斷じて米人ではない。ワシントンを學ばうとすれば却つてクルーゲルの運命に陷る憂がある、英米宣敎師の周到なる注意は吾人の信じて疑はぬ所である、朝鮮人にクルーゲルを夢みるものあるとも、宣敎師は斷じてその謬見に陷らざるべし。日本人は米國宣敎師を信じてよい、否寧ろ彼等をして日本帝國の友たらしむるに務めねばならない。何んとなれば彼等は善良なる國民を作りつゝあるからである。

朝鮮は舊文明を滅茶滅茶に打ちこはしたるが故に、今日となつては新文明を施くに極めて便利である。朝鮮はその文明を失うたるが故に却つて福である。佛敎なきが故に、基督敎に入り易く、倭小の家屋なるが故に、新式の家屋を建つるに故障なく、四十年前に開けずして今日開けたるが故に、世界最新の文明に潤ひ易く、殆んど人間萬事が急激なる大變化をなすに便利である。朝鮮は一見大なる火事後

のやうである。若し夫れ理想を有する人が經營するあらば、朝鮮は一躍して第二十世紀文明の國となる、是れ蓋し痴人の夢ではなからう。

朝鮮の敎化

日韓合併に付きて忽ち一大問題となり、識者の間に論議せらるゝは、朝鮮の基督敎徒である。然り吾人は其一大問題たるを疑はない、我同胞が久しく基督敎を輕蔑し、又は敵視して、其傳播を妨碍したるは、則ち今にして此問題に付き狼狽する所以である。若し夫れ識者が世界の大勢に鑑みる所あり、よしや自から卒先して信ずること能ざりしとせんも、基督敎を敬重して其帝國に於ける傳播を妨碍する所あらざりしならんには、朝鮮の基督敎徒に對し、何も危惧するの要なきのみならず、却て之に依賴する所多い筈である。試に思へ、朝鮮のクリスチャンが外國宣敎師の敎化にならずして、日本宣敎師の敎化によるものとすれば、三十萬のクリスチャンは日韓人を融合するに於て最も有力なる要素といはねばならぬ。朝鮮のクリスチャンは比較的に勇壯活潑なる人民である。儒敎主義の配下に屬するものよ

りも、より多く文明の空氣を呼吸するものである、況んや彼の腐敗墮落の佛教徒とは固より同日に論すべきものでない。然るを新日本人の指導者を儒佛の徒に求めて、新進英氣のクリスチヤンに求めざらんとするが如きは、亦已むべからざる事情もあらうが、最も憐むべき手段にして、斷じて日本帝國の元氣を發揚する所以ではない。此クリスチヤンが悉皆日本人の教化によるものならば、彼等は日韓同化の最も有力なる媒介者たるべきは、吾人の信じて疑はざる所である。

過去の謬見と失體は今日となりて如何ともせられない。今更朝鮮人教化の使命を外國宣教師より我に讓り受けんと欲するが如きは、無謀の企圖といふより外はない。日本に於ても尙外國宣教師の指導を受け、又その傳道會社より補助を受くる教派もあるが故に、何の理由を以てしても朝鮮人教化の使命を我に讓り受くる筈はあるまい。吾人は久しき以前より日本青年會の獨立を主張したものであるが、中々希望通りには行き難い。依然として米國青年會の支部たるの觀なきにあらざれば、此の不完全なる資格を以て朝鮮青年會に何等の助言を與ふる權利なきは、論を待たないのである。是に於て吾人は益日本青年會の獨立を希望せざる

を得ないのであるが、結局日本人が一人も多くクリスチャンになつて優勢となる外はない。願ふ所は一日も速に日本の青年會が、先づ我獨立を宣言し、而して後日本の青年會が新版圖の青年會にその獨立を勸告し、之れと協心同力して帝國基督教青年會の大事業を擴張せんは、その當に取るべき行動であらうと思ふ。又日本に在る教派にして新版圖の教化に從事せんと欲せば、自からその獨立の體面を明にすべきは、先決問題でなければならぬ。之れなくしては我より進んで彼を教化する權利はない。朝鮮のクリスチャンには敵愾心に富むものもある、從つて排日の氣概に燃ゆると傳へらるゝが、或はそうかも知れぬ、吾人は之を聞きて怪しまない。しかも之を諭して我に同化せしめんと欲せば、之に倍蓰する所の氣概と博愛とを以てしなければならぬ。何時までも外國傳道會社に隷屬するが如き根性を以てしては、如何にして彼等に獨立自治の信仰を發揮せしむることができやう。日本の多數なる教派は未だ朝鮮人教化の資格を持たぬ、豈に三十萬の朝鮮クリスチャンを指導する資格あらんや。既にこの資格を缺いて居る以上は、何の理由を以て朝鮮人教化の使命を外國宣教師より我に讓り受くる權利があらうか。

吾人亦在朝鮮外國宣敎師及青年會幹事に勸告せんと欲するものなきにあらず、吾人が一葦帶水の朝鮮に精神的感化を與ふるに能はざるに際し、彼等が海外萬里の異鄕に來つて、基督の福音を宣傳するは、固より神靈の指導によるものとはいへ、吾人はその勇健なる壯圖に驚嘆しないで居られぬ。天も亦忠實なる彼等の事業を祝福して、今日の盛況を見るに至らしむ。吾々は慚愧の情に堪へない。由來日本傳道と朝鮮傳道とは不幸にして親しき關係なかつた。聞く所によれば、米國某所の公會に於て、長く朝鮮に居りし宣敎師と日本に居りし宣敎師とが、各々その直接關係の民族を賞揚して、終に爭論を生じたそうである。吾人はその接近する民族に同情多き宣敎師の美德を認むると同時に、亦その使命の重大なるを認むるのである。日韓民族は最早同一國民族となつた、既に同一國民となつた以上、その宣敎師たるものは宜しく速に合同して一團となるべきであらう、從前の如く相互に日韓の區別を立てゝ論爭するの要はないのである。宣敎師等は從來の傳道策を改め、日本傳道の名の下に協心同力し、布敎の政策を一途にすべきではあるまいか。外國宣敎師が基督の福音を宣傳して日韓人同化の媒介者たらんは、そが神の國を

地上に建設する一大使命たるは疑ひない。此の如くなれば宣敎師の功蹟は永く帝國發展の歷史に於て沒すべからざるのみならず、世界人道史に於て更に一段の光輝を放つべきは論ないのである。この偉大なる感化力は吾人之を在韓外國宣敎師に望むのみならず、亦在日外國宣敎師にも望むのである。外國宣敎師の布敎策は日韓合併と偕に一變すべき運命を有する。宣敎師は夙に之を自覺し居りしならんが、吾人は一日も早く斷行せられんことを望むのである。

組合、日基二派の如きは夙に獨立の宣言をなし、今や驚くべき速力を以て進步し始めたのである。この二派は日韓合併の機會に乘じ、宜しく其の努力の大部分を朝鮮人敎化に傾注すべきである。朝鮮には十五萬の多數會員を有する長老派あるが故に、日基派は別に韓人傳道の必要なしといふかも知れぬ、吾人は別に助言する餘地なきが如しと雖も、日本の日基派は英米の長老派とは大に其趣きを異するが故に、果して朝鮮の長老派と同一派たることが出來やうか。この長老派と日基派と今後何の關係を有すべきかは、定めて日基派の當路者には名案もあらうが、兎に角この二敎會が深き關係を有するに至らんこと、吾人の希望する所である。組

合派に至つては、全く新に傳道を開始するものにて、その獨立主義と進歩主義とを標榜し、堂々として朝鮮人の敎化に從事せんことは、朝鮮傳道に一新正面を開くものである。是れ吾人の注目を價するものにて、朝鮮の將來に一大發展の光明を與ふるものたるは論を待たない。

由來日本組合主義の獨立論は單に經財上の自給獨立をいふものにあらず、敎會政治の獨立を意味するのである。英米の組合敎會も時代を追うて變遷しつゝあるは疑ひない。英國に於ける三百年前の分離主義は一變して獨立主義となつたが、英國の獨立主義は米國に於て再轉して組合主義となつた。日本に於ける組合主義は期せずして、その發展の揆を同うして來た。この組合主義は更に一歩を進めて他派と組合ふに至らんは、亦自然の趨勢であらう。少くともこの博大なる主義を標榜して、朝鮮半島に進み行かんは、吾人の期待する所である。組合派の獨立主義は更に深遠なる意義を有する、他なし信仰の獨立である。信仰の獨立とは東洋人の宗敎的意義に反射し來る基督の人格を意味するのである。このクリスチャン意識は東洋人に特有するものにして、西洋人の最も敬重すべきものたらねば

ならぬ、之を朝鮮人の宗教的意識に發揮せしむるは、組合派の使命である。吾々はこの主義が朝鮮の同胞に擴張せらるゝを望む。

朝鮮精神界の發展は單に教育に一任してはならぬ。識者往々宗教の勢力を輕視し、教育さへ盛になれば、それにて足れりと思惟する傾向を有する、是れ即ち自ら欺くものにて、後日取り返しのつかざる憂を遺すものである。是れ取りも直さず現代の日本が悔悟しつゝある所ではなからうか。元來日本人は未だ普通の知識に暗く、各其行ふ所に僻して他を顧みざるのみならず、却つて之を妨碍する憂がある。教育家も亦此偏僻を免れない、宗教を輕視するのみならず、之を以て教育の敵とするのである。實業家は亦黄金萬能主義を鼓吹して、宗教道德の眞價を認むることができない。政治家も亦その政策を弄して、道德の權能を蔑視する、是れ日本人の大缺點である、若し夫れ朝鮮人を同化し、新版圖を開展するに於て、人々各其行ふ所に僻して、他を顧みず、又之を妨碍することもあらば、獨りその目的の達せられざるのみならず、却つて失敗の跡を永く史上に止めんは疑ふべからず。苟も帝國の進運を希ふものは基督教信者たると未信者たるとを問はず、朝鮮教化の事業に

聲援を加ふべきは寧ろ當然の事と思はる。朝鮮傳道は一面に於ては新日本人の同化に外ならぬ、教育家たり政治家たり、實業家たり、宗教家たるを問はず、宜しく協心同力すべきである。政治たり、教育たり、實業たり、宗教たり、一として大國民の事業たらざるはない。その一を缺くは是れ自から不慮の禍を免くものである。由來宗教といへば、全く出世間の事にして、實業にも、政治にも、教育にも、關係なきものと思惟した。焉んぞ知らん、宗教の有無又は善惡は社會萬般の上に大反響を擧くるものなるを。朝鮮の基督教問題は苟も國家を愛する者の心外に放棄し得ざるものである。故に朝鮮人の教化は獨りクリスチャンの專有事業にあらず、日本國民の事業たるを忘れてはならぬ。

吾人夙にこの主義を主張して、毫も倦まないのである。誤解する勿れ、吾人の主張は斷じて排外主義ではないのである。基督教は獨立特行を旨として、社會に於ける個人の眞價を發揮する。個人が社會の感化を受け、又その恩惠を受くべきことは、固よりその所なれども、しかも個人にして自修自立、自營自治の精神がないならば、斷じて强健なる社會を形成することを得ない。此の如く基督教は人類的世

界的精神の感化を重要視し、博愛共同の事業を經營するものなれども、亦各團體の獨立自治を重視するものである。國民は政治上のみならず、經濟上のみならず、敎育上のみならず、宗敎に於ても自治すべきものである。その幼稚なる時期に於て他の助力を受くるは、亦已むを得ざることなれども、苟も一大國民たるものは、飽くまでも其自治の能力を發揮するにあらざれば、自立することはできない。唯できないのみならず、他の國民と協力することを得ないのである、國民の靈能を發揮する宗敎に於ては寧しろ卒先して此獨立自治の元氣を鼓吹すべきである。吾人が新日本人に希望する所亦之に外ならぬ。朝鮮は日本の一大部分である、その人民は我同胞である、その敎化の如きも外國人に一任することなく、自から擔任して起つべきは論を待たないのである。是れ吾人が由來主張したるものにて、今に至つて愈その主張の過らざるを自覺する、吾人は朝鮮の同胞にも此主義を主張し、その日本人たるの面目を發揚せんことを欲するのみ。旣に此覺悟あらんか、外國人の來つて神國建設の爲に吾人と協心同力するは、固より辭すべき所にあらず、却て之を歡迎せねばならぬ。吾人も亦海外に出でゝ神國建設の爲に盡力すべきではな

からうか。神國は國民の中にあり、國民を超越し、又國民を貫通する。しかも國民をなみするものにあらず、寧ろ其生命となつて成立せしむるものである。この大眞理は吾人が力を盡して、我新しき同胞に告ぐべき福音ではないか。殊に我新同胞の運命はこの靈界に開展すべきである。故に基督敎の傳道は世界的事業たると、同時に亦國民的事業である、朝鮮に於ける敎化事業は日本國民の國民的事業たるを忘れてはならぬ。假令信條に於ては一致せざる所あらんも、此國民的クリスチャンの事業は宜しく全國民がその後楯となつて協力すべきは、國家の見地より觀れば、實に一目瞭然である。當局者は獨り朝鮮のクリスチャンに對し、信任を厚うすべきのみならず、帝國四十萬のクリスチャンの國家に對する正心誠意を重信して然るべきである。

併合後の朝鮮

明治四十三年の春は朝鮮の野も山も荒れ果てゝ、稀に瘦せたる赤松がひねくれて山腹にたゝづみ、又村近き畑に麥の苗がさびしげに列をなして、吹きおろす寒き

山風と戰うて居るのみ、亦何の目を娯しましむる草木もなかつた。然るに其翌年の夏は恰も早苗植ゑ付けの眞最中とはいへ、光景全く一變、農家の男女樂しげにいそしみ働いて居つた。野も山も見渡す限り綠の衣を纏ひ、此方彼方に栗、唐松、赤楊、櫟、楞等の靑々として茂り、分けても明石屋、ポプラは時をえがほに生ひ育ち、朝鮮の野山はつまり我占領すべき所なりといはんばかりに立ちのびて居る。又センダン、エンジュの樹は見事に育ちて大空に聳え、鵲をしてその樂しきホームを營ましむ。余等の一行は一朝和田博士の邸内に於ける此大樹の木蔭芝生の上にて野宴の饗應を受けた。朝鮮の夏期は炎熱烈しいと聞いて居たが、そは日中數時間のことにて、朝夕の涼さいはん方なし、取り分け夜は天高く星明にして、さながら秋の心地する。朝鮮の風光は北海道に似て、更に之より勝りて大陸的である。こゝに多望の將來が孕んで居る。空氣が乾いてる爲か、心志を勞しても疲れを覺えない。端なく人をして後世の恐るべきを想はしむる。遠く見ゆる高き山は甚だ嶮はしく、しかも河は悠々として流る。植林の事業その功を奏する曉には、見ゆる限り蒼々たらんは、豈に想像し難からんや、地味は極て樹木に適す、果樹の如きは既に植付

けらる、村々を賑はさんと遠きでなからう。桃や林檎もそろ〳〵出始めた。

朝鮮は支那の遺風をその儘受けて、治者被治者の別を立つ。農民は極めて純朴の被治者である。彼等は餘りに純朴に過ぎて居る、簡易生活もこゝに至つて、最早非文明といはねばならぬ。白衣は單純の極である、麻の衣も簡易の極に達す。家は飾のない茅屋にして、僅に雨露を凌ぐのみ。日本の武士訓に、家は雨漏らざればよし、衣は寒からざればよし、食は腹ふくるればよし、妻は賢ければよしとあるが、朝鮮はこの敎訓を極端にまで應用したものと見ゆる。農民は治め易い從順の人民に相違ない。この農民には理想もなく欲望もない、出來得べき丈自然生活を旨として居る。故に朝鮮の農民は支那人には理想的であらうが、我々には極て非文明的と見ゆる。質素儉約主義も無欲淡泊主義も純朴天然主義も恐るべき華奢に對し、又は猛烈なる欲望に對しては、多少取る所もあらうが、元々消極主義なるが故に、之れが主人公となるときは、人民の腦裡より高大の理想を奪ひ去り、終に衰亡に陷らしむる外はない。朝鮮の農民は此儒敎主義の中毒に罹つたものといはねばならぬ。民は之に由らしむべし、之を知らしむべからずとの儒敎主義を旨とし、先天

的に農民を被治者としては、到底人民に獨立自尊などの氣概は起りやうがない、朝鮮の衰頽は畢竟するに此支那流の政治主義に基するもの少くはなからう。朝鮮人を同胞とした以上は、之に理想の活火を與へ、前途洋々の大希望を起さしむるにある。それが生意氣となるを恐れてはならぬ。

日本人も由來支那流の官尊民卑主義に傷はれて、今尙その弊習を脫し兼て居る、明治初年以來普通敎育は廣く奬勵せられて居るなれども、人民の思想は到底官吏には及ばない。從つて官吏は尊大を稱へ、人民は自から卑下し、若し夫れ幾分にても氣概あるものは、官吏に對し不平を鳴らし苦情を鳴らすは、殆んど一般の風習である、日本人は朝鮮にも此弊風を携へ行きつゝある。從つて官吏は斯る不平の人民を厄介視しつゝあるやうに思はる。今後朝鮮の政治には朝鮮人よりも寧ろ日本人を取扱ふことが難事ではあるまいか。官尊民卑の弊習は朝鮮に於て最も其著しきものを見る。我々の所謂官尊民卑といふは、官吏が尊大に構へて、人民を輕蔑して居るといふ譯にあらず、朝鮮に於ては官吏も親しく人民と交り、殆んど隔意なきやうである。我々がいふ官尊民卑は取りも直さず官業の大にして民業の小

なることである。官業には規模あり、理想あり、實行あるも、民業に至つては規模なく、理想なく、實行なし。例へば新市街龍山の如きを見ても分る。道路の如き自から規模あり、理想あり、將來朝鮮第一等の都會を造る意匠あるが、人民の事業は果して此官業にそひつゝありや。一等道路の兩側に建つる所の民家は見るに堪へないものばかり、その規模構造は三等又は四等道路に似合しきものにあらずや。又官業に屬する家屋は隨分朝鮮の風土に鑑み、新しき意匠を備ふ。然るに人民の自ら建築するものは日本内地のまゝを持ち來り、大工は舊式を蹈襲して適應の道を講せぬ。尤も稀には朝鮮の風土に鑑みて居るものなきにあらざれども、餘りに注意して見るべきものはない。折角の事官廳は思ひ切り蹈み入つて干渉しては如何、干渉とは民業を補助する爲である、民業を奪ひ又は之と競爭する意味ではない。總督府も貧乏處帶の日本を代表して居るから、多くの事は望まれないが、龍山の新市街の如きには二階なり三階なりの理想的家屋を建築して、之を人民に貸し與へ、又は賣り下げては如何であらう。官民共に母國以上のものを造り出す理想と決心とがなくては、新領土を開拓するインスピレーションがおこらない。官廳の骨

折は實に察せらるゝのであるが、獨り朝鮮人を敎育するといふに止まらず、日本人を敎育する覺悟を以て一段の奮發あらんことを望む。

これは官廳で出來得べきことではないが、苟も文明の思想を有する日本人の注意を拂ふべき所である。日本人が朝鮮へ樣々の迷信を携へ行くことは、固より禁ずる譯には行かないが、願くは文明世界に宣傳しても、恥しからぬ宗敎を布敎するやうに致したい。文明に恥しからぬ宗敎といへば、高尙なる基督敎か、善良なる佛敎でなければならぬ。佛敎はその敎理に於て深遠を極むといふなれども、到る所醜業婦共を檀家として恥ぢざる弊習は、朝鮮に於ては廢して貰ひたい。下等社會の友となりて之を敎化し、善良なる人民となすことは我々の心から願ふ所なれども、彼等の醜業を大目に見て、之を看過し去るは甚だ宜からず。心ある朝鮮人は僧侶を侮ると同時に日本人を侮ることになる。基督敎も佛敎も殖民地にてはその最も秀でたる所を實現するやうに致したいものである。殖民地は心機一轉の地である、舊來の陋習を破つて、萬事新理想に進むには、最も便利なる境遇である。この好境遇を逸せずして、人民の信念を高遠に又神聖に進むることは、我々心ある日

本人の最も盡すべき所ではあるまいか。

朝鮮に於ける在來の佛敎は墮落の極に達して居る。寺院は存して居れども、僧侶は京城に入るを許されなかつた、故に寺院は地方の人煙稀なる所に遺つて居る。寺院は墮落して待合となり、僧侶は乞食となり、尼は娼婦となつてしまつた。多少民間にて力をもてる者一種の拜天敎を奉じて居る。しかれども今日及び將來に於て勢力あるものは基督敎である。英、米、佛の宣敎師は熱誠を灑いで布敎して居る。彼等は熱誠に於て金力に於て事業に於て最も優勢を占めて居る。朝鮮の狀態を見れば、政治上は日本人、宗敎上は米、英、佛人之を支配して居る觀がある。朝鮮人は日本人に對しては畏服し、米英佛人に對しては悅服の姿を呈して居る。日本人の長短共に朝鮮に於て著しくあらはれて居る。明治初年より日本の識者が宗敎を侮り、之を攻擊し、之を度外視した結果は、朝鮮に於て日本人が之を食はねばならぬやうに餘儀なくせらる。眞に困つた次第である。今にして覺醒する所がないならば、亦如何に恐るべく悲しむべき結果を嘗めねばならぬか分らない。恐れざるべからず。近頃鼓吹せらるる祖先崇拜の如きも、亦如何なる影響を朝鮮の天

地に及ぼすべきか、杞憂なきを得ない。　將來の理想實現のインスピレーションに生きざる人民に對し、祖先崇拜を鼓吹するは最も恐るべき保守の精神を發せしめ、その狹隘なる愛國心を增長して、敵愾心を挑發するのみ。　官民の間、心ある人々亦大に警醒して貰はねばならぬ。

日本人は由來愛國心のみを養成して、愛國の事業のみに誇つて居る。　朝鮮人の政略は日本人と異なり、事大主義の誹を受くれども、その愛國心は亦日本人に劣らぬものがあらう。　彼等の心底何の活火が宿るかは、容易に知るべからざれども、亦容易に心服せしむべからざるものあるは疑ひない、敵愾心と敵愾心、愛國心と愛國心、復讐心と復讐心とは共に天を戴かざる性質を有する。　しかも之を融合し、同化し、混和して、更に偉大なる愛國心たらしむるものは、愛國心を超越する博愛心である。　朝鮮半島は日鮮人の混和によつて新天地を開くべき土地である。　天高く星明に、山巖々河悠々、署烈しく寒嚴し、地味豐に家畜肥えたり、佛敎曾てこゝに來り、新羅、高麗の文明を造つた、儒敎は李朝に盛大を極めて、終に國家の衰亡を來した。　基督敎復こゝに新に開け、亦將に何の天地を造り出さんとする。　人民は最早元々の

新羅人にあらず、高麗人にあらず、韓人にあらず、日本人と混淆したる朝鮮人たり、朝鮮人に混和したる日本人たらんとする、しかして之を精神的に支配するものが基督教たらば、こゝに新しき人民と新しき宗教とを見るに至らんとする。然らば則ち朝鮮は百年を待たずして、一大新天地を開かんこと、亦我々の望み難き所にあらず、此新なる朝鮮人は日本に於て經驗したる教育と政治との恩澤を受け、人格主義の基督教に育てらるゝの曉は、則朝鮮に於て前代未聞の文運を見るの時あらんこと、吾人の信じて疑はない所である。

朝鮮基督教徒の使命（一）

千古未聞の民族開展の時機に際し、新に日本帝國の臣民となり、我が敬愛する同胞となりたる朝鮮の基督教徒は、我が精神界の發展に關し、吾人と同一の使命を有するものなるが故に、吾々は茲に我か新同胞の覺語を促さんと欲する。朝鮮の國運年々衰頽を告ぐる時に當り、基督の福音が朝鮮に宣傳せられたるは、恰も晩秋草木黄み落ちて、冬枯の時期を告ぐるに際し、青葉の萠芽既に胚胎の狀勢を取りて、一

陽來復の期を待つやうである。舊朝鮮が根底より破壞せられて、新朝鮮の復活し來らんは、正しく運命の彼處に閉塞して、此處に開展するものたらずんばあらず。佛教は日本に先んじて朝鮮に傳はりたるが復日本に先んじて朝鮮に於て亡びたのである。過去五百年間儒教は之に代りて、朝鮮人の指導者たりしと雖も、不幸にして其の倫理的方面も十分にせられず、その濟民的政策も發達せず、その政略的方面のみ最も興味を以て皷吹せられたので、儒教を學ぶ者は一々政治家たらんと欲し、權謀を盡し術數を極め、爭奪是れ事とし、名利に狂奔して、僅に一家の安樂を貪るばかりとなつた。若し夫れ功名利達を超越せんと欲する者は、頑として世界の大勢を顧みず、獨り別乾坤を形作りて、自ら尊しとした。朝鮮人は儒教の中毒に罹りたのである。基督教は全く之に反す、歐米の平民的文物を持ち來り、世界的信仰の原理を明にし、人道の大義を示し、勞働の貴きを高調し、各自の獨立特行を主張し、以て光明と生命とに滿つる神の國を地上に建設せんと試みる。半島の民族がこの大光明に接したるは、その復活の生命を發揮する所以たらずんばあらず。我が十萬のプロテスタント教徒に半島三十萬のプロテスタント教徒を加ふるは、大日本

帝國の道義的發展上一大優勢を得たるものといはねばならぬ。日鮮人が今後大帝國を形成するに當りて、日鮮の基督敎徒は相互に親善の交りを深うし、日鮮二民族に對し好模範を示すべきとは、吾人その天與の使命たるを信ぜずんばあらず、故に吾人は基督に在る我が新同胞に對し、一言の已むべからざるものがある。而して彼れ亦吾人の言に傾聽するあらんは、吾人の信じて疑はざる所である。

日本帝國に於ける吾人基督敎徒の使命は重且大なるものである。帝國六千五百萬の同胞中、基督敎徒たるもの僅々四十萬人にして、人口百五十分の一にも足らぬ。然らば則ち吾人の猛進して取るべき急務は福音の宣傳にあらずして何であらう。吾人は萬事を差置き、專心一意、我が同胞の敎化に盡力すべきである。由來日鮮人は儒敎の中毒により、政治家とならざれば、恰も士君子たらざるかの如き感を懷いた。然るに政治家たらずとも、國家社會の爲め大に貢献をなすべき道あるを示したるは、則ち基督敎である。初代の基督敎徒にして政治家となりしもの殆んど稀である。彼等は專ら民間にありて、福音を宣傳し、同胞敎化の使命を果し、三百年を經過して始めて國事に關渉するものとなつた。その忍耐、識見及び度量は

實に頌賛するに餘りある。吾人政治的野心なきにあらず、然れども是れ斷じて神の使命にあらず、吾人の抱懷する大理想は信仰に由れる義人を地盤とするにあらざれば、實現すべきものでない。基督教徒ならざる民族の基礎の上に、吾人の理想を建てんとするは、砂上に家を建つると同斷、洪水の爲に打流さるゝは必然也。故に千年の大計を立て、基督の福音を宣傳して、我同胞の敎化に從事するは、吾人の天職たらずんばあらず。この宗敎的事業は取り分けて日鮮人の旨とすべき所である。既に基督敎の恩化に浴する歐米人とはその境遇を異にする。察せずんばあるべからず。

朝鮮人は儒敎の、政治萬能主義に中毒して、政治に失敗した、今後三十年や五十年を經過するとも、政治の事業に於ては到底日本人に及ぶべからず。然れども他方に於て必ず一大生面を開くべき活路がある。朝鮮人は果して日本に於ける過去五十年間の事情を知るであらうか。王政維新の大改革は薩長二大藩が牛耳を取りて斷行したのである。二藩が幾多の大政治家を起したるは殆と數ふべからず。一市街の士族は軒を連ねて蹶起し、終に天下の大政治家となつた。爾後四十四年

間政治の主權は薩長人の手に歸する。幾多の雄藩が之と競爭し、其政權を奪はんと試みたれども、能はなかつた。薩長人は決して政權を私したるにあらず、彼等に由らざれば、天下は治らなかつた。朝鮮人は政治的事業に於て失敗した。今後五十年又は百年間は政治上の舞臺に於て日人と競爭するは斷じて智者の畫策にあらず。吾人は朝鮮人の爲に憂慮する所がある、若し夫れ政治の舞臺に於て常に劣敗者の地位に居らんか、結局悲觀の淵に沈むのである。是れ朝鮮人の爲に最も悲むべきことではなからうか。彼等は別に雄飛する天地を擇ばざるべからず。天は盈つるを虧きて、虧くるを盈たす、薩長人は政治界に於て優勝者なりと雖も、精神界に於て劣敗者となつた。試に帝國大學の總長敎授等を視よ、總長たるもの、文科敎授たるもの、理科敎授たるもの、醫科敎授たるもの、動植物敎授たるもの、吾人はその薩長人ならざるを知る、其他高等學校、高等師範、高等商業の敎權を有する者は、殆んど皆薩長人ならざるのである、有力なる新聞記者小說家にして薩長人なるものの果して幾人あらうか、宗敎界に至つては薩長人なるもの殆んど無能力である。彼等は單に政治家たり軍人たるのみ。この政治家軍人の世界に於てすら、薩長人

は今後尙幾十年の生命を有すべきであらうか。吾人は其餘りに長からざるを豫言せざらんとするも得ない。朝鮮人は基督敎徒となると雖も、其數百年間養ひ來りたる政治的慣習を脱せんことは、固より容易の業にあらざるべし。然れども若し夫れその覇氣を示さんと欲せば、須らく政治的嗜好を斷念せねばならぬ。吾人は人格の根本より天與の理想を築き建つるの必要がある。基督曰はずや、上より新に生るゝにあらざれば、神の國に入ること能はずと。信仰に由れる義人にあらざれば、神と偕に永久なるを得ない。是れ吾人の奮鬪して得んと欲する人格ではなからうか。固より常人の欲望と同日の論ではない。朝鮮の基督敎徒もこの根本的立脚地に立ち、偏に愛に由つて働く信仰の發揮に留意し、以て士君子の品格を旨とすべきである。この品格を有するものゝ我が帝國精神界に於て優者たるを得べきは、國民道德の進歩に照らして明に知り得らる所である。吾人は斷じて獵官熱に侵さるべからず、農もよし、工もよし、商もよし、敎育に從事し、傳道に熱中し、我同胞の德性を研磨し、靈的勢力を着實の業務に扶殖し、以て百年の大計を立つるは吾人の使命たらずんばあらず。朝鮮の基督敎徒がその天職を自覺し、その職分を

遂行し、以て神の聖旨の成就に盡瘁するならば、彼等は獨り半島一千二百萬の同胞を指導する光榮を荷ふのみならず、又日本全島の基督敎徒と協心同力して、帝國六千五百萬人の道光たらんと、蓋し亦難きにあらざるべし。果して此の如くなるを得るならば、朝鮮人は政治界に失敗したとても、精神界に於て勝利者たるを得るであらう、是れ眞の光榮でなからうか。精神界に於て勝利者たるものは、亦實業界に於ても、政治界に於ても、早晩優勝旗を得るに至らんは、萬國の事實に徵して明かである。基督言はずや、爾曹先づ神の國とその義とを求めよ、さらばなくてかなふ間敷きものは必ず與へらるべしと。精神界は本なり、實業界と政治界とは末なり、吾人は朝鮮の基督敎徒がその識見を開き、專心一意傳道に從事せんことを望まずんばあらず。

政治的野心を傳道上の運動に混入して、政治的運動の機會を作らんと欲するものなきにあらず。是れ正しく綿羊の毛皮を服する豺狼にして、基督の罪人である。吾人は此の如き野心家が覿面に失敗して、天罰を蒙らんこと、鏡に懸けて見るを得。畏れざるべけんや、愼まざるべけんや。日本に於ても嘗て政治上の野心を懷きて

吾人の中に入り來り、福音を利用して、その政治的野心を貫かんと企てたるものもあつた。皆中途にして失敗し、逆賊となりて、戰死したるものもある。吾人京城某敎會堂の集會者一時一千より八百に減じ、八百より五百となり、五百より更に減じて三百に下つたといふを聞く。政治的野心にあらずんば、敵愾心に欺かれたるのゝ致す所ではなからうか。基督は敵愾心の役者たるべきものでない。基督の福音は博愛のそれにあらずや。又基督の國はこの世の國にあらず、眞理の國である。朝鮮の基督敎徒はよしや野心家を失ふことあらんも、慷慨家を失ふことあらんも、意とすべからず。吾人は勵んで基督の福音を宣傳すべきである。吾人は熱禱を捧げて傳道し、敵愾心を靈化して博愛心となし、政治的野心を去つて、公明正大なる基督魂を受くべきである。是れ朝鮮をして精神的に偉大ならしむる所以ではなからうか。此の精神的偉大を發揮し來るときは、日鮮の基督敎徒が大日本帝國に於て優勝旗を得んことは、吾人の信じて疑はざる所である。日鮮の基督敎徒は帝國中に帝國を發揮するものである。朝鮮人にしてもし帝國の內部に胚胎する靈的帝國の臣民たるを得んか、是れ取も直さず、將來の大日本帝國を形成する忠臣義

士たる人である。是れ吾人が朝鮮の基督教信徒に望む所にして、彼等と偕に終始行動を同うせんと欲する所である。吾人は基督の靈を有する朝鮮の基督信徒が吾人の眞意を諒察し、勇奮猛進、吾人と協心同力し、以て帝國の同胞をして基督の博愛心に充滿する世界的國民たらしむるの責任を自覺せんことを欲する、是れ吾人の祈願して止ざる所である。是れ獨り東洋大帝國の忠良の臣民たるのみならず、同時に神の國の忠臣たる所以ではなからうか。是れ吾人基督教徒が神より賦與せられたる使命にあらずして何であらう。吾人はしか確信するが故に、敢て朝鮮基督教徒の覺醒を促さんと欲するのである。

朝鮮人の使命（二）

人類社會の事は强ちに一を以て萬事を推測る譯に行かぬ。例へば、政治上或は經濟上に於て最も秀でた國民が、必ず他の有らゆる事柄にも卓越するとは限らぬ。尤も近世の歐米諸國は此等の缺點を能く補うてゐるが、併し基督教の未だ傳はらぬ國々又は未だ傳はらざりし以前の國々の文明を觀れば、一面に驚くべき缺點が

露れてゐる。譬へば羅馬人は政治上軍事上又經濟上に於て、實に優れたる民族であつて、その地中海の周圍を征服し、樣々の民族を統一して、一大帝國を建設した手腕は、恐らく空前の事業であつて爾來未だ嘗て是れ程の技量を表はしたものは無からう。然も其の國民が宗教上に於て自から何程の貢献をなしたらうか。彼等はその征服した猶太民族の爲めに、却つて精神上征服せられ敎化せられたのである。文藝上に於ても羅馬は希臘の征服を受け、憂國の志士カトーをしてギリシャ人我等を征服したと斷腸の聲を發せしめた。

此の如く政治上に於て世界を征服した羅馬は亡びて、纔かに史上にその偉大なる事蹟を遺したに反し、征服せられた猶太に起りし宗敎は、其の活きた感化を今尙益々世界に及ぼして行く、彼の羅馬帝國に代りて顯はれたる天主敎會は、今も世界的勢力を逞うして、五大洲の中何所にも其勢力を及ぼしてゐる。之を近世東洋の狀態に比べて看ると復た大に思ひ當る所がある。今や我日本帝國は熾に勃興しつゝあるが、是は歐米諸國の發展とは少しく其の趣を異にして、唯軍事上、政治上、又經濟上に於ける發展であつて此の姿は恰も基督敎の行はれざりし時代の羅馬の

發展に類似して居る。日本帝國の宗敎的感化は僅かに傳說に止まつて、未だ開け進むべき所を知らない。已に業に我が國に於てすら眞の宗敎的感化は地に墜ちて、虛空に吠ゆる聲のみ高い。既に國內に於て然り、況んや外國に向つての宗敎的感化は見る影もない。爰に我が驚くべき缺點は曝露せられて居る。

吾人は最早歷史の羅馬を語る事を休めて、現在の我を觀ねばならぬ。茲に不思議なる現象が起つてゐる。それは朝鮮半島に於ける宗敎上の狀態である。此の民族は由來國家として生存しては居なかつた。之を猶太民族と一樣に云ふ事は出來ぬが、兩者の間に餘程相似た點が有る。元來ユダヤ人は氣力の有る民族であるが、國家を成す上には餘程缺點があると見ゆる。第一に其の地利を得なかつた。その南にはナイル河の帝國あり、その東にはユーフラット河の帝國ありて、ユダヤは是等二大帝國の間に介在せるが故に、完全なる獨立を維持する事は出來なかつた。是等二大河の交る〳〵氾濫する每に、ユダヤはその災厄を免かれなかつた。時に國威を隣境に逞うした時代もなかつたではないが、夫は二大河の水枯の虛に乘じたまでゝある。恰も朝鮮の位地は彼の猶太の狀態であつた。一方には大陸

に連なり、一方に島帝國を控へ、時には彼より又時には是より壓迫を蒙つたので、獨立を完うすることを得なかつた。併し乍ら、由來此の民族は決して氣慨に乏しきものではない。曾ては世界人文の上に大に貢獻したのである。殊に我が日本が彼より受けたものは多大であつた。大陸の文明を輸入したのは常に朝鮮を通じてゞあつた。儒敎も彼に依り、佛敎も彼に依りて傳へられた、而して儒佛共に其の折々に中々發展したのである。新羅高麗時代に榮えた佛敎の遺物には、當時の文明を知るべき程の立派なるものが在る。彼にも亦猶太のダビデ、ソロモンの時代があつた、彼の萬里の長城の內にまでも其の勢力を逞うしたといふ歷史も有してゐる、併し國家としての勢力は矢張ユダヤと同樣であつて、是れと取り分けて云ふべき程のものではない。唯特筆すべきものは彼の大陸の文明を善く消化して、之を日本に貢獻したといふ點である。近くは秀吉の朝鮮征伐の時に於ける、朝鮮は實に二大帝國の戰場と成つて憫むべき狀態であつたが、併し彼の朝鮮人が日本に貢獻したものは決して尠くない、當時戰に臨んだ大名等は各々朝鮮の技工を伴ひ歸つた。此の點に於ても日本の文明に資した所は今日も尙ほ見る事が出來る。

儒教に在つても李朝に至つて、最も進歩したものが有る。日本の儒教は直接に彼より受けた所のもの少くない。若し夫れ李退溪の感化の如きは看過すべからず。肥後學系の中には朝鮮の學者が這入つてゐる。そして其の子孫は熊本の時習館の館長と成つて大に貢獻した所のものが有る。横井小楠は蕃山の學に併せて彼の李退溪の學に大に採る所があつた。小楠と略時を同うして出たものは彼の元田先生である。元田先生は經世の學よりも專ら李退溪の心術の學を學んだ人である。而して此の人は常に我が天皇陛下の傍に在つて儒教を講義した儒者である。故に或る人は李退溪の學系は元田氏を通じて深く我が皇室にまで及んだと云ふ。

此の如く政治上に於ては常に弱手たりし朝鮮は、其の文明に於て又其の精神界に於て日本に及ぼしたるもの決して少くない。然し何故に今日の狀態に至つたかに就ては、色々の原因も有らうが、其の一は慥かに經世の學を有しなかつたからである。この一事の缺陷の爲に、朝鮮人は決して侮らるべきものではない。今や朝鮮半島は日本の版圖と成り、吾人は新たに一千二百萬の同胞を加へたのである

が、單に一の半島と新同胞とを增したといふのみならず、茲に一種の新らしい力の加つた事を認めねばならぬ。朝鮮半島に基督教の傳へられて居つたことは最も注意すべきである。僅に二十五年にして三十萬の信徒を作り得た事は、正に近世の傳道史上に特筆すべきことである。僅かに十萬內外の敎徒を有する日本に、三倍の數を贏ち得たるは實に見遁すべからざる事實といはねばならぬ。是は全く其の境遇が然らしめたと見てよい。殊に只儒敎のみを採つて佛敎を破棄したる李朝政策の結果は、基督敎の入るに最も易からしめたのである。儒敎は只倫理の一天張で、宗敎を有しない。而して儒敎の倫理は基督敎の宗敎道德を識るに最も都合の善いものである。世界の歷史に於て頑迷なる宗敎の爲に其の國を亡した る國もあるが、同時に吾人はまた宗敎無き爲に亡びた朝鮮の如き國を見る。基督敎はこの無宗敎の空虛を衝いて侵入したのであるが、朝鮮はこの基督敎に由つてその活路を開き得るのであらう。

我が日本は、基督敎の入るに先立ちて、歐米の科學思想、殊に非基督敎的科學及び文藝を好んで輸入した故に、基督敎は獨り佛敎の反對を受くるのみならず、歐米科

學の反對をも擊退せねばならぬ運命を有して居る。日本の基督敎は是等反對の困難なる路を通らねばならぬが、朝鮮にては斯る思想上の困難も無い。それに何れの方面を向いても壓迫を感ずるのに、獨り彼の宣敎師等の同情と慰めとは、偉大なる勢力を朝鮮人の腦裡に及ぼした。從つて基督敎が破竹の勢を以て宣傳せれたことは、決して怪しむに足らぬ。恰も善き地に種を蒔いたやうなものである。玆には吾人が開國の當時、米人より受けたるものよりも更に深い印象があると思ふ。朝鮮は日本の版圖となつたればとて、毫もその信者の自由をさまたげらるゝ憂なきが故に、基督敎が今後更に驚くべき發展を遂ぐる事は、豫め知り得らる。此の偉大なる基督敎の感化を受けつゝある新らしき同胞の加へられたことは、日本の宗敎界に大なる影響を及ぼさないであらうか。

東本願寺の根據地が美濃、尾張、及び北陸の地方である如く、今後朝鮮は日本の基督敎の根據地となるかも知れぬ。基督敎が日本國家の上に如何程の効果を與ふるかは、未だ經驗せられて居らぬ。全く莫い譯ではないが、極く狹い範圍に限られてゐる。朝鮮には基督敎の大なる感化とその事業とが着々實驗せられつゝある。

其の程度は未だ幼稚ではあるが、併し彼等は之を信ずることに由りて活路を開き得ると思ふ。彼等政治上に於ては、今後四十年或は五十年の後に非ざれば、日本人と對等の地位を得る事は六ケ敷い。日本に於てすら彼の王政維新の際に有力であつた薩長の勢力は、今日尚ほ奪ふべからざるものと、世人に認められてゐる。維新の際立ち後れた藩々の人々は今日やつと大臣と成り得るのであるが、未だ總理大臣となるものは一人も無い。更らに海陸軍に至つては猶ほ甚だしいのである。明治は最早四十四年となる、而も猶斯る狀態とすれば、併合せられた朝鮮人が此の方面に於て相當の勢力を得る迄は、前途尚ほ遠しと想はねばならぬ。又學術界に於ても日本の學者を凌駕する日はさう早くは來まいと思ふ。處が朝鮮人の爲に爰に發展すべき一筋の道が在る。夫は宗教界のことである。若し之れが佛教とすれば、日本には多くの名僧知識がある故に、朝鮮人は中々頭が擧らないのであるが、比較的空虛なる基督教であるが故に、朝鮮人の爲には實に仕合といはねばならぬ。若し朝鮮人が此の方面に於て愈々面目を開いて來れば、其處には大なる活路が開けて來る。朝鮮人は日韓併合の大事業に於ては大に立ち後れて、日本人に先

んぜられたなれども、その代りに基督教に於て先取權を得ること不可能といへぬ。或はこの方面に於てその面目を施し得るであらう。日本の基督教を代表する人々は薩長人ではない、政治界に立ち後れて失敗した舊藩の子弟が多い。又學問界に於ても是と同じ事實が有る、而も明治の初年より學界の威嚴を保つて來たものは薩長人ではない。是等は最も朝鮮人の參考とすべき明治時代の事實である。神は常に強き者のみの助でなく、又弱き者の扶である。假令政治界に於ては凡てを失うても、猶ほ精神界に於て大なる餘地を有する朝鮮人は、今後日本人に對して勢力を示すべき希望の餘地あるを忘れてはならぬ。政治上に失ひ、又學問上に後れたる朝鮮人は、宗教上に於て大いに覺醒し、帝國の指導者たるべき面目を開かねばならぬ。朝鮮人の自任すべきは實にこゝにあるを疑はぬ。政治に爭ふは不可、學術に競ふも未だ及ばず、只宗教界に於てのみ、彼等の活動の餘地がある。此の方面に立ち向ふ時は、彼等は大なるものを帝國に又世界に貢献し得ることが出來やう。吾人は彼等が大なる勇氣を鼓舞せん事を切望する。朝鮮人は實に日本帝國の教化を自任して欲しい。吾人は牧師觀光團の熱誠と意氣とを見て非常に意を

强うした。彼等の盲者蛇に怖ぢず的の信仰を喜ぶ。彼等の如何に世界的なるを喜ぶ。彼等は東洋といひ世界といふ。彼等の之をいふ可也、しかし救世の事業は先づエルサムより始むべきである。朝鮮人は日本帝國の敎化を以てその敎化の第一先鋒と覺悟せねばならぬ。帝國を敎化し得るものは東洋を敎化すること難からず、世界に感化を及ぼすこと亦難きにあらず。若し帝國を敎化し得ざらんか、東洋といひ世界といふは、大言壯語のみ顧る價値はない。朝鮮人は宜敷帝國敎化の大任を負うて起つべきである。彼等は速かに日本にその傳道師を送らねばならぬ。宜しく大擧して來らねばならぬ。是れ鮮人の日人に酬ゆる所以ではなからうか。帝國の敎化は彼等の祈禱たるべきは論を待たぬ。是れ鮮人の最も光榮ある事業と信ずるが故に、吾人は敢て之をいふのである。

吾人は斯る希望を彼等に有するが故に、我れより先んじて朝鮮人傳道を開始したのである。吾人は努めて彼等の活路を開き、彼等をして信仰上日本帝國に貢獻すべき所あるを自覺せしめんと欲する。この大自覺に依て彼等は從來の狹小なる心を脱し、世界的大精神に入るを得る。彼等のうち日本に對して恨を抱くもの

時までも浮ぶ瀬は莫い、只益々民心をして偏狹ならしめ、卑屈ならしめ、僻ましむるのみである。敵を愛する基督魂は乃ち彼等自身の救濟である、況や其の併合の同胞を愛するは、最も適切なる應用ではなからうか。吾人も亦小日本魂を超越したる世界的大精神を贏ち得ねばならぬ。此の點に於て日鮮人は相一致し、相通ふことを得る。さて此の大精神に早く達した方が精神界の勝利者である。日本人は國家的名譽心や舊來の忠君や祖先崇拜などに執着する自尊がある。是等は貴重すべき德なれども、兎もすれば大發展の障碍となることがある。朝鮮人は斯かる誇を持たない。故に亦大發展の障害もない。併しながら彼等には亦彼等相應の妨碍がある、夫は一種の悲痛、一種の恨である、之を脫却しなければ大國民にはなれない。アイヌは善良なる民族である。併し此の恨を抱いて服しなかつた爲めに、遂に今日自滅に近づかんとしてゐる。亞米利加の土人は白人に對する恨を抑へ得ずして遂に亡びたのである。朝鮮人にして若し此の恨を以て日本に向ふ時は、到底浮ぶ瀬はない。幸に彼等は基督敎を有す、之を旨として之を傳布するは彼等

の救である。人は何時までも消極的態度を取るときは必ず亡ぶ、生命は積極的態度に存す。彼等が帝國教化の大任を負ふは最も光榮ある積極的態度である。吾人は朝鮮が日本帝國に於けるスコットランドたらんを欲する、斷じてアイルランドたらんを欲せず。愛國はその教權を大英帝國以外に有する。是れその永久の災害である。蘇國は然らず、その教權は蘇國人之を有する。吾人は鮮人がその教權の所在が彼等自身の手にあるを自覺せんことを欲してやまない。吾人は朝鮮人がこの尊嚴なる資格と意識とを發揮する上に於て朝鮮の將來を祝する。朝鮮人の責任は重且大なるものではなからうか。半島のクリスチャンはその民族をしてその大使命を自覺せしめ遂行せしむる責任がある。吾人は半島の牧師が此使命を自覺して傳道しつゝあるを信ぜんと欲する。

後編

基督敎の發展

過去五十年間に於て宣傳せられたる基督敎を以て、その內容の凡てを盡したるものと思惟するは大早計である。元龜天正時代の基督敎とは同じ名稱なるにも關らず、その實質を異にして居ることは、恰も同名異性かと思はるゝ程である。歐洲諸國を通過した人には、直にその異同を見聞することが出來る。天主敎の最も行はるゝ地方には堂々たる伽藍多けれども、その割合に殖産工業の設備は出來て居らない。貧民多くして敎育の乏しき事は亦著しき事實である。新敎の最も行はるゝ地方は堂々たる大伽藍に乏しけれども、學校と工業とは割合によく發達して、國家的事業の盛大なる事は、何人の眼にもよく映ずる所である。此の如く異なりたる社會の事情を作り出したのが、宗敎の根本思想に起因することは、亦少くないのであらう。前者は絕對の敎權を一個の法王におき、絕對の服從を要求するが故に、人民は獨立自主の氣慨に乏しく、別言すれば精神上の封建政治に壓倒せらるゝ。

之に反して新教は絶對の教權を聖書におき、解釋の自由を一個人に與ふるが故に、人民は獨立自由の氣象を發揮するの餘地がある。

過去五十年間日本に宣傳せられた基督教は、新教の外にグリシャ正教がある。之れは露國の宣教師によつて紹介せられたるものにて、形式に於ては天主教を去ること遠くない、しかも吾人の注意を促したるはこの耶蘇正教にあらずして、新教である。新教は絶對の教權を聖書におきたれども、一旦個人の自由解釋を許可したる以上は、新教の所謂服從は天主教のそれと大にその性質を異にして、斷じて所謂盲從なるものではない。各自の理性に照らして從順なるが故に、彼れと此れとの差別は地動説と地不動説とのそれと同じことである。然れとも新教の從順には自家撞着の要素を含有する。いまその自由解釋の内容を解剖して見れば、その所謂教權は宛然聖書にあるが如くにして、その實は個人の理性に存して居る。聖書は宗教上に於ける無二の好材料には相違なけれども、事の是非、理の當否を判斷するは我が理性に存するのである。故に深く診査し來れば、教權は聖書に存せずして、我理性に存するのである。尋常の信仰によれば、理性は聖書の教權にまで吾

人を指導するの案内者とせらる。既に聖書に到達すれば、吾人は之を辭し去りて、絕對的に聖書の敎權に服從すべきものとなす。然りと雖もしか服從することは服從して見れども、理性は長くこゝに安堵するを得ない、必ず聖書そのものを批判せんとするのである。故に聖書の凡ては長く敎權の位地を保有し能はぬ。吾人は容易くこゝに永遠不動の基礎を見出し得ぬ。新敎が種々樣々の派別を生じたのは、各自その解釋を重んずることの切實なるより起りたるものであつて、その名義を聖書にかりたるものである。聖書の內容にも異分子を含有しては居るが、各自亦解釋を異にするを以て分派を生じたのである。詮じ來れば新敎の敎義には聖書の敎權を倒破すべき偉大の權威か含まれて居る。故に信仰上の實驗と思想との發達したる現代に至つては、敎權の所在が我が心內に存することを見出さねばならぬやうになつた。この宗敎は最も高尙なるものであつて、議論としてはこゝに歸着する外ないのであるが、知識と道德との圓滿なる發達に待つ所あらざればゞ、兎角我儘勝手になつて、亦救ひ難い苦境に陷るの已むべからざるものがある。故に常人をしてこの自覺を取らせ、この安堵を得させやうとするには、知識上信仰

上甚大なる訓練を經驗せしめねばならない。過去五十年間の基督教は二ヶの教權を混同したる基督教なりしが故に、一時は大なる安心立命をその信徒に與へたるやうなれども、結局一大疑惑の種子を蒔いたものといつてもよかろう。故に忽ちにして勃興し、復忽ちにして動搖し、その傳播の如きも當初の氣勢を永續することを得なかつた。然らば明治の基督教は元龜天正の覆轍を蹈んで、復起つべからざるのであらうか。吾人を以て見れば基督教は多大の希望を以て將來を迎ふべき生命を有して居る。若し夫れ天主教を以て日本に傳はりたる第一期の基督教とすれば、過去五十年間に傳へられたる基督教を以て第二期に屬するものといはねばならぬ。第一期の基督教はその教權を羅馬法王の一身において居る。第二期の基督教はその教權を聖書におくといつて、實は自己の理性に十二分の根據を有して居る。是れ當初には自覺し得なかつたのであるが、次第々々に自覺し來つて、第三期の基督教を發見し來つたのである。是れ今後我が日本に於て新なる面目を施すべき基督教ではあるまいか。元來第二期の基督教は第三期の基督教を生み出すべき要素を有して居つたのである。新教徒は常に主張して居る。適當

なる聖書の解釋を得やうと思ふならば、宜しく聖靈に滿たされねばならない、聖書は本來聖靈の感化を受けて書かれたものなれば、之を讀むものも聖靈の感化を受けねばならないと。是れは至當の主張といふべきである。さて聖靈とは何をいふのであるか。こゝには極めて深い神秘の意義を有すれども、詮し來れば、我が內界の最も聖善なる能力であることは明白である。この聖靈と吾人の理性とは本來同一なるものであるか、將全く相違するのであるかと、穿鑿し來れば、廣い意味にていへば、聖靈も亦理性の一大部分であるは疑いないのである。理性とは單に形而下の事物を知る智能ばかりをいふのではあるまい。智能とても中々廣い作用を有するのであつて、神を識るの智能の如きもあり、至善を認め得る智能もあれば、道義的又宗敎的の知識も同しく智能の作用に屬するのである。吾人が靈聖といふは强ちに熱誠のみを意味するのではない、最も深遠なる智能をも含有するが故に、この聖靈は或る意味にていへば、クリスチャン理性と名けてもよかろう、第三期に屬する基督敎の敎權は正しくこの神聖なる智能に存するのではあるまいか。

然れとも之れあるが故に聖書をも基督をもなみする理由はない、之れあるが故

に寧ろ聖書をも基督をも尊敬するのである。基督彼れ自身も舊約聖書を重んじ、物に當り事に處するの光明となした。一面より見れば基督が聖書以上の人である は人も疑はない所、然れども彼にして猶聖書を重大視したるは後人の學ぶべき所である。孔子の如きも述べて作らず、信んじて古を好むといつて居る。彼れが有識の弟子は生民あつてより以來、未だ孔子の如く盛なる聖人はなかつたと斷言して居る。しかも彼は絶大の才能を有しながら、猶古人の跡をたづねて、やまなかつたのである。聖書はキリストの言行を有するが故に尊い。しかも吾人は獨り聖書のみを重要視するのではない、凡て人類界にあらはれたる東西古今の思想及事跡は同しく理性の作用なるが故に、吾人の理性とよく對照して研磨すべきである。しかして又吾人の理性を明かにする光明は、獨り之を人類の歴史に求むるのみならず、又この無限の宇宙に求むべきである。宇宙は歴史ほど吾人に對し直接なる關係を有し居らざれども、之れも亦道理の化體したるものといつてよかろう。宇宙の事實に基き、その理法を明にし、又その理法に基きて組織せられたる科學の如きは、如何ばかり人間の知能を研磨するものなるや分からない。又宇宙は

獨り吾人の知能と對照するのみならず、吾人の情意の對照ともなるべき性格を有して居る。宇宙に心酔するものは强ちにその理法にのみ熱中する科學者にあらず、寧ろその美的精靈を呼吸する詩人ではあるまいか。

是を以て第三期の基督敎は自己の最も深奥なる靈性にその信仰の敎權を見出し、同時に人類の歴史と宇宙とを以て同し靈性の化身となす。故に第三期の基督敎は宇宙を以て一種の巧妙なる機械となさず、活ける神の靈殿なりと信ずるが故に、毫も科學と衝突せんとする傾向を有しない。又人類發展の理法を超越して顯現すべき幻影の天國を想像するにあらずして、反つて徐々と發展し來る理性の實現として、その建設に於て參與すべき使命あるを自覺するが故に、この基督敎は從來のそれとは頗る性格を異にして居る。此の如き世界觀を有する基督敎が今後の日本に發展すべき使命ありとは、吾人の信じて疑ざる所である。故に過去五十年間に傳へられたる基督敎を以て基督敎凡てと思惟するは、未だ基督敎が永遠の生命たるを知らないものといはねばならぬ。第三期の基督敎が將來に向つて復如何なる形式を備へて發展し來るかは、吾人が最も注意して見んと欲する所であ

る。吾人はユニテリヤン、普及福音、同仁教派の如きが、教會として傳播力を有せざりしを慨歎する。然れどもその傳播の機會を得ざりしは、その教權の所在を見過りたる結果にあらずして、外に仔細の存することと思ふ。吾人は第三期の基督教が第二期のそれに反動して勃興し來るにあらずして、反てその內容の有力なる生命として發生し來るを豫期するのである。第二期の基督教は既に第一期の基督教より發生し來つた。その如く第三期の基督教が第二期の基督教より發生せんとの吾人の豫望は、蓋し亦進化の理法に基くものと信ずる。一二の失敗を以てその發生の運命を失ふ筈のものではない。吾人は日本に於ける基督教の將來に對し、その生命の內容に想到するとき、復多大の希望を有せざるを得ない。

自力主義の基督教

予は嘗て天主教は自力主義にして、プロテスタント教は他力主義なりと思惟したることがあつた。今にして之を想へば、全く眞相を看過りたるを恥ぢるのである。信仰發展の順序より論じても、天主教は舊教にして、プロテスタント教は新教

... CHURCH
C. E. LIBRARY
936 WALL ST., L. A.
BOOK No. 128

だから、後者が前者よりも進步して居るべきは、自然の趨勢に鑑みても明らかである。然るを天主教は行を旨とし、プロテスタント教は信を旨とするといふ一事に惑はされて、その眞相を看破すること能はなかつたのは不明の至であつた。天主教とプロテスタント教との關係はパリサイ主義と基督主義との相違の如く、又はヤコブ教と保羅教との相違の如しであつた、斷じて佛教の聖道門と淨土門との相違の如きものではない。

吾人を以て見れば、天主教は他力主義にして、プロテスタント教は自力主義である。若し夫れ之を顚倒して、プロテスタント教が他力主義にして、天主教が自力主義ならば、前者は後者より墮落したものであつて、斷じて進步したるもの、上達したるものとはいはれない。歐洲思想史を顚倒したものといはねばならぬ。人文の進步此の如く著明なるに、何ぞ獨り宗教思想のみ退步墮落するの理があらう。試に一個人の生長を見るに、始は純他力なるが、月を追ひ年を重ぬるに從ひ、その他力の要素を減じて、自力を旨とするに至り、終に純自力となる。國民の發展も亦此の如し、初代は君主專制の下に生育したるものが、人文開け政道に通ずると偕に、國民

は自主自由の性格を發揮し、各自の權利義務を自覺するのである。若し夫れ宗敎が發展の行程を取るものならば、他方より變轉して自力となるは、自然の趨勢たらずんばあらず、然れども之れは事物の進化發展の順序より概觀したるものにて、未だ事の眞相に就きて論じたものにあらざれば、直に新敎を以て舊敎より進化したるものと論斷する譯には行かぬ。

抑も天主敎の主張する所を論ずれば、則ち法王萬能主義である、敎會萬能主義である、繼承主義である、服從主義である。個人は自ら救を完成すべき權能を有して居らぬ、唯絕對的に敎會の敎權に服從するの一事あるのみ。既に服從を旨とするものは、そが敎會の一員たるの故を以て、敎會の恩惠にあづかり、疑ひなく救はるゝのである。敎會は救助船である、既に之に乘りたるものは安全である、救助船には船將もあり、機關師もあり、運轉師もあり、夫れ〳〵萬般の機關備つて一も缺くることない、乘客をして安全に彼岸に達せしむるを得る。乘客は起居動作船將の命令に服し、船則を守れば、何も苦慮する所なく、又自己の力を要せず、安心して彼岸に達することを得る。その心理狀態は猶兒童が大家の一族にして、父母に信頼し、娘母

に養育せらるゝが如し。易道安樂の他力敎にあらずして何んであらう。彼の難行苦行の如きも、嚴格なる家風の兒童がその訓錬を受くるに外ならず、之を要するに、兒童は服從するの一事あるのみ。賞罰は眼前にあり、免れんと欲するも免るべからず、服從そのものも賞罰に制せらる、賞罰は覿面に來る、しかも死後に天堂あり、地獄あり、煉獄あり、樂土がある。故に難行苦行も自發の修養にあらずして、誡律の要求である。賞罰は儼然として之に伴うて來る。所謂從順、忍耐、貧苦、慈善の德行は各自の心内より自發したるものにあらずして、外よりの權威を以て訓錬し陶冶したるものである。換言すれば他力ならざるはない。

之に反してプロテスタント敎は自己の實驗に十二分の重きを置くものである。信仰に由つて義とせらるゝといふは、各自の心内に存するものをいふのである、信條や聖書をいふのではない。然れどもプロテスタント敎徒にして未だ天主敎の幼稚なる境涯を脫せざるもの甚だ多い。その古人の信條を重ずるは則ち各自の實驗に照合するものあるが故なるを自覺せず、偏に古人の信條を繼承するは、是れ即ち天主敎の他力主義である、プロテスタント敎の自力主義ではない。聖書の如き

も絶對的に服從すべきものにあらずして、各自の實驗に照合するもののあるが故に、その權威を有するのである。ナザレの耶蘇も各自の內的實驗を輕視して居ない。プロテスタント敎徒には外より我れを壓服する誡律はない。彼の神の命令といふものも、一面より見れば、各自の良心に外ならない。神の命令は則ち我れの道である。又神とても我れを離れての神にあらず、我靈性そのものに存する所の靈能である。天父の恩愛は卽ち我れの感情に存する、則ち我が心內に存する聖靈の啓示する所である。この愛なる靈能の意志を自覺し自信するは、則ち義人の生命となるべき所の信仰である。

此に由て之を觀れば、プロテスタント敎は信仰の基礎を自己の心內に自覺し、自己を救ふ權威も自己の心內に存するを自覺し、又自己の心內に神を見出し、自己の心內に無限の靈能の存するを信ずるのである。この靈能は固より我れ以上のものなれども、全然我れ以外のものではない。自己が恩愛の天父と親和したる曉には、神の聖旨は則ち我れ自身の法則にして、之に違反するは、取も直さず自家撞着である。この法則は我が悅樂する所にして、我を威壓する所の誡律ではない。此の

如き自主自由の生命は則ち信仰に由れる義人の生命である。此の如くなれば、何ものか自力ならざらんや。我を救ふものは法王にあらず、教會にあらず、信條の繼承にあらず、絕對の服從にあらず、恩愛の靈能に根ざす自力である。是れプロテスタント教の本義である。是れ基督教の眞髓である。この自力の精神は既に天主教の訓錬の下に生育しつゝあつた、唯機の熟するを待ちて勃發し、プロテスタント主義となりたるは、恰も雛の孵化するが如しである。故にプロテスタント教は新教の名稱を冐すに恥ぢない。プロテスタント教は正しく天主教より進化し來つて、靈界の新天地を開いたるものといつてよい。今日も猶天主教會にはプロテスタント教を胚胎しつゝある、天主教會より破門されて出て來るか、はた天主教會そのものを改革するか、容易く論斷すべからずと雖も、この生命が天主教のうちに存在するは疑ふべからず。又プロテスタント教の名稱を有するものと雖も、依然として天主教の境涯を脫することと能はず、信條や聖書の敎權に信賴し、其所謂基督なるものも信條の基督にして、活ける基督にあらず、基督教を信ずるは恰も救助船に乘るが如く思惟するものもある。此の如きクリスチャンはプロテスタントの名

基督敎を信ずるに由つて、よしや神の赤子とはなり居らんも、是等は未だ他力主義を免れざるものにて、一人前の神の子即ち自力主義の境涯に達せざるのである。他力主義は一轉して自方主義たらざるべからず、是れが生長發展の行程である。

ルーテルの天主敎に於けるは、猶保羅のユダヤ基督敎に於けるが如くである。ユダヤ基督敎徒は專らモーセの律例を重んじ、その言行を愼みて、欠點なからんを期す。その行爲を重要視するはパリサイ派をして三舍を避けしめた程であつた。その信仰の狀態はさながら自力主義の如しと雖も、深くその眞相を看破すれば、是れ亦他力主義に外ならないのである。何んとならばユダヤ派の主張する所は聖書に存する律法の遵奉にあるのである。この律法は古代より傳へ來り受け繼ぎたる誡律にして、外より我を壓服する權威に外ならぬ。又その尊信する神明も超自然の神にして、我れ自身とは全く別々の存在を有するが故に、全く我れの以外に存するものである。故に我を救ふものは我れ自からの中に存するにあらずして、我以外の實在者である。此に由つて之を觀れば、我れを救ふ律法も神も悉皆他力

ならざるはない。之に反して、保羅が律法の行に對して信仰を高調したるは、則ち自己內心の力を自覺したるものである。彼れの所謂信仰は自己心內の實驗を信ずるものである。その所謂基督なるものも自己內心に認識したるものである。故に最早我れ生くるにあらず、基督我內にあつて生くといつて居る。彼は患難にも喜悅する靈能を自覺した、蓋し聖靈に由つて神の愛その心にそゝげばなりといつて居る。彼は新らしき靈を實驗し、我儕が受けたる靈は恐懼する奴隷の靈にあらず、神をアバ父と叫ぶ子たるものゝ靈なりといつた。彼れの聖靈は言ふべからざる悲歎を以て祈るものである。然らば則ち保羅は外界の權威より轉進して、內界の靈能を自覺したといつてよからう。故に凡そ外界に存するものは、その律法たると神殿たると祭式たると誓言たるとを問はず、一切我を救ふの能力なきものとなし、唯我を救ふ力は自己の心內に存する神の靈能を信ずるのみにありと主張した。既に我衷情に神を愛するの動機あり、憧憬あり、又神の聖旨を悅樂する基督の靈あり、一として我れより發せざるものなしとすれば、救ひの靈能は自力ならざるはない。我れの祈願は神の命令と合する、神そのものが我衷情にいますが故に、

我れこそ活ける神の聖殿なれとは保羅の自覺である。然らば則ち何ものか神の靈能の中に存在する自己の力に基かざるものがあらう。既に外界の束縛なく、唯自己の靈能の欲するまゝに活動する、是れが自主自由にあらずして何んであらう。保羅の衷心に實驗する神の恩愛は彼が靈能の本源である、永久に枯るゝことなき水源である。彼れが自力の本源は、永遠の神の中に存する、之れをしも偉大ならずといふことができやうか。

吾人は保羅を以て最も能く基督の本意を得たるものと思ふ。基督のパリサイ派と全くその主義を異にしたるは、則ちその自力主義の福音を高調したるに由る。彼は誡律を論せず、直に人心に訴へて天國あるを自覺せしめた。彼は律法を議するに際して、人心の動機を指して、義人の性格を證明した。彼れ遂に誡律なきの境涯を啓發し來つて、誡律主義の無能力なるを明にした、換言すれば彼は純良なる小兒の赤誠に天國の實現を見出した。彼れ神の靈能を各自の衷心に自覺せしめたるが故に、稅吏も奮起し、罪人も興起するを得、終に他力主義のパリサイ人を凌駕したのである。彼のガリラヤ湖の漁夫が世界敎化の偉業を任じて起ちたるは、則ち

自己の衷心に偉大なる靈能を自覺するに基因したのである。しかしてナザレの耶蘇は自力主義の最も偉大なるチャンピオンであつた。彼れの如き純自力主義の宗教を有したるは、吾人未だ之を聞かない、彼れの宗教的意識は基督教の眞髓である。

現代のプロテスタント教は依然として天主教の他力主義を繼承して、未だ脫然として之を放擲し能はずして居る。是れその大に振起すべくして、尙振起し能はざる所以であらう。日本のプロテスタント教徒は宜しくその本來の自力主義を高調すべきである。若し夫れ之を高調するに於て躊躇する所なからんか。基督教の眞面目は躍如として顯はれ、赫々として我民族の迷夢を覺醒するに至らん。吾人の期待する所は論辯にあらず、學究にあらず、深刻なる又眞實なる實驗である。こゝに偉大なる自力主義の本源が存するのである。

基督教の二大根據

近世の科學的硏究によりて宗教の立脚地が愈薄弱となり、終にはその根據の全

滅を免れざるに至るべきかと、杞憂したる時代は既に過ぎ去つた。基督教はこの科學的研究により、その長く襲ひ來りたる弊習を脱却し、其本來の眞面目を發揮する機會を得た。所謂現代の健全思想とは基督教の眞面目そのものをいふのではなからうか。然るをこの現代思想と基督教とが衝突するかの如く觀察するは、眞に驚くべく又悲しむべき謬見ではなからうか。基督教そのもの丶中に二派の思潮あるを知らずや。この二派は互に相衝突し相競爭して、宗教改革以來の混戰奮闘をなしつゝある。或は自由基督教といひ、或は進歩主義といひ、或は異端派といひ、或は唯理派といふ名稱の如きは、僅に基督教の發展しつゝある一方面を説明するものに外ならぬ。基督教の眞面目は是等の名稱を以て説明し得るものではない。基督教は破天荒の偉業を始め、その眞面目を發揮するに當り、恰も基督教そのものを破壞し去らんかと憂慮せらるゝ程、豐富にして勇健なる内容を發揮しつゝある、識者と雖も往々茫然自失せんとするのである、蓋しその内容は餘りに剛健にして、從來のものと正反對の性質を示すが故である。

抑も此驚くべき内容は實に二方面より發揮せられつゝある、一は内的方面、一は外

的方面である。内的方面とは基督教徒の最も深遠なる實驗をいふのである。而して、外的方面とは精確なる科學的研究に外ならぬ。吾々はこゝにこの深遠なる内的實驗を詳細に論ずることはできない、唯その一二に付き實驗の性質を論じて見やう。敬虔なる人の心奥には無上の價値ある靈能を自覺する。この靈能は宇宙の神明にあこがるゝ猛烈なる熱情である。しかしてその接觸する神明は眞と善と美との靈能なるが故に、之れにあこがるゝ猛烈なる熱情は其れ自身が眞と善と美との靈能たらずんばあらず、彼の自然主義の如きは一種の熱烈なるものを認むれども、そは常なき肉慾に外ならぬ。故にその熱烈なるも暫時にして、所謂刹那主義とならざるを得ぬ。その根ざす所の肉そのものが無常なるが故に、その慾情も亦永遠なるを得ざるは論を待たぬ。其淺薄なるは言ひあげて論ずるまでもないのである。クリスチャンの實驗する靈能の内觀は愈深く入れば入る丈け、その淵源の無限にして到達すべからざるを知るのみ、斷じて肉情の如き飽き足るべきものでない。實に永久に飽かず、永久に足ることを知らざるものである。無窮の神明は之を求むる者をして愈あこがれしめ、その靈の水を飲む者をして益渇かし

むる、この熱烈なる至誠ほど確實にして現實的ならざるはない。この至誠は世の所謂忠孝なるものよりも深遠にして濶大なるものである。亦何ものか之を抑壓することを得んや。其憧憬する所は眞善美なるが故に、盲目の情念とは全然その性格を異にして居る。何の權威か之を壓するを得んや。理性の權威か、あらず、理性そのものなるが故である。眞善美の神の聖旨を實行し體得せんと欲するは、即ちこの猛烈なる靈能の祈禱である。何の權威かこの靈能の祈禱に勝るものがあらう。こゝに個人の限りなき價値は存するのである。この個人の價値はクリスチャンの眞面目にして、現代に至つて始めて著しく實現し來りたるものである。彼の個人主義を喋々する人々が、この靈能の眞面目を發揮し來らざる限りは、未だ個人の何たるを知らないものといはねばならぬ。從つてその所謂個人は極めて淺薄なるものであつて、世間にありふれたる個人である、塵埃の如く多い人草である、アダムの子である、罪の人である、靈の饉を有せざる餓鬼である。

苟も眞と善と美とにあこがるゝ靈能は、社會の倫理道德を超越すると同時に、亦之れが豐富なる内容と有力なる元氣とを以て社會に實現し來らざるを得ぬ。萬

有の神にあこがるゝ個人は一刻も萬有より分離して生活するものでない、その所謂個々の個人にあらざるは知るべきである。忠孝の如きは神の懐に生くる人の精神によりて始めてその形式的外見を去り、その本來の眞實を顯はすのであらう。この內容に於て豐富にして、しかも力ある個人の價値こそは現代の賞揚すべきものではあるまいか。

この個人には生々の靈氣がある、この靈氣は神の靈と感應して力より力に到り、神を體得せずんば已まざるのである。この靈氣は外部より壓迫する陋習や罪惡を排斥し、自己の眞面目を實現するものである。神に由て生れたるものは罪を犯さず、犯すこと能はずとあるは、則ち復活の人の深遠なる實驗をいふのである。しかしてこの靈能は永遠の神を天父として親しみ、その無限の愛を信ずる。この深遠なる神人父子の自覺には、所謂贖罪說の如き觀想を許さゞるのである。神に在る義人の靈能は無形有形を問はず、之を包圍する外物を征服して、自己の使用となしつゝある、萬有の神には奮闘なく、又不調和なし。萬有は彼れよりいで、彼に依り、復彼に歸るのである、獨り人に至つては自から萬有を征服して、之を統治せんと奮

鬪する、この內外に對する奮鬪は最も勇健なるものにして、又最も快活なる自力主義の生涯である。佛敎も、中古基督敎もこの快活なる生涯を知らなかつた。之れ獨り現代クリスチャンの發揮し來りたるものにして、吾々は之をナザレのキリストの生涯に見るを得。保羅の如きは之を得んと欲して、尙奮鬪の戰場に立て居つた。この靈肉一致の生涯は極めて深刻なる靈の勝利を意味するのである。唯物主義の如き凡神主義の如きが全うし得べき境涯ではない、基督敎の倫理的奮鬪を通過して、始めて達することを得る。神の中に活動してその靈氣を呼吸する眞面目の新人は、自から奮鬪して神の如く全くならんと希望するものである。是れ現代の思想を代表するものにあらずして何んであらう。

この有力なる個人の價値を自覺する基督敎徒は、その尊き自己をその尊崇する耶蘇キリストの人格に見出すのである。眞の基督敎徒は神の子である、自主自由を自覺する靈の人である、神我に在り、我れ神に在りと自覺する神人一體の境涯を有する。この深奥なる實驗は則ち復活の人の最も貴重する祝福である。爾は我が悅樂する所のものなりとの言は、救はれたる人の最も淸らかなる良心に聽く所

である。この最高なる實驗は中古時代の言語を以て言ひ表はすことを得ない。然れども溯りてナザレの耶蘇の實驗に之を質さんか、吾々は最も適當なる言葉を見出すことを得る。この新に贏ち得たる實驗は新に生るゝ神の子たる意識の眞面目にして、外より因襲するものではない。何となれば從來の信條を以ては之を發表するを得ない、從來の讃美歌にては充分に之を歌はれない、又從來の儀式にては之を形容するを得ない。果して過去の形式を以て言ひ表はすべからずとせんか、その實驗の因襲的ならざるは知るべきのみ。故に基督敎徒の新なる實驗は外より來りたるにあらず、心の最も深き實驗に起因するは疑ふべからず。苟も人の心奥の猛烈なる感動を疑はざる以上は、彼等の宗敎的情念は無限の價値ありといはねばならぬ。

吾人は基督敎徒の內的實驗の方面を論じたのであるが、人類史に應用する科學的研究は實に基督敎徒の信仰を堅固にする者となつた。この科學的研究は基督敎の起源をナザレの耶蘇其れ自身に見出し、耶蘇の宗敎と耶蘇を神として立てたる宗敎との區別を明にするを得た。耶蘇を神として實驗し來れる基督敎は固よ

り基督教の主義を有するに相違なしと雖も、耶蘇の宗教其もの丶如く純粋にして深遠なることは望まれない。史的研究は用捨なくその科學的斧鉞を新約聖書に加へたるが、現代基督教の最も高明なるものが耶蘇の宗教的人格そのものにあるを見出した。しかして保羅以來の基督教はこの耶蘇の宗教に到達せんとして、遠く迂回しつゝあつたものである。この宗教は本來の基督教なるが故に、終には實現し來るべきものである。こゝに神人父子の親あり、勇壮快活なる奮闘あり、靈肉の調和あり、個人の眞價あり、神の國あり、一として現代的ならざるはない。固より耶蘇の思想には現代的ならざるものもある、然りと雖も是れ別に怪むべきことにあらず、眞理は赤裸々にして啓示するものにあらず、必ずや何等かの衣服を纒うて居るものである。之をその中に包まるゝ眞理より辨別するは、史的研究に待つ所多しとする。抑も科學的研究は史上に顯はれたる眞理を確定するものにて、偶以て基督教に顯はれたる宗教的眞理を保證する。若し吾々の内的實驗が唯それのみにして、更に史上に實現し居らざるものならんか、或はそが空想迷妄なるやも知るべからず、然れどもそが史上の事實と一致せんか、吾々は吾人が内的實驗の眞實

なるを認定せずんばあらず。現代基督教徒の内的方面に實驗せらるゝものは、正しく基督彼れ自身の意識に存するものにして、一千九百年間様々の形式を取りて實現せんとしたるものである。故に吾人の胸奥に存するものは獨り宗教の眞理として、價値あるのみならず、基督教の眞髓として、又現代思潮の先導として、吾人は之を尊重するのである。日本の基督教徒にしてこの現代的基督教を意識する者は果して幾人あるだらうか。吾人はその益多からんことを望む。しかして之を主張する者は現代思潮の鼓吹者たるを自覺せねばならぬ。是れ正しく日本帝國の宗教たるべき資格あるものではなからうか。

靈界の飢饉

日本現代の精神界に於ては實に不思議なる現象が現はれて居る。此の不思議なる現象とは抑々何ものであるか。事は少し過去に屬するが、彼の日露の戰爭は實に我が國千古未曾有の大戰であつた、啻に我が帝國に於ける大戰なるのみならず、實に世界的大戰爭であつた。而して我が日本は其戰に於て寔に勝利者の地位

を占めた。處が此の戰爭が終るか終らないかといふうちに、悲哀の聲は日本青年の社會に相呼應するに至つた。勝利の悲哀とは何である。之をして若し實業家に言はしめると、實に二十億の負債を背負つたことであらうか。是は我が國開闢以來の大負債である、誠に苦しいに違ひない。今若し父が子に莫大の負債を殘して逝つたとすると、其負債は法律上では、よしや如何になるとも、子は正に父の負債を背負はねばならぬ筈である。此の點から見て二十億の國債は日本の青年殊に學生青年、中に最も勝利者の地位に在る青年が此の大負債を自覺して立たなければならぬ。此處に一種の悲哀を感ずるのである乎。否左樣ではない。彼等は之を念頭にすらも置かぬ、唯だ政府の負債と考へて居る、自己自からの上に在るものと思うて居るか否かは疑はしい。然らば何を以て悲哀を感ずるか。多くの同胞が多く血を流して戰死した爲めである乎、或は不幸なる戰死者の遺族の爲めに悲しむのである乎。嘗て明治二十三年薩摩の宮の城で演說した折に、十八九から三十を少し越したといふ位な可憐の婦人が百人ばかり、ぞろ〳〵と集つて來たから、痛く奇異の感にうたれた。此の地方の士族は他縣人とは交際しない、又平民とは

結婚を爲ないのであつたが、彼の西南の役に十四歳を初めに多くの青年は戰死してしまつたので、其の對手たる女子は寡婦の生涯を送らねばならぬことに成つた。從つて百人ばかりの女子は憫然にも寡婦となつてしまつた。戰爭の結果として、爰に一種の悲哀が現はれて居るではなからうか。然し今日斯の如きことを歎ずる青年はあるまい。

滿州の野では日本人が勝つた。然し精神界に於ては恰も戰敗者の狀態を示して居る。干戈を振へば戰勝者である、而も精神界に至ると直ちに戰敗者に成る。殊に日本を代表すべき青年がトルストイやゴルキーやツルゲーフ等の虛無的思想に襲はれて、其の大多數は頭が上らぬ、日本の思想文學は露國の虛無的文學思想の爲めに征服せられてしまつた。さて之に對して如何なる日本の思想が露西亞の青年の心を支配したか、又如何なる大文學が之を風靡したか、恐く無い、一つもない。否却て露西亞のものが滔々乎として浸入し來つて、征服したのである。是は寔に考ふべき事である。昔羅馬帝國が勃興して國威四隣を壓し、隆々として揚り、駸々として張る時に方て、彼の賢人ケートーは自殺した。何が故に彼は自殺し

たのであるか、即ちギリシャを征服したる羅馬人の子弟は反對に輕躁浮華なる希臘文學に荼毒せられたが爲である。彼は之を慨歎して、希臘人は我儕を征服せりと言て憤死した。然るに我が日本に於ては果して如何。日本の有望なる青年共が露西亞の虛無思想に征服せられたるを憤慨して自殺したものであるか、吾人は未だ嘗て之を聞かない。日本人の高い清い精神が傷られたればとて苦しい歎聲を漏して自殺する程に、深く國を思ひ青年を慮る人が幾人有るか。吾人は未だ嘗て之を見ない。噫日本にケートー無き乎。彼の戰勝の悲哀を論ずるものはケートーの輩に非ずして不思議にも、トルストイの徒にあるは抑も何の譯であらうか。

日本人の精神は忠孝である。而して此の精神は決して一朝一夕にして出來たものではない、實に二千年來養ひ〳〵修め〳〵て來たもので、是は世界に誇るべきものである。故に若し此の精神を害する者あらば、吾々は最後迄で戰ふ可きであらう。處が今日の學生は此の精神の害せられつゝあるを割合に氣付かない樣である。如何に彼等の中に忠なる精神が其心を支配しつゝあるか、如何なる點まで忠孝と其精神行爲との關係が認められて居るか。素より封建時代の忠は其範圍

が狹い、僅かに其一藩主に限られて居つた。然し狹いだけ又其だけ深いものがあつた、强いものが存して居つた。一朝事有るに際し、君の馬前に討死するは、覺悟の前であつた、又責を負うた時は己が腹を搔裂いた、是が彼等の快事とした所である。母が其子を教育するにも、忠孝の精神を頭から吹き込んだ。今の婦人に比べると實に教育はなかつたのであるが、其子を忠孝の精神に育て上げる所は偉いものであつた。彼等は常に懷劍を以て其子を教育したゞけにや旣に十歲ならずして君の馬前に斃るべきことを覺悟せしめた。今日は已に時代も變り又事情も違ふて來たのであるが、日常天皇陛下に對して、此の精神を以て行動する人が幾人有る。落第は陛下に對して相濟まぬといつて勉强する學生が幾人あるか。又公人として此の精神によりて其事務を所理する人が幾人有る乎。又實業家にして此の精神を以て其事業を起し、且つ經營する人が幾人ある乎。若し此の精神に動さるゝならば、今日新聞紙上に表はれて來る如き多くの醜惡、實に唾すべき事件が起る筈は無い。斯く言つて來ると嘆息の外はない。併し一面に於て未だ意を强くするものがある、昔乍の淸い面影が未だ殘つて居る。夫は孝の精神である。此の高尙なる

精神は未だ生きたる事實だと思ふ。近い例だが、彼の米國の太平洋岸にゐる日本人の中で、其收入の全部を收得し、若しくは貯蓄する者よりも、却て其父母兄弟を偲うて其收入の三分の一或は三分の二をも割いて送る者が成功するのである。是は歐米人には解らぬ、寔に面白い現象である。處が近來は子は子、親は親といふ考が一般になる傾向がある。子は子で立ち、親は親で立つことになると、子は無責任に成つて孝道を忘れる、否却て反撥して來る。是は日本人が持つて生れた性向である。曾て或る新聞では彼の就職難の問題からして、子女の敎育は良い加減な所で止して措いて、努めて其老後の備をする方が良策といふ樣な說をした者もあつたが、斯くなると子が親に對して無責任になるは日本人の傾である。然るに爰に又彼の自然主義が這入て來て、一種の冷灰無味の說をなす。親が子を作るのは親の勝手であるから、子を育てるのは當然であると唱へる、すると共通だと感心する人が出る。玆に孝は最早不必要になる、況んや忠をやである。斯るデカダン思想や虛無思想が漸々跋扈して來る。さきつ頃或る新聞で危險なる洋書と題して多くの西洋書を列擧した、すると稍下火に成つてゐた是等の危險書物が俄かに賣れ

出したといふ事である。何處まで日本人の心は撚くれてゐるのであるか。或る者が親を捨てると主張すると、ヤレ大膽なる表白だといふて歡迎し、薄志の徒は忽ち附和雷同する。凡そ薄志弱行は思想の不健實不明瞭を表はすものである。爰に靈界の飢饉がある。つひ此頃汽車で利根川の大洪水の跡を過ぎたが、其慘狀は名狀す可らず、麥を蒔く事も出事ない始末であつた。人心の不安を叫ぶ、靈界の飢饉は更に之れよりも甚しい。當局者は狼狽し、警視廳は嚴戒するが、人心は益々不安となる。訓令を發する一方では陛下を煩はし奉つて勅令を奏請する。斯の如き現象の起るのは、確かに或る部分に於て忠孝の精神が全く失せてゐる證據である。火の無い所には決して煙は揚らぬ。斯る事情よりして或る人は思ひも寄らぬ大迷惑を受けることが尠くない、其の爲めに相當の人が行く先き不幸になやむことが甚だ多い。

日本の精神界は愈飢饉であるが、何處に此の飢饉は由來して居るか。抑誰が此責任を負ふ可であらう乎。斷じて之を現代の青年に歸すべからず。責任を負ふべき人は必ず他に在らねばならぬ、即ち文筆を以て又口舌を以て國民を指導する

堂々たる帝國の學者がその責めを負はねばならぬ。洪水が出づれば、淺慮の人は之を豪雨に歸するのであるが、併し雨には責任はないのである。責任を負ふ可き者は外にあらねばならぬ。水源地に於ける山林の濫伐は洪水の原因である。一度大雨が來れば、忽ち土砂を流すが故に、河床は益々高まり、而して高さ幾丈と云ふ可き程にもなる。山は愈禿げる、河床は益高まる、洪水なきを得ないのである。思想界に於ても亦是と同一の事情がある。今日日本に於る精神界の飢饉は遠く其源を西洋學研究の第一歩に於て根ざして居る。日本の學者は非基督敎的無神主義に熱中し、神を無みし宗敎を蔑にし、宗敎の代表せる尊い方面、健全なる方面を去て、唯其形骸のみを採つた。啻に宗敎を蔑視するのみならず、實に靈魂をも無するに至つた。彼の帝國大學の敎授初め、堂々たる學者諸先生が皆是に努めた、故に宗敎は蔑視せられて、無神無靈魂の時代となつた。中江篤介の如きは偶々此の思想を大膽に發表した迄である。又或る一面に於ては歐米の不健全なる思想が混入して、宗敎とは唯神秘界に入るを以て能と爲し、恍惚の境を憧憬し、眼の醒める活力を缺ぎ、實社會に盡す所以を知らない。又一面に於ては彼の個人主義が一個の强

い流をなして居る。個人の權威を振り翳し、神を信ぜず、靈能を認めず、單に放佚を主張するに過ぎぬ。或る種の個人主義者と自然主義者との主張する所は僅かに肉情の本能に止まる、之を出づることは出來ない、而して人間の靈的本能の存することには心付かぬ。彼等の主張する自己はイブセンの自己主張の如く深いものではない、又ニッチエの自己の如き強きものでもない、實に淺薄極まるものである。ニッチエが時の基督敎に反抗して立つた自己は大なるものである。吾々の主張と一致する點がある。彼が奴隷的宗敎に對して、極力反抗したる自主的强烈なる自我觀念は、實に畏敬すべき所がある、深大なる所が有る、根底がある、然し今日僅か慾情に克ち得ず、節操を守ること能はず、身を持すること恰も軟骨動物のそれの如く、暫らくも獨身生活を潔く爲し得ざる、寔に意氣地なき徒にして、而も自己を主張すとなし、ニッチエを說く。何たる身の程をも辨まへざる蒼白の徒ぞ。嗚呼日本の思想界は是をも容るゝ餘地が存するか、思想界の飢饉又實に大なるかな。ニッチエ、イブセン、トルストイの如きは皆基督敎の社會、健全なる感化の中に出た、故にニッチエ、イブセンが個人を主張する時にも、又トルストイが無抵抗主義を唱ふる時に

も、常に基督教を通して來て居るのである、基督教は常に其背景を爲して居る。併し日本には是がない。一度個人を主張すれば、已に業に父もない君もない、而して却て自己自らをも亡ぼすに至る。自己主張は個人其ものをも亡ぼす自滅の主張である。彼等は神を意識しない。故に絶對は彼等の觀念の中に存してゐない。彼等は神を信じない、故に彼等は絶對の意志を認むることが出來ぬ。彼等は神を慕はない、故に彼等には永久涸れざる愛の泉が無い。彼等は或る倫理學者の說く所を以て早合點して、直ちに良心を輕んずる。然らば彼等の依る所は何處に在るか。實に神の聲として吾々が聽くべき良心の權威に意を留めない、彼の儒教の愼獨と云ふが如きことは、彼等の終に解せざる所である。而して彼等に何等の權威が存するか、單なる一個人に權威の生ずるは何に由る乎。彼等には單に法律上の權利の外に何物もない、しかも此の法律上の權利すらも彼等の主張するが如くむば、何等の意味をも有せざる物と成つて仕舞ふ。まして良心の權威は毫末も認められない、今日の日本人は絶對なる文字に何を意味するか、絶對に是は爲ない、斷じて行はないと云ふ如き力は何處に求めるか、絶對否定を能く爲し得る者が果して幾人在

るか、又絶對肯定を能く爲し得る者が果して幾人ある乎。此の絶對否定絶對肯定を云ひ得るは、絶對の神を信ずる者の外は能はない。然りといふ彼等は何處までを然りといふのである乎、否といふ彼等は何處までも否と爲るのである乎。

良心は神の聲である。神は良心を通じて誠に明白に語り給ふ、爾は我心に適ふ我愛子なりとの自覺は此處から出る。何故に人は此の神の子の自覺、良心を殺すことをする乎、良心が亡ぶるは則ち自我の自滅である、良心を殺すは眞の自殺である。今日の多くの人は此の恐るべき地に墮ちつゝある。救濟の道は唯一である。良心の權威を絶對に置くのである、而して天地を支配する神を信じ、其許に歸るのである。惡人が榮え善人が不幸に陷るとも、神を信ずる所がなければならぬ、疑惑の中にも神を信ずる眞心がなければならぬ、基督の十字架を打ち仰いで之を信せなければならぬ。廣い世の中には善人にして堪へ得ざる不幸に陷ることがある、所謂天道是か非乎の歎聲なきを得ざる場合が有る、而も此の中に居て神を信ずる、是が眞の天地を貫徹する信仰である、良心の信仰である。如何なる時に於ても捷を得て餘りあらしむる所の力である。父去り母逝き人凡て己を棄つるも、善は常

に善である、正は常に正である、邪は常に邪である、良心の聲の存する限り、神の聲は變らぬ、順境に於ても逆境に在るとも、神の聲は變らぬ、吾々は之を信じて、其中に天地の絶大を見ることが出來る。是が基督の吾々に與ふる信念である。今日靈界の飢に際して、吾等日本人は速かに神に歸るべきである。然らざれば如何なる訓令を以てするも、到底駄目である。當局者自ら其誤れる所を覺り、自ら蒔いた惡しき種の惡しき成果の責任は自ら負はねばならぬ。青年を誤らせ、其良心を傷けたる罪は、實に懺悔して顧る所がなければならぬ。今日靈界の飢饉に於て豚の食する豆莢を食する我が同胞に對して吾人は、彼の放蕩息子が自ら省みてといふ一句の言に想ひ到らざるを得ない。人は父に歸りて始めて眞の滿足を得る。靈界の飢饉は絶大の神なきより悲慘なるはない。彼の自然主義の如きは則ち豚の豆莢である、彼の個人主義の如きも豚の豆莢である。人は皆、神の子たるを自覺せねばならぬ、靈の人たるを自覺せねばならぬ。人間本來の面目に歸へらねば、到底靈界の飢饉より免れ得ない。

現代に對する基督敎の使命

基督敎の中には昔から二個の大なる要素が有つて、基督信者の信仰を開拓して居る。多の人々はパウロの如く基督を仰いで救はれて居るが、其信仰の內容には非常に悲しむべき事と又非常に嬉しい事とが互に相對照して居る。各自の靈は穢れて如何にもきたなく而して、其の汚穢は自分一代で拵へたものでなく、抑人間の太初から遺傳し來り居るが故に、誠に如何とも爲す能はざる墮落の狀態であると否應なしにあきらめかなしんで居る。此の罪科に蔽はれたる苦しい落魄の有樣より救はれんとして、救主キリストを信じ、其罪惡を赦されて、茲に尊い慰藉を得るの道は開かるゝのである。此の慰藉に依りて大に力を得、益進んで神に接近する所の信仰の生活は、實に昔から殆と總ての信者の實驗する所であつて、容易く贏ちえたものではない。人は餘りに罪科に纒はれて居る爲めに、此の世界を捨てゝ、終に深山に隱れ、荒野に退き、修道院に遁れ去つた次第である。歐洲中世の時代は卽ち斯る退隱の時代であつて、淸き生涯と穢れたる生活、此の世と彼の世といふ樣

に明確と別け隔がしてあつた。そして今日吾々から見れば、殆んど考へられない程に恐ろしい所を通つて居たのである。例へば今日嫁入つた女が明日は其夫を棄てゝ、荒野に行く様な悲惨なことが行はれた。或は再び女子の顔を見ないと決心して修道院に入つて、出て來らぬ青年もあつた。或る物語に、遁れたる二人の子を一目なりとも見んとて、母は其の修道院を訪うた。併し最早決心せる二人の兄弟は母とても婦人の面は見るべからずとて、怎うしても母の乞を容れぬ。母は悄然として獨り門外に佇んだ、尚ほ二人の心は挫かれぬ。竟に其の母は泣き叫んでいふた、この乳房は曾て汝等に甘き育みの乳を與へ、この膝は汝等の嘗て戯れし所、この手は曾て汝等の首を擦りしものである。尋常の女子ならば、いざ知らず、汝等の母を見ないとは口惜しと、口説きて氣絶し、その儘歸らぬ人となつた。爰に彼等兄弟は初めて冷たき母の骸を運び、静かに其の遺骸を潔め、手厚く之を葬つたと傳へらる。實に何たる悲劇である。悲しむ母の心は裂けしも、是にも増して子の腸は剜られたであらう。一面から見れば斯る傷きにも堪へたる所は實に偉い所がある。斯の如く悲劇を敢て爲ねばならぬ程に、人の心は罪惡に纏はれて居る。斯く

せねば人の心は清まらぬものと考へて、修養に修養を加へ、難業苦業を積んだものである。實に名狀すべからざるものが有る。啻に歐洲中古の代のみならず、佛敎國にも是が行はれた。支那日本に於ても往々見られる。彼の西行法師の撰集抄や鴨長明の發心集などを讀めば、明かに見える。卽ち源平時代から鎌倉時代にかけての一般の風潮は是であつた。人生の無常を墓なみ、西方淨土の往生を冀ひ、輪廻の羈絆を逃れ、世を捨て出家唱名を事としたのである。彼は罪を感じ、是は無常を喞つた。噫悲慘なる人生と言はねばならぬ。

斯の如く如何にせば我が罪科を拂ひ、淸き幸福の生涯を送ることが出來るかとは、實にパウロ以來の人の苦き經驗である。「噫われ困苦人なる哉、この死の體より我を救はん者は誰ぞや」とは、豈啻にパウロのみの心ならん哉。オーガスチンもルーテルも玆に歎いた。又彼のウエスレーの祈にも實に腸を劈くものが有る。斯くて一轉し、基督の十字「架上の恩惠を信じて、罪惡を贖はれた所は實に一の捷徑である。單に肉を抑へて難業苦行を以てするも、神の子の生活は贏ち得られぬことを悟」り、唯十字架上の血潮によりて救はれ得ると見たのは、實に一新生面を開いて

來たと言はねばならぬ。凡て基督に縋つて行くとは、卽ち一大進步である。此處には慥かに現代の要求を滿足せしむる道を開いて來て居る。併し乍ら爰にも未だ到らぬ所がある。何となれば此の信仰上の經驗は尊いが、其說明の上に大に不滿足を感ずるに至つた。處が耶蘇の宗敎的生活を觀ると、亦之れとは餘程違ふ所が見える。彼は噫われ困苦人なる哉といふ苦痛を天に訴へて居らぬ。苦痛といふ苦痛は盡く嘗めた人であるが、斯る歎きの聲は吾人之を聞くをえない。そこに勇健なる宗敎心が宿つて居る。

この勇健なる宗敎心は果して吾々が贏ちうるものであらうか。若し吾人に斯の道だに有らば、人生は如何程幸福なる生涯であらう、然り現代人は之を求め居るのである。パウロ、オーゴスチン、ルーテルの通つた道を經ないで行ける道はないかと求めて居る。吾人も此の同じ道を通つた故に、其苦痛を思ひ、再び此の道を踏む人を見るに忍びない。故に爰に新なる道の解決を呈供しやうと思ふ。卽ち耶蘇其人の實驗である。この實驗は神のそれではない、人の實驗である。基督は矢張人である、地上に生れて、地上に育ち、吾等と同じく智慧と力と增し加はりつゝ成

長した人である。基督の實驗の奥に横はる大秘訣は現代に齎らすべきものである。現代の世界觀は一變して恰も基督の實驗其物を要求して居る。現代の精神界は將に此處に來て居る。基督の如く清い心を以て神を見たい、基督の如く子心を以て神を父と呼びたい。宇宙の恐ろしい力が世にも難有いものと成つて、之れと親しい交通をして見たいといふものである。「爾は我が愛子我が喜ぶ所の者なり」との聲が聞き度い。パウロも竟に此處まで來た故に、艱難にも喜ありといふたので、「身は羅馬の牢獄に在りて明日も解らぬ運命を控へ乍ら、ピリピ人に宛てたる手紙の中には、「主に在る喜悅を繰返して歌うて居る。是は彼の最後の書翰である。實に彼が死の歌である。現代人は直接に此處に到らんことを求めて居る。

我に來れよといふ基督の宗敎的實驗と其人格は、實に現代に對して最も尊き使命である。「神の國は近づけり、爾曹悔い改めて福音を信ぜよ」との言葉の中には大なる希望がある。然り人間の中には悔い改める丈けの清い尊い力、意志の力があると認めらるゝのである。又「爾の信仰爾を救へり、安全にして行け」とは基督の言である。人は如何に墮落してゐやうが、落魄してゐやうが、悔改と救との力を自分

の裡に有つて居る。增して立派なる家庭に人と成り、墮落の覺なき人に取りては、向上の進路は更らに易い。佛教でいふ彌陀の本願は何處までも他力依賴である。此處にも中々味ふべき眞味はあるが、一面には奴隷的な嫌がある。現代人の求むる所は此處ではない。外から壓する權威でなくして、自己內面の力の存在が神に向はしむる個性の價値が敎へて欲しいのである。現代の人は凡て自己に依りて立たんと欲する。されど未だ其道を得ない有樣である。此道が基督の衷に在る、自己の力に由りて萬世の主となる人格が宿つて居る。我を信せよとは、吾人の衷にも此の力が在るを信せとの意味である。悔い改めよとは、從來の心懸ではいかぬ、生れ變つて、此の力を自覺せよといふに外ならぬ。そしてこの生れ變る事は既に其力が吾々の裡に胚胎して居るの證據である。最少し深く蹈み込んで來つて、我と同情同感に成れよとの敎である。「人若し新たに生れずば、神の國に入ること能はず」とは、正に此の事である。甦生の力の我等の衷に已に業に胚胎せることを自覺せしむることが、基督の使命である。爾曹も我と共に天の父の子である、來つて我を見よとは彼れの言である。斯くて眞我を基督の人格に照らして觀るので

ある。神の子の自覺は人類の最大特權最大光榮である。吾々には父母あり、兄弟あり、朋友あり、妻子あり、國家あり。吾人は此の相愛し相愛せらるゝ社會人格を有する。吾人は此社會に生きて、更らに亦深く神に生くる。現代人はこの豐富なる神人の生活を求むる。

基督曰く「神は靈なれば拜する者もまた靈と眞とを以て之を拜すべし」と、此の點に於て日本人は未だ幼稚である。國民的見地を破りて世界的見解に入らねばならぬ。日本人には殊に是が必要である。彼の佛教の如き宇宙教すらも、日本に入りてよりは、地方的着色を帶び來つた。或る人は基督教が日本的に成らねばならぬと言ふ、甚だ淺墓なる考と謂はねばならぬ。基督教は到底日本的に成り了る程小さいものではない。基督教は既に民族的境域を超越して居る、斷じて日本的たらしめ得べきものではない、基督教は日本よりも大なる歷史を有し、更らに深く更らに遠き淵源を有して居る。固より形式上はその日本的となるべきは論を待たない。日本人の禮拜式は日本的たるを免かれぬ。併し事苟も眞面目なる宗教そのものに至つては、夫が日本的であると乃至は米國的であると英國的であるとい

ふべきものではない。基督教は確かに民族的性格を超越して、又之を包容する宇宙的のものを有して居る。國家的國民性が漸く發展する裏面に於て、絶えず神の國は建設せられつゝある。之を自覺せない國民は禍なるかな。此の如き國民は宇宙の靈海をその無限の源泉となして居らぬ。吾人は靈と眞とを以て神を拜する神の國卽ち倫理的世界を國民の裡面に造らねばならぬ。倫理の講義に非ず、倫理的社會の造營である。

誰か此の神の國を建つる、吾人は國法に壓せられざる超越の公道を踏まねばならぬ。我が同胞をして倫理界の臣民たるを自覺せしめねばならない。「神の國は爾曹の衷に在り」とは基督の直覺である。國家そのものゝ衷心に、之を發揮するは基督教の使命である。

神の國は個人を靈化し、家庭を靈化し、社會を靈化し、國家を靈化し、世界を靈化し宇宙を靈化する所の靈能である。神の國に於ては個人は神の子なり、自主なり、王者なり、尊者なり、一面政界を超越して、又一面政界の生命である。この生命なきときは則ち政界は俗界である、俗人の跋扈する所である、故に永久を保つことを得な

い。

神の自現

人類あつて以來、宗敎史の發展し行く跡を見るに、二つの大なる方面がある。一は人間の側より向上して神を仰ぎ慕ふて行く道程で、他は神の自ら己を人に顯はし給ふ狀態である。けれども神は初より完全に其姿を現はし給ふものでない。是は不可能のことである。何となれば人は神を有りの儘に知るには、餘りに智識なく、力ないからである。昔は完全なる默示が人類の初にあつたもので、時を追ふて漸々分らなくなり、横なまりになまつて消えうせたと考へた。これには部分々々に於ては多少眞理が無いでもないが、大體より論ずれば、前後して居る。初め神につける考は極めて淺薄で、間違が多かつた。今より見れば、殆んど迷信と思はる。それが時を經ると共に段々に迷信の雲霧はとれて、光明に進んで行く。これは大體の上から見て過つて居らない。二三歲の小兒には宗敎上の實驗を話しても分らない。その如く幼稚な時代には神が自を現はし給ふ事は不可能である。此一

面を哲學的に見たものがヨハネ傳である。彼は劈頭第一大初に道あり、道は神と偕にあり、道は即ち神なりと云ふ。このロゴス即ち道なる思想は、恰も人の心のどれだけ深いものやら實に捉へ所のない程分らない靈妙な作用に照らして、宇宙論を立てたものである。心の内容は思に現はれる。故に此思に依つて、心の如何なる者かが分る。然らば又其思は怎うして分るかと云ふと、思の更に發展して形となつた言葉に依るのである。心其物は分らない。けれども何處迄も暗いものではなくて、何時かは現はるゝものである。思となつて現はれ、考となつて現はれる。形もないものが、色々の形式を取る、即ち言葉となり、文字となる。其文字は形象にせよ、音韻にせよ、チャンと一の形式を取つて存する。或は石に刻まれ、木にほられ、若くは紙に印する。これは人間の心の發展し行く順序である。無形の心頭に千状萬態の思想の波が浮び來て、又其思想が色々の事を計畫する。例へば建築の事をいふならば、思想は一種の無形なる圖案となる。それが一轉して更に建築物となる。言ひ換ふれば建築物は思想の結晶體である。

神は不可知であると云ふことは、多くの學者が考へた。殊にアレキサンダーの

ブイローの如き有名な哲人は信仰の深いユダヤ人であつたが、直接に神そのものを明確に知り得るとは思はなかつた。けれども神は永久に暗い所に隱るゝ方ではない。神隱れして出て來ない者ではない。さらば最初現はれ來るべき神の容姿は何であるかと云へば、即ち無形の道理である。人が之を名つけてロゴス即ち理性又は言葉と云ふ。このロゴスには二つの意味がある、一は未發の言で、神の中に働き、他は既發の言として形に現はれる。故に道は其形なきに當つては、神の中にあり、形ある時に神より離れて居る。けれども水に浮べるうたかたの泡すら、其本なくして存するものでない。有形と云ひ、無形と云ふも等しく神より出づるもの、精粗の別はあるとも、結局神の自現である。

歷史の發展は、神の奧深い幕が一つ〳〵取れて、段々本體が現はれ來る狀態である。あるか、無きかと思はれた姿が、朧げながら社會の狀態を通じて顯はれて來る。かくして月を重ね、年を積んで神自身の眞體が我々に自現して來る。此點について考へて見れば、化身(インカネーション)と云ふは東洋の權化思想とは餘程差がある。佛敎などでは菩薩が下等動物の中にもあり、草木の中にもあつて、山川國土一切成佛すと云ふ。

神の自現が斯る姿を取つて來ると思ふのは間違つて居る。幾重にもある宇宙の皮を剝いで見れば、內にある奧深いものが發現する。草木夫れ自身、金石夫れ自身、は比較的に奧深いものではない。さて天地生々の氣が段々進んで來ると、宇宙の幕が開展すると同時に、その本體即ち神に近いものが出て來る。何が出るかと云ふと即ち人である。人は神の姿に似たもので、其上に向上して神に近づかんとして居る。故に歷史は人類が神の如くならんとする努力の跡と云ふ事が出來る。言ひ換ふれば、神の自現の歷史である。而して歷史上の最も光榮ある事實はロゴスが耶蘇となつて現はれた事である。キリストとはロゴスである、神の言葉である。耶蘇は一個人としてはナザレの村人に過ぎない。けれども此名も無き村の一子も圓滿にロゴスの性格を有する以上は、彼は即ち神の自現である。久遠の基督は彼れと一體なるが故に、耶蘇基督といふ。彼は常並の人にあらずして、キリスト其物であると云ふことである。これより先にも神の顯現と云ふ事は考へられなかつたのではない。けれども唯漠然と神は天地宇宙に現はれ給ふものであると云ふに過ぎなかつた。例へば旭が東の山の端を破つて出る、神々しい姿を見て

有り難いと手に手を打つて拜む。其處は淺い所であるけれども、活氣ある清い情はこれから養はれた。又秋の夜、澄み渡る月を仰ぎ見て、何とも云へぬ一種尊きものを觀じては、眞如の月と歌ふた。然るに近代になつて科學が盛になつた結果、宇宙の道理が明に認められて、葉末に宿る露の玉にも永遠の道理があると云ふ事になつた。幾千幾萬倍の顯微鏡で仔細に檢べると、今迄氣の付かなかつた所にも道理が宿つてをる。黴菌でも何でも道理以外に成立つものでない。全くロゴスの働であると云ふ事が分つて來た。或人々は科學を以て宗敎を破らんとする。けれどもそれは宗敎の眞髓を破るのでなくて、誤つた點を破るのである。英國に起つたアグノスチシズムの人々の成した所、殊にスペンサーの如きは一面破壞的であつたと共に、他には建設的であつた。彼等は絕對を以て不可知とした。けれども道理ないとしたのではない。否、寧ろ大なる道理の存する事を高調したのである。若し天地が無意味であると云ふならば、宗敎家に取つては闇より闇に入るのである。けれども何と云つても、天地は道理である、と云へばそれでよい。古の詩人が大空は神の榮光を顯はすと歌ふたのも、畢竟すれば神の現はるゝ姿を讚美し

たものである。併し神の自現はこれに止まらぬ。

宇宙には道理があると云ふ。けれどもそれだけでは聰明(インテリジエンス)になつて働くとは思はれぬ。然るに人となれば意識があつて、自覺、自明にして働く。人の世界に於ては道理は唯法則としてあるのではない、又自然力でもない、自我の如何なるものなるかを自覺して活動するのである。此處は科學と信仰との間に尙議論のある所なれども、斯る自覺の靈能が存在する事は實驗上爭ふ事が出來ない。學問でも天地の學問より人間に關するものゝ方が廣く深い。天地の事は機械的であるから、比較的分り易い。けれども自主自由に働く人の狀態に至つては、誠に端睨す可らざるものがある。聖書に、風は己が儘に吹くと云ふてあるが、人には風よりも微妙な働がある。内にあるかと思へば外にあり、外にあるかと思へば、内にある。彼處に行き、此處に行き、止る所を知らざる樣に思はれる。けれども盲目の働ではない、自ら一定の理法がある。これ心理學の科學として成立する所以である。この法則正しき心理作用は則ち萬人に通ずる所のロゴスの作用である。

天地の奧深き靈界より現はれ來るものは光明となり、道理となる。けれどもこ

れだけでは未だ盡さぬ所がある。人は物質界に生れて罪惡を有する。罪惡は普通云ふ害惡(Evil)とは違ふ、即ちSinである。外界よりして我を苦しめるものではない、我が意志を以て爲すものである。他より來る誘惑は之を防ぐ事が出來る。けれども中より發する罪惡の力は容易に防ぎ得べきものではない。故にゾロアスター敎の如きは天地に、善惡の二神があつて、絶えず戰つて居るといひ、世は暗黑と光明とが爭つて水火の勢をなして居ると見る。けれども結局は善神の勝利に歸するとした。其處は實に偉い、其見地に達するは容易の事ではない。斯の如き善惡二元の考は獨りゾロアスター敎に於て見る計りでなく、我が日本にもある。本居宣長をして云はしむれば、禍津日の神と直毘の神の二神である。今でも斯る善惡二神の考を有する人がある。何となれば、我々の實驗の中には善を欲して能はず、却つて願はざる罪のいや增すを覺ゆる強き事實がある。光明の出て來ると同時に、罪惡が出て來り、暗黑が現はるゝ。しかも若し光明が無いならば、暗黑の暗黑たるとは分らないのである。罪惡は厭ふ可きものであるが、一面から見れば、その自覺は亦價値なきにあらず。何んとなれば此自覺は最も深刻なる實驗を與るか

らである。又光明の力は暗黒の力に勝ち而して暗黒はその方便となるに外ならない。吾人はこの光明の力に神の自現を觀るを得る。基督は暗黒に對し勝利を奏したる人格なるが故に、最も光輝ある神の自現である。人間の理性が信用さるゝものならば、宇宙の間に人間程貴い者はない。而して人間が萬物の靈長として貴い所は即ち人格である。この人格を最も完全に現したのが基督である。此點に於て神は垂籠めたる八重の帳を開て、人に自からを示現し給ふたと云ふ事が出來る。さすれば我々はこの人格を通して、神の聖なる面影を拜することが出來る。

人格は冷めたい道理ではない、無意識ではない、神より漲り來る愛の示現である。父の外に子を知る者なく、子の外に父を知る者なしと云ふ間柄は、薄紙の隔さへない。神子の自覺を得たものより見れば、世に宗教的人格程高明なる神の示現はない。結晶した道理には生命がない。相愛し相知り、而して自斷する人格には生命がある、溫い血氣の脈絡がある。テーブルにも道理はある。ガラスにも道理はある。併し其處には溫い情味はない。溫い淸い情味は人の中にあつて、初めて見る事が出來る。冷めたい秋の月も美しい。けれども旭の輝く所にはも一つ貴いも

のがある。基督は月にあらずして、日である。其人類を思ふ至情は熱誠である。唯の誠ではない、愛の誠である。

神を活動と云ふもよい。けれどもそれだけでは未だ足らない。何ぞや、神は熱誠の人格である。さらば其熱誠は如何にして働くか。史上には一種の苦痛となつて働いて居る、無限の愛が苦となつて現はれて居る。その苦は無意味ではない。人は何が爲に淨瑠璃を聞くか、何が爲に芝居に行くか、泣かんが爲である。袂を絞つて、苦んで、而して嗚呼善かつたと云ふ。して見れば苦痛の間には何か貴いものがあるに違ひない。これは文藝の上から淺く解釋した事であるが、人生には更に深い意味の苦痛がある。唯自分が罪を犯して苦しむと云ふ様な事でなく、友の爲に、天下の爲に、身を捧げ乍ら、而かも思ふに委せぬ時の苦痛はどうであらうか。親が放蕩子を思ふ苦痛は人生の最も慘しき事實と云はねばならぬ。それが基督の最後であつて、又神の自現である。此處はクリスチャンと雖、容易に許し得ない所である。けれども最も圓滿なる人格を具へられし基督自身の上に生みの苦しみのあつた事を見れば、其根は遠く神になければならぬ。パウロが聖靈言ひ難き歎

きを以て我儕の爲に祈るといふたが、神が人の中にあつて苦しみ給ふ狀態を推察した言葉に外ならない。これは誠に有り難い事で、基督敎の眞の救は此處にあるのである。神の苦しみを見出さなくては宗敎心は滿足しない。即ち神の自現の極には大なる苦痛があるのである。けれどもそれは罪から出たものではない。人類を救ふ愛の苦である。故に我々の苦痛は此愛の中に入れば取り去らるゝ。苦が苦で取り去らるゝと云ふ事は不可思議の樣であるが、信仰の上よりは勢此に來らざるを得ない。さらば苦は永久に存すべきものか、然らず。いまだ神の國は現はれて居らない。十全の意味で神の自現はない。けれども來る可き神の國に於ては、我々の涙は拭れねばならぬ。神、の苦は此の世を神の世と爲さんが爲である、苦を以て神の國を作り出さんとする奮闘である。而して我々の苦も强ち自己の爲ばかりではない。時としては分けの分らぬ苦しみもあるが、其處には隱れたる意味がある。自覺せず、意識せずと雖、其奮闘は神の國を出さんが爲である。宇宙は苦闘し呻吟して神の國とその義とを生み出さんとして居るのである。

人々の望は多々あるが、神の國を求むる望み程大なるものはない。其處は凡て

の物を以て凡てに充つる神の妙境である。佛敎の如く現在其儘が神境と云ふのではない。成佛せんとして苦鬪しつゝあるものと見ねばならぬ。此の神の國は何時來るか、固より正確に知る事は出來ない。けれども兎に角歷史的事實として來るに相違ない。神の國は決して遠くない。幸にして地上に神の國が建設された時には、その國は生きた道理の國、至誠の國、人格の國である。所謂萬人皆王たるの國である。神一人王にして我々はその奴隷と云ふのではない、凡ての人が神となるのである。それは大河に注ぐ細流の如きものではない、實に千々萬々個々の意志が無限の調和を取るのである。其の中には宇宙が宿つて居る、否、個人其物が直ちに宇宙である。斯の如き自由の意志を以て形作りしものが神自身の示現である。宇宙の生成より見れば、神は初に人類の憧憬となり、中頃キリストの人格を通して個人となり、而して最後に來る可きものは我々一人一人が基督の人格に同化する事である。其の時になれば、神は我々に完全に現はれ、我々は神を完全に見る事が出來る。而して神の自現の中心事實は人格である。人格の國の實現は、即ち是れ神の自現の終局である。萬物を以て萬物に充實なる神の實現は即ちこの

神の國である。

人格の價値

古人曰く「我等は神の中に生き神の中に動き又神の中に存するを得るなり」と。此言葉の意味を能く味つて見れば、殆んど際涯なき海の中に立つて、朝靄深く罩めたる海氣を呼吸するが如き感がある。靈海の消息は誠に深遠であつて、一朝一夕に云ふ事は出來ないが、彼と我との關係は魚の水に於けるよりも密である。魚は水と共に列を同じうする譯には行かないが、靈海と我等とは其性が極めて能く似て居つて、親子も啻ならぬ思がする。さて神の中に生きてると云ふのは、單に人が宇宙の中に生存すると云ふ樣な意義ではない。それは極く淺薄な見方である。唯生存する丈ならば、山川草木の末までも神の中に生きて居ると云ふ事が出來る。けれども哲人はかゝる點に思を止めたのではなくて、人心に妙なる働の存する事を見たからである。即ち内なる淸き心靈の力は外界無限の生命と相應じて感ずる妙絶の狀を現はしたるものに外ならぬ。一面から見ると、此の身は神の宮居と

もいへるが、更に深慮を要すべきである。成る程、我等の中に神ありと云ふ實驗は貴いもので、聖靈を自覺するものは、皆之を知つて居る。此言は我等の中に神靈が暫時寄留して居るといへぬこともない。けれども神の中に生きると云ふ信仰は更に深いものである。吾人は我靈性に於て神を認むる、しかも更に一歩を進めて天地以上の神を拜するに非ざれば、其神は限りあるものとなる。宗教に心懸くる者の中には神を我と同じに見る者もあるが、これは未で淺い考と云はなければならない。スペンサーは神を不可知としたが、其處には大なる眞理がある。世界には現はれずして殘つて居る高大無邊のものが、どの位あるか、今後また如何なるものが現はるゝか、如何なるものが實驗さるゝのであるか、そこは何と云ふ事も出來ない。世が開けて以來、何百萬年又幾千萬年過ぎ去つたか分らない、その永い年月の間に顯現したものすら、神の内容の一部を盡して居ないかも分らない。此點から云へば神は如何なる者であるか想像も及ばぬ。古の人が神を歌ふた中に、神は近づく可からざる光の中に在ますと云つたが、これは無限なる神の一面に相違ない。又基督を稱へて見る可からざる神の見る可き形と云ひ、或は神の輝と云つた

がこれを逆に見れば、覗はんとして覗ふ能はず、近づかんとして近くに由なき神の半面を現はしたものとも云ふ事が出來る。故に崇高清楚絶えて穢に染まずと、傳へらるゝ基督自身すらも神と名くる事は出來ない。極く廣く見れば、基督は神なりと云はれないでもないが、無限絶對の神を指す時には彼は神ではない、不可知ではない。彼は知り得べき人である。自覺の達する所意識の及ぶ所は、之を見之を聞く事が出來るが、此等を以て觸るゝ能はざる生ける本源は分らない。これは三歳四歳の子が父母に對する時と同じである。彼等が父を見母を見る時には、どう思ふであらうか。父母は滴るばかりの恩愛を以て育みそだてるが、子は父母の内容に就ては萬分の一しか知らない、唯僅の所を見て信頼するのである。そのように神は無限であるが故に、我々はその凡てを推し測る事が出來ない。故に神の事を彼此と輕々しく云ふことは不可能である。けれども我々はこれのみで終るのではない。自覺せる人即ち我が中に宿る神の有樣を朧げ乍らも伺はんとする者にありては、よし今は充分ならざるも、靈性の磨かるれば磨るゝだけ、神を知るの希望を大にする。此心眼は誠に大切なもので、これに依らずしては到底神を知る事

は出來ない。我々は今現に如何なる神を自覺して居るか。神の屬性として見る可き愛とか義とか色々あるが、こゝには人格と云ふ方面を論じて見やう。

此人格と云ふのは人間に依つて初めて實驗せられたもので、天地廣しと云へど、萬有多しと云へど、人にのみ存するものである。けれども中には此貴き心的狀態に心付かずして、空しく人生を過ぎ行く者もある。よし又一應は之に觸れても底の底迄徹する者は甚だ尠い。或人々は心を鏡に譬へて萬有をありの儘に映寫する樣は、やがてこれ身內に盛れる無形の人性の姿と見た。或人は又潭深うして波も起らぬ靜な水の面に、月がさやかに照り渡るに思ひ合せた。けれ共能く考へるとこれは淺い考である。勿論人の心は鏡の如く水の如く、有りとあらゆる物を寫す、姿ばかりではなく聲も寫す、思も寫す。けれども鏡は心なく寫すばかりで、何等の自覺がない。スラ〳〵と寫つて又去つて了ふ。來るものは來らしめ、去る物は去るに委すのである。西洋でも人心を白紙や寫眞板になぞらへて、誠に感じ易くして、印象を殘す方面を現はした者がある。これは前の鏡や水に比べると、前者の云ひ能はざる所を道破した點もあるが、矢張活きたる自覺はないのである。如何に複

雜でも如何に天地の情景を寫しても、歸する所は明鏡止水虛靈不昧と云ふが如き見解と變らない。此等凡ては且つ來り且つ去るのみで、あらゆる物が寫つて居るばかりである。恁んな物が寫つて居ると意識する事はない。然るに人の心には自覺と同時に、連續があり脉絡がある。我々が過去の記憶に照しても、十年廿年卅年の過ぎ來し方を追ふて辿り行くと、宛然パノラマでも見る樣な心地がする。而して過去の連珠を貫きて、更に將來迄も續く。古人の中には此記憶に善もあり惡もあるが故に、そが永く心裡に止まらぬ樣に修養し、外界の物欲に拘束されずして一面磨き出せる鏡の如くに心中塵を止めぬ工夫を凝らしたのであつた。所謂獎らす迎へずと云ふ如く、過去を過去に葬つてスーッと捨てゝ了ふのである。併し乍ら如斯方法は眞實のものではない。我々の今日あるは何の爲であるか、唯偶然に出來たものではない。羅馬は一日で成つたものでない。其如く我々の實驗も數十年の星霜を經て積み重ねたる結果である。之は吾人の記臆に藏めらるゝのである。乃ち顧みて波瀾萬丈寄せては返る過去幾年の春秋を思ふて、此に我なる物の建設せられたる事を知ると同時に、進んでは斯くして建てられたる我の前途

の如何なる可きかを思ふのである。熱誠燃ゆるが如き青年が將來希望を有する事は勿論であるが、希望を失はないならば、白髮の老翁又實に大なる將來を有するのである。若し一個人として考ふれば、頽然として我老いたりの感なきを得ない。けれども眼を擧げて時代風潮の赴く所を察し、國を思ひ世を思ふ時は、其人の未來は千年萬年千萬年と雖も死せざるを感ずる。長命なればとて、七十か八十の身のそれが影の去り行く人生の凡てゞあると云ふならば、よしや巨萬の富を積んで高位高官に登るとも、成す所知る可きである。然し我が精神は二代三代四代と子孫の血に流れて、百代猶盡きざる限りなき時を思へば、白髮を戴くも義人として成さゞる可らざる事を知るのである。こゝが人間の面白い所で、過去現在未來の時を結びて、滾々流れて止まぬ間に、彼此相通ずる奇趣妙絕の働を思ひ見るものは、他に見出されない。寫眞は彼の小さい所に宇宙萬有の面影を寫すが、併し人間の眼はそれ所ではない。然るに我心の寫眞板になると、その眼にもまして更に大なる働をなす。即ち縱より見れば、過去は何萬年の古より永劫の未來に亘る時間と、橫より見れば、星より星と無邊際に擴がる空間が纔に方寸の中に入り來つて、而かも寸

糸亂れぬ秩序をなすと云ふ譯であるから、精神力の偉大なるに、我ながら驚かざるを得ない。今之を自己一身の上に就て云ふならば、如何なる變化があつても、其間には一貫せる意識がある。財產は時ありて得る事もあれば、失ふこともある。名譽とて位とて同じく賴るべきものでない。けれども境遇の幸不幸や肉體の盛衰等に拘らず、我なる者は依然として變らない。甞つて一國の宰相と成つて、錦袍一衣紫綬一條、居列ぶ幾千の官僚をして唯迎合之れ事とせしめた時も、關間流離、窮しては簑一つ無き賤が伏屋に人生の轉變を歎つ身となつても、其處には變はらんとして變る能はざるものがある。これが紅顏の香ゆかしき少年の昔より、老いては杖を賴りの身に至る迄、絕えて異らざる我の自覺である。これは例へて見れば、突兀たる巖が白泡白波狂ひに狂ひ哮けりにたけりたる大海原の中に聳ゆるが如く云ふに云はれぬ味がある。

も一つ面白いのは、人々凡て特種の性格を有する事である。諺に三つ子の魂百迄と云ふが、同じ敎育を施し、同じ處に置いても、甲の人は甲、乙の人は乙、丙は丙と千萬の人千萬の心を持つて居る。他人が其性格を受くる事の出來ないばかりか、親

が之を分たんとしても、兄弟が之を分たんとしても不可能である。而して如斯精神は之に培ひ之を養ふ事に依て、漸次大なるものとなり、遂には大なる靈の光と成つて現はれる。此個人性は宇宙廣しと雖も、我の外に受くる事の出來ない貴いものである。

而して一旦之を受けたる以上は、之を造り直す事は愚か、之を修飾する事すら甚だ困難である。故に親でも一度子を失へば、後にどんなに澤山の子をもうけても、先に死んだ子に代る可きものはない。如何に苦しみ如何に歎いても取り返しがつかぬ。そこに個性があるので、我々は之を重んじ、之を尊ばねばならぬ。

然るに最も此個性に深い關係ある、又一番手近であつて、而かも一番わからないものは我である。「我」はと云ふ、あの自我は一體何處に宿つて居るのか、どうして現はれるのか、茫漠たる過去を尋ね、悠久なる天地を探り、微として穿たざるなく、大として窮めざるなき其主人は一體何か。古の人は此「我」と云ふ事を賤んで、惡い意味に用ゐたが、決してそんなものではない。自我がなくして果して何事が出來るであらうか。人は一面自我と云ふ事を賤め乍ら、而かも他面には之を尊んで居る。

試みに無禮の言を吐いて我を罵倒する者があれば、大抵の人は憤然として怒る。それは何故か。云ふ迄もなく、我の尊嚴を害されたからである。此自我があればこそ、法廷に物言ひ、道義を論ずるのである。故に親でも此「我」に對して尊敬を拂はざるを得ない。「我」は中心である、本尊である、決して蔑にす可きものではない。從て我々は責任を自覺する此「我」を有せる人に對しては、頭を下げざるを得ない、唯世間の禮儀だから爲すと云ふ樣な淺薄な事ではなくして、人間の根本要素たる自我其物に對してするので、蓋し人格の本尊なるが故である。此自我は我々の經驗中一番貴いものである。さらば基督教に於て十字架を說き犧牲を敎ふるのは何の爲であるか、あれは我を殺すのではないかと云ふ人があるかも知れぬが、我々は斷然として否と答へる。基督教は自我を救ふ爲の宗教にして、基督の出現は此使命を果さんが爲である。佛教などで自我を殺すと云ふのであるが全く我を滅却し去るに非ずして、實は大我を活かさんが爲であらう。

此自我觀は基督教に於ても舊敎と新敎とは多少その趣を異にする。天主敎の如きは法王と云ふ樣な一種の權威を置いて、之に服從する事を以て我は救はると

思ふけれども、一度宗教改革なる大波瀾に襲はれた以後の基督教は、最早在來のオーソリチーに滿足する能はずして、之を破つた。而してパウロの所謂義人は信仰に由つて生く可しと云ふ如く、信仰を以て宗教の根本とし、飽迄自我を立てんとした。併しこれが爲めには困まつた事も起つた。即麻の如く亂れたる當代の人は皆自分の思ふ儘に振舞つたけれども、一方から見ると我を重んじた結果、人物が相競ふて現はれた。今日でも新教國には人物が多い。スコットランドの如き、加奈太の如き、獨逸の如き、英米の如き、多士濟々の觀がある。彼等は團體としては時に統一を缺く嫌があるが、各個人が思ひ〳〵に事業を劃策して、政府にも何にも賴まずに、どし〳〵とやつて行く處は實に偉いものである。歐羅巴の國々も幾多の困難に遇つたが、その代はり人才は彬々として輩出した。元々法王を通して神に接したものが、短刀直入神と我との親しき直接關係となつた。人は何と云はうが構はない、親でも兄弟でも此關係に立ち入ることは不可能である、と自覺し始めた。此處は儒教の所謂愼獨と相類似して居る。ナザレのイエスは常に此處に這入つて居られた。彼の前に人は多く來たが、友たるものは僅に十二人にして、しかも十

二人の中でも最も親しかつたのはヤコブ、ペテロ、ヨハネの三人に過ぎなかつた。否此の三人すらゲッセマネの園に於ては共に祈る可き友ではなかつたのである。あの處は全く單獨であつて、前に古人なく後に來者なく、悠々たる天地の間獨り寂然として神に訴ふる哀愁の極である。併し普通の人はかゝる單獨の境に入らんとして入る事が出來難いけれどもこゝに自我の妙境がある。

更に一歩を進めて考へると、亦正反對の現象がある。恁う云ふ個人的な者が幾萬、幾億と相集まつて天涯地角至る所に業を共にし事を起す事が出來るのは中々面白い事である。其處には深い譯があらう。我々人間は悉く違つて居る樣ではあるが、心の奥を辿り辿つて神在ます清き泉に接するならば、人々は皆相通ずるものがある。聖書には「神は凡ての物を以て凡ての物に充つる」と云つてあるが、我々の人格は此處迄來なくてはいかぬ。

我獨りの慾我獨りの望ならば、それは極めて小さい。けれども我が望は我が爲にあらで、千萬人の望である。我願は我一個一個の願にあらずして、人類同胞の願ふ所である。我が泣くは我れ獨り泣くにあらず、千萬人の泣く所を泣くと云ふ時

には、我れ足を擧げて一歩前に出づるは、やがて千萬人が跡を襲ふ可き模範となるのである。基督の愛は正にこれである。彼の隣は人類である。而して基督敎は其廣いものが我が中に宿り宇宙に充つると信ずるのである。若し此自覺に入り此意識に入る事が出來るならば、其人は最も高貴なる人格を見出す事が出來る。

之を要するに人格には二面ある。即ち一は三つ子の魂百迄と云ふ個性の方面で、他は各人を隣とする宇宙の神の宿る事を信ずるのである。これが分らなくては、基督の神は分らない。神は我々が實驗する其儘の者ではない。けれども神が人に現はるゝ上に於て一番貴いのは、人格を通して來る事である。若し人格を通さないならば、神ありと雖も、その神は甚だ低い。此故に我々は基督の如き大人格の足跡を慕ふて、神に仕へんとするのである。而して更に一段進んで云へば、我々は神其物を人格として、仰いでアナタよと云はざるを得ない。人として神に仕ふる道は、此以外にはない。故に我等が神に物言ふ時は「我」である如く、神が我等に物言ひ給ふ時も同じく「我」である。以上で大體は盡きたのであるが更に一言加へたいのは自我の永生である。三寸息絶ゆれば、吾人の身は元の身でない。けれども

我が中に存するものは永しへに變る事はない。よし死後如何なる形を取つて現はるゝか、その程は分らぬとも「自我」は永遠に亘りて生き殘る可きものである。思ふに基督教の深い所を約めれば、我と我との交、愛なる我の永生、此三つに過ぎない。而して無數の我が大我に支配せられて行くのが天國であるから、現在我々が働きつゝあるのは、自我の天地を作りつゝあるものと云つて差支はない。要するに人格の價値は此宇宙唯獨りといふ個性を備へて、同時に無限の神の性格を有し、我法即ち宇宙の法、我道即ち宇宙の道と自覺し、又單純にして又複雜なる自治自適自由自在なる靈そのものに存するのである。

智識と信仰

信仰の根據は主として吾人の情と意とに存するものである。けれども情と意とは智を離れて動くものではない。故に信仰の中には自ら智能の働が含んで居る。信仰は本來の生命にして智能は之が說明である。情意の泉より湧き出つる信仰の流は天然のもので、人の世界に生れて、以來抑へんとして抑ゆる能はず、消さ

んとして消す能はざる精神の働である。こゝには信仰と智識との衝突はない。信仰の來る所を廻り廻つて遠きに至れば、單に人間と云はんより、寧人間以前にあつたと思はれる。動物の時代に無意識なりしものが、人間となつては意識的となつて居るが、止むに止まれぬ力たるに至つては、何等の區別がない。かく考へて見れば、智識と信仰とは決して衝突す可きものでなくして、智識は智識、信仰は信仰と分野があつて、自から區劃を別つて居る。信仰は動力にして、智識はその參謀である。けれども實際を見ると、彼と此とは相容るゝ能はざるが如き水火の爭をするのである。之は人心が錯綜して明に區別する事が出來ない爲に起るので、信仰の萠芽既に發すれば、智は働かずに居られない。必ずや之が參謀となつて啓發するのである。而して初の間は智識と信仰とが混同して、何れが信仰か、何れが智識か分らない、恰も子供が何もかも混淆して、唯想像に生くると同じである。けれども其處に全く智が缺けて居るのではない、漠然として智識は發達しつゝある。人はヂットしては居られぬから動くのである、目的を立て理想を立てゝ爲るのではないが、唯晏然として眠るが如く、死するが如くして生きて居る事は出來ない。赤子

でも眠る時は兎に角として、眼を開いて居る間は始終動く、何の爲か分らぬが、立たう歩かうと色々の事を行つて休む暇もない。それと同様に信仰も初の間は神話に於て見る如く美しい夢の様な想像の産物として、あらはるゝのであるが、段々と進歩發展して來ると、信仰の目的となるものを明確に知りたいと言ふ念が次第に盛になる。すると智識は信仰の批判を與へたり、又經過を研究したりする樣になる、乃ち教義が生まれるのである。けれども教義は智識であつて、信仰ではない。世には此區別を誤つて教義即ち信仰なりと思ひ、教義に入る事愈深ければ、信仰愈深しと考へて居る者があるのは歎はしき次第である。併しかく云へばとて、教義は全く意味乾燥のものであると云ふものではない。實驗の深きを思ひ浮べて、築き上げたる貴き智識である。それを知らずして一概に教義はつまらぬものだと云ふ事は出來ないが、本來智識的のものであるから、天地の學問が進んで來ると、何處迄も在來の教義を以て滿足することは出來なくなる。今日の科學、今日の哲學は二千年三千年の久しき以前に於て、建設せられたる智識を其儘遵奉して居るのではない。其處には進歩がある、發展がある。否舊き物を打ち破つて、新しき物を

産んだのである。故に現代の學術、現代の思想に依つて養はれたる我々は、最早過去の敎義に安じては居られない。動もすれば信仰を疑ひ神を疑ふ樣にもなる。ありし昔の熱誠は影と消え去つて、唯殘る氷の如き思を抱きつゝ、泣く者がどれだけあるかわからない。けれどもそれは智識と信仰の衝突でなくして、智識と智識の衝突、即ち昔の智識と今の智識との衝突である。

我々の中に在る、止むに止まれぬ精神即ち信仰の內容を探して見ると、慕ひ求めて行く向上の心がある、戀する者の如くあこがれて、尋ぬる者に遭はざれば、滿足せない者がある。然らばその心の中に何が宿つて居るか、何が意識されて居るか。人間の性格には色々異つたものがあつて、一樣ではないが、誠を欲し善を望む點に至つては、人類悉く歸を一にする。即ち眞理に向つて進む活動其物である。今日學問をする人々の中には、學問を硏究して衣食の資を得んとする者もあるけれども、眞理の一角に攀ぢ登りて妙なる天地の道に接せんとする、如何にも美はしい考を以て進む人もないではない。大學敎授の月給は銀行の頭取や大臣の俸給に比すれば、誠に輕少である。それなら人物が善くないかと云ふに、決して然うではな

い。彼は五千萬の師表である、先生である。然るをそれに甘じて、自分は愚か妻子に迄質素な生活をさせ乍ら、不平も云はぬのは何の爲であるか、眞理を得たいと云ふ一念が中に動いて、どうしても止むる事が出來ないからである。若し身大學の敎授にして、これに心付かぬものがあるならば、其人は憐む可き者と云はなければならぬ。學者必ずしも事務に疎いのではない、行ればやれる。けれども之を棄て彼に至らん事を欲しないのは、朝に夕に眞理を求むる心急にして他を思ふに遑がないからである。即ち道理の世界は我が理性の鍵を以てすれば、開かれると云ふ一大信心が彼を驅つて此に至らしむるのである。決して唯冷やかなものではない。其處には胸の底深く潜める神秘の焰に觸るゝものがある。彼は會堂に行つて禮拜をするのではない、寺へ行つて參詣するのではない。けれども書齋は彼の宮である、寺である。彼が端然として目は唯一枚二枚、開き行く書籍の中に忘るゝ時、何の汚穢がある、何の野心がある、獨り學者と云はず、觀來れば誰も彼もどうかして淸いものになりたい、正しいものになりたい、眞實の人になりたいと云ふ熱情のないものはない。これが人の子の僞りなき思である。然らばかく望む土臺は何

であるか。絶對の義を信じて、我が本性を磨かんとする精心其物である。宇宙は不義奸惡ではない、人の踏む道がある、高きものがあると云ふ確信なきものが、何で道の爲に殉ずる事が出來やう。彼等は天國とは云はない、神の國とは云はない。けれども現在の世に滿足せずして、之より淸き世界に達せねばならぬと云ふ至誠は、淡雪の下に萠え出づる若草の如く、發せずして止むものでない、若しくは地に落ちたる楠の木の實が温き日の光に向つて、段々と成長して行く有樣に譬へてもよからう。あの所は人間ならば非常な理想を抱いて進む所である。今はつまらぬ木の實であるが、どうぞして喬木になりたい、大きなものになりたいと云ふ大理想大希望に外ならない。勞すれば功がある、努むれば愈々善くなるに違ひないと信ずればこそ、社會改良家となり、豫言者となり、宗敎家となり、更に眞實の志士となり、政治家となつて、現るゝのである。これは人間の中に先天的に感じて居るものがあるから發するので、若しそれが無いならば、善い方に向ふ筈はない。奮鬪の精神には善がある、義がある、これは斷じて取り除く譯には行かない。人を愛して己を忘れ、世を思ふて義唯これ從ふ精神には、何等の僞がない。故に人が自分を愛して

呉るゝ眞心に對しては、唯有り難く思ふのみで、隔つる心は露程もない。これ實に人類の眞精神にして、又宇宙の本體とする所である。それならば智識は之に對して如何なる關係を持ち、如何なる態度を取るのであらう。我々は恁うして眞理を求むるが、眞理と云ふものは果してあるか、徒に泣いて求めて骨折るのではないか、博愛の精神は迷か、慈善は誤か、抑も又焰と燃ゆる憂國愛人の至情は惡魔の化身か、眞の智識は然りと答ふる筈はない。啻に之を妨げざるのみならず、その道は恁う、あの道は彼と、一々親切に敎へて呉れるのである。故に本來の智識と信仰とは衝突するものでなくして、調和す可きものである。若し夫れ智識を求めて危難を排するの勇なく、眞理を探ねて之に憧憬るゝ熱誠がないならば、正善にして且すがすがしき智識は得られない。けれども幸なる哉、善に向ふ止むに止まれぬ熱血は脉絡に沸いて倫理宗敎を產まざるを得ない。一般に數學は乾燥無味なるものと考へられて居るのであるが、其數學ですら眞實に身を打ち込んで硏究する者に取ては、劇を見るにも增して面白みがあると云ふ。而して此等の人々は時として食事をすることも忘るゝ。否啻に食を忘るゝのみならず遂には妻もなく家もなく、一向

研究に心を奪はれて了ふ。此理智と情意との兩作用が互に相助け相補ふて行く有樣は、誠に不思議であつて、我自身すら測り能はざるものである。所が此熱情が登り行く時に、智識が之に伴はないならば、恰も闇の夜に物を探す樣なもので、一心であつても、功は甚だ尠いと云はなければならぬ。然るに智の光があれば、よし朧げであるにしても、其姿を伺ひ其本體に接する機會を與ふる。近代の人と古代の人との溝渠は智識である。之を初代のクリスチャンに就て見れば、其の天地はユダヤであつた、地中海であつた。星も月もさのみ遠い者ではない、唯我眼に映つる丈と思ふて居つた。それが我々の時代になると、まるで變つた。昔は宇宙の森羅萬象は何もかも不可思議で、何時どんな事が起つて來るのか、樣子の分らない危險至極の者であつた。所が今日は此世界に理法があり、規則があつて、不安心のものでない事が明にされた。爲に我々は自己一代の計を立つるのみならず、百年千年萬年の久しきに亘つて望む所を劃策する事が出來ると云ふ譯になつた。即ち過去に於ては神は信じたが、智識が明でなかつた爲に、之を言ひ現はす塲合に於て不完全なるを免れなかつたのである。昔の人は基督の出現する時は、やがて世の終

なりと思ふた。けれども地球は千年や萬年で成つた者ではない。何十萬何百萬と云ふ數限りなき時を通じて成立したもので、人間が出てから後だけでも容易のものではない。殊に進化論が出てからと云ふものは、在來の思想は根底より覆へされて、人間は墮落でなくて進化である、發展であると云ふ事に定つて了つた。若し我々はアダム、エヴが智識の木の實を味つた爲に、天國を逐ひ出されたと云ふならば、基督に救はると雖、猶悲しき思出たるを免れない。それよりは寧ろ過ぎ去し方を見れば、賤しいものであるが、我は進化するものである、我自ら神の恩惠を受けて茲に天國建設の事業に與ると云ふ時に、インスピレーションが湧くではないか。それは理論の上の事であるが、兎に角中心に生命の靈を感ずると云ふ。首尾相徹して千載變るなき信仰は實に莊嚴の極みである。茫々たる天地の間に獨り煢然として居るのではない。前に幾千年の歴史あり、後に永劫限りなきの未來あり、雙々相關連して生命の通ふものあるを見ては、往燕遺影なく、來雁餘聲ありと雖、又將に靈界の消息の奇なるに驚かざるを得ない。思ふに斯の如きはモーゼ、イザヤも未だ想到せざりし所である。基督は一面バプテスマのヨハネを稱して女の產め

る者の中バプテスマのヨハネより大なる者なしと迄嘆美せられたが「されど」の一轉語を下して天國のいと小さき者も彼にまされりと喝破せられた。我は敢て云ふ、今日の吾人はペテロよりもパウロよりもヨハネよりも更に大に優さるものであると。彼も我も世界は神の支配する所にして、我が中心に神の靈在ますと思ふのであるが、信仰の內容は餘程發展して居る。即ち一言以て之を蔽へば、智的眼界の擴大はやがて神の知し召す全宇宙を會得するに於て、偉大なる貢獻をなせると同時に、靈的生命は此智識をして力あるものとなしたのである。反之智識ばかりで信仰がないならば、其人は唯物論に陷らざるを得ない、けれども信仰ある者は唯物論に成らうとしてもなれない、それは學問に依てばかりでなく、落さないものがある、即ち祖先以來養ふた靈はその之を衷心深く意識する人をして、斷じて唯物主義に落さないのである。薄信の人は動もすれは落ちんとすれども、大能の手は屢之を引き上げるのである。學者が天地は迷なり、無明なりと云ふは、淺薄の見解に外ならない世は夢に非ず、幻にあらず、嚴然たる靈の實在なりと信ずるは、深い見方なりと云はなければならぬ。何となれば確實なる神を信じて、世界は神の支配し

給ふ所と信ずる時には、到底そんな唯物論に落ちる事は出來ないからである。其に落ちるは其人の心に眞實と云ふ點が解らないからである。又一方には淺薄な實理主義に落ちない。何となれば信仰は理想である、行かうと思へばこれよりも貴い世界に行けると思へばこそ、奮鬪もし、努力もする譯で、信仰なく理想なきものゝ如く、唯飮んで食つて今日を過して行けば、善いと云ふ樣な風にはなれない。又一部の人々の中には虛無論があるが、吾人が之に落ない事も前同斷である。而して又一部には懷疑論がある。これには斷じて落ちない。舊約聖書三十九篇の中ヨブ記は曠世の大文字として傳へられてあるが、あのヨブは眼前口頭の中、有ゆる懷疑が充ち滿てるに拘らず、獨り信じて疑はなかつた、否疑つても疑ひ終らなかつた。それはその心の奥底に正義を信じて居たからである。近代になつてもカントの如きは又斯の人である。彼は唯智識の人ではない。彼は固より博學多識の人であつたが、尊ぶ可きは此點のみならずして、寧其深刻なる自覺と信念に存する。彼は幾度か迷霧に鎖されたが、これあるが爲に遂に懷疑の闇を破つて光を見たのである。進化論の初めて出た時、宗敎界は動搖して殆んど信仰を失はんとした。

然るに今日では進化の理法を以て信仰を說き明さんとするに至つた。故に眞に神を知らんとする人々は實驗に實驗を重ねた科學者の研究は、大膽に勇敢に之を取り入れなければならぬ。唯此に注意を要するのは、吾人の信仰は今日滿足に智識上より說明を與へる事の出來るものでないと云ふ點である。さりとて失望するには及ぬ。吾人は飽迄努力して行けば必ず解決せらる時が來るに相違ない。眞理を求むる人よ、日は暮れて山路の夜暗しと雖、怪禽枝にあつて悽愴の氣人を擊つと雖、必ずや解決の時はある。吾々はどうかして一時も早く解決して、惱める胸を癒したいと思ふのであるが、併ながら解決は待たねばならぬ、あせつてはならぬ宇宙の大問題はそう急に解かるゝものでない。先頃或る中學の卒業生が自分の所へ來て煩悶を語つたが、此靑年の煩悶は唯物論か何か非常にむづかしい問題に躓いて居るやうであつた。今君はそんな事を考へても解らない、尙十年も待ち給へ、然うすれば幾分か分るかも知れない。併しキットと云ふ譯にはいかぬ、或は一生掛つても解らないかも知れんと敎へて置いた。嘸不滿足であつたらうと思ふが、どうも仕方がない、四五歲の子供が一間の塀を飛び越え樣として、それが出來な

いと云ふので、煩悶する必要はない。宇宙には人の解けぬ問題がどれ程あるか分らない。我々は之に一生を捧げて研究するのだ、すると多少は解けるだらう。よし我一代に於ては何等の事が出來なくとも、子孫が之を解くのであらう。後の君子が之を解くのであると思へば、我々は棄石となつて安ずる事が出來る。さすればどの點から見ても、宇宙に神の實在するは疑ふ可らざることである、然るに之れ丈信じ乍ら、尚神がないと云ふものがある。加藤博士の如きは其一人である。けれどもそれは加藤氏の所謂神が無いのであつて、我々の云ふ神が無いのではない。敢て問ふ道理とは何であるか、宇宙を組織する法則と云ふか、秩序と云ふか。然らば吾人は決然として云はざるを得ない、我々の信ずる神は道理の神であると。故に無しと云ふは思はざるのみである。最後に臨み、復繰り返し云ふ、我等の信仰は智識を害せざるのみならず、之を助くるものである。智識は信仰をして光あらしむるものであると。故に一を將帥とし指揮官とするならば、他は之が參謀たり、謀主たるものである。而して二者の全き調和は唯吾人生命の源泉たる神に於て見るの外恐らくは不可能であらう。

罪惡の自滅

罪惡と云ふは實にいやな題目である。けれどもこれも社會に於て、又我々の一身に於て、避く可らざる事實である。怎うして恁う云ふ恐しい事實が人間世界にあるか。幾多の學者、宗敎家が其究竟の原因を探ぐらんとして研究するが、未だ解らない。恐くは人の考では解決されぬのかも知れぬ。誠にむづかしい問題である。けれども罪惡は矢張人間界の事實である、脫がれんとして脫るゝ事の出事ぬ事實としてある。若し夫れ罪惡が人類に無いものならば、人類は定めし幸福であつたらうと思はれる。それに神は何故斯の如き恐しき事實を許し給ふたらうか。我々は如何に考へても、尋ねても、默示は授けられない、聖書を繰り返しても、深き信仰の實驗に照しても、わからない。唯今も昔の如く、眞面目なる人々は之が研究をして居る。文明は進んだ。けれども文明のある所に罪惡も跋扈する。恁う云ふと罪惡は永久に存在する樣に思はれるが、罪惡は本來自ら滅ぶる性質を有して居る、他を亡ぼし、又自ら滅ぶる弱點を有して居る。これは如何にも恐しく感ずる所

であるが、同時に亦慰むる所もある。

今その二ツを擧くれば、一は個人に現はれ、他は社會に現はれる。大なる人類と小なる一身の差はあるが、人として多少之を實驗せぬものはない。罪惡の恣に働く其人の身體が罪惡に依つて亡ぶる事は確なる事實である。人の身體と云ふものは、生れ落ちた時には比較的奇麗なものであるが、從つて病も尠い。身の病は罪と關係せないものもあるが、罪は斷じて身を健全にするものではない、身が自滅せねばならぬやうにするものである。罪惡の根源は身體にはない、精神にある。その精神の働が身體に及ぼすのである。人に憂のあるのは強ち罪惡からばかりではない。人の罪惡を憂へて、同情する所よりも生ずる。しかし若し我が心が奇麗なら、苦があつても免れる道が開いて來る。けれども自分が起して來た罪惡の憂には、悔改の外活路が無い。我が作つた罪惡其物の中に自から呻吟せざるを得ない。罪惡より起つた苦痛は身體の上に大なる影響を及ぼす。近頃の科學的研究に依て見ても、心に苦のある時は細胞其物が働を減じて、光を放たなくなると云ふ。それ故に細胞に依つて形つくられてある顔から美が消えて行く。罪惡を重ね〴〵

犯した人の顔は愛す可きものではない。いやな汚れた厭ふ可きものとなる。女子であるなら、白粉をつけて装ふけれども、活きた目のある者から見ると、何等見所がない。今日では眼を清くする術もないのではなからう。有りそうな事である。けれどもそれに依つて眼は美しく聖く光らない。眼の奥床しき色は輝かない。故に美を皮膚に飾つても、眼は濁つて居る、汚れたものを見せて居る。故に如何にも釣り合ひが取れぬ。如斯眼に光のないのは心が汚れて身體全體に病を生じて居るからである。我々が苦悶に入つて居る時に、消化も呼吸も鈍くなつて、獨り心臓のみ皷動する。而して腦は一種煩はしき思に堪へない。起つても、居ても、居られない。何もする氣はない。かくして度重なると身體は勢力を失ふ。

ありふれた烟草の習慣についていへば、或者は害ありとし、或者は無いと云ふ。議論は學者に委せる。けれどもこれだけは明である。心の順良にして清いものなら、二つのうち孰れを擇ぶかゞ分る、斷じて害ありといふものには近づかない。良心を鈍らして取るのは善に向ふ精神が乏しいからである。烟草は吸ひなれては止められぬ」と云ふ。そうなるともう氣焔は上らない。醫學上から云ふのでは

ない、苟も止め切れないといふ弱點は直に人心を萎微せしめて、身體を不活潑ならしむる。酒の如きもそれと同じである。正しく害ありと知つて之を飮むときは、直接に害毒が身體に及ぶ前に、既に心を害して意志を薄弱ならしむ。罪惡は意志の強力を弱める。惡いと知り乍ら、廢められぬと云ふに至る。其心の狀態は何者かに束縛されて居るのである。この束縛の自覺は眞に人心を不活潑ならしむる。是れ正しく身體に病を發する基である。意志を弱めて置いて、酒や烟草で元氣をつけたからとて何になる。恰も胃に刺激劑ばかりをやると、惡習慣となつてそれが無いと消化せない樣な具合に、酒、烟草で一時を糊塗するのである。從つてそれからそれと、害毒が身體に廻つて、反抗力を減じて行く。元氣な時には抵抗力がある。元氣なものには病氣は尠い。けれども氣の飢ゑて居る上に、身體に抵抗力が減じたときには、色々の病に取りつかれること、枯草の火に於けるやうなものである。

今日男女の青年の病は色々あるが、罪惡より來る物は甚だ多い。醫者に聞いて見ると驚くばかりである。婦人が如何に苦痛を受けつゝあるか。自分の罪では

ないが、その半身より受けて居るものが、どの位あるか分らない。而して罪惡の爲に病院を作る、實に歎息に堪へない。更に元に歸つて精神に就て考へて見ると、同じ意志の働の中でも消極的のものは割合に殘る。

人間が善に向ふ意氣は實に大切である。草木に生々の氣あると同斷である、始終意氣盛な時は健全である。所が罪惡を犯す者は意氣が弱くなる。打たれても、たゝかれても、氣力がなくなる。之に反して、罪惡を退けて行く時には、奮發興起して、猛進する力がある、所謂浩然の氣である。快活にして、元氣に充ち、善に向ふ事宛も飢ゑ渇くが如くなる、然るに其凛たる生命は罪惡の爲に消えて影の如くなる。殘れる情も熱烈ではあれど、もう極めて薄弱となる、涙猶殘れり。一面は涙脆く、一面は冷になる。けれども明確なる判斷は出來なくなる。まるで判斷がないのではない。けれども生ける方に判斷はせない、却て死ぬる方、暗い方ばかりに行うとする。云はゞ晝は見えないので、夜見える樣なものである。如何にも賢げに暗黑を見透して、世の人を馬鹿にする。けれども自分がそれだけ暗くなつて居るのである。暗い所にばかり居る人は日の光を避ける。見れば眼はまぼしくなる。然

かして終には眼さへなくなる。例へば魚が洞穴の中にばかり永く居ると、眼はあつても見えない。見る必要がないから、視力は次第に減じて行くのである。眼は太陽の光線を見る事に依つて發揮する。地球の朦朧として居る時には、眼の發達は乏しい。それと同樣に智識も道理の明るい世界を見る筈のものであるが、暗い所ばかり見ると、其力は減ぜざるを得ない、次第〳〵に暗い方に沈んば行く、良心は終に眞暗となる。劍を取り、毒を飮んで死ない迄も、罪惡の結果は精神の自殺である。日に〳〵我が身體を亡ぼし、我が精神を亡ぼして行く死である。永久に生く可き天禀を有し乍ら、行くべき所に行かずして、死ぬるのは罪惡の結果である。これを社會國家の上に就て考へて見ると、當に隣國を惡し樣に云ひたくはないが、如何に罪惡が國を亡すかを韓國の國情に於て見た。

彼處に現はれた罪惡は壓制である。我儘なる利己一片で、他の幸福を計らない罪である。人を犧牲にし、民を殺して、利を得んとする、これ實に罪惡の中最も惡む可き者である。罪惡程利己主義なるものはない。韓國に行つて其王宮を見ると、宏大なもので、その敷地は我國の宮城よりも廣いかと思はるゝ。後に山を控へて、

前にも山を見る、眺望も具はり、高臺は殆んど凡て宮城である。而して宮城を取り圍む塀は高く聳えて、翠の雲深き丘陵に接して居る。けれども宮城の周園を見ると、低い見る影も無い茅屋が一面に地を這ひ廻つて居る。あの細い煙を立てゝ居る人民は何の爲め存在して居るか。王城は人民の膏血を絞つて居るばかりで、外の事は考へない。民の富むは我が富むなりと仰せられた、古の仁君の思召の如きは朝鮮王の夢にありしや、なかりしや、疑はしき限りである。

日本政府と韓國政府との收入は比較にならぬ。けれども韓國皇室の費用は我皇室の半であつた。それも減じて〳〵行つた結果であるが、元は同等位であつた。人民の疲弊斯の如くして、皇室の歳費は世界の一等國と相匹敵せんとしたるとは、利己に非ずして何である。これ實に韓國の亡びに至つたる所以である。獨り財政の事ばかりでなく、陰微の中に入つて見ると、此處に殺され、彼處に殺され、一人の爲に多くの生命が奪はれた。而して又如斯處に於ては多くの女が犧牲になつて居る。これば何れの處に於ても同じ事で、暴君のある所に於て、虐政の行はるゝ所に於て、常に見る現象である。而して如斯虐待せらるゝ人民は勢怎うしても自然

を虐待せざるを得ない。彼の地の山は殆んと見渡す限り禿けて居る。自然を亡ぼすものは自滅の外ない。韓國を亡ぼしたものは韓國なりと云はざるを得ないが、その原因は虐政の罪惡に歸する。これは韓國ばかりの事ではない。日本の如きも、日本國としては發展して居るが、政柄を執つたものには興廢存亡がある。藤原氏と云ひ、平氏と云ひ、源氏と云ひ、はた北條といひ、足利といひ、さては徳川といふ、代は移り、時は同じからずと雖、彼等を亡ぼす者は等しく罪惡である、利己主義である。斯の如き社會には律法はない。朝鮮の如きは賄賂を罪惡と思はぬ。我が知己の收税吏が云ふに、止めても〳〵やまないものは賄賂である。八圓を取るべき筈に十圓乃至十二圓を取るのである。賄賂は底止する所を知らない。而して强ひて禁せんとすれば、彼等は賄賂なくして恁うして生活する事が出來るかと訴へる。韓國の滅亡は韓國の罪惡である。罪惡は獨り朝鮮にあるのみでなく、現在我が日本の隅より隅に亘つて行はれて居る。

男女の亂りがはしきは何たる恥辱であるか。堂々たる帝國の代議士が花柳に遊ぶ、其遊び方が公然と書かれて居るではないか。それを遠慮なく曝露しても天

下の人は怪まない、當り前の事として居る。怪しき婦人がぞろ〳〵と歩いて行く。けれども何とも思はぬ。大學の敎授を初めとして、敎育家で之を憤るものはない。何が故に然うか、彼等自らが罪惡の中にあるからである。道德の腐敗、男女の無節操が比々として行はるゝに係らず、上大臣より、下車夫馬丁に至る迄、之を見過すは何たる事である。之れ果して日本を活すものか、亡すものか。それを氣づかないは韓國に於ける賄賂と變りはない。我々は之が爲に苦み、之が爲に打擊を受けて居る。然う云ふと、或人々は歐米にも罪惡はあるではないかといふて、一々其例證を擧げる。何たる卑劣である。人が泥棒すれば、我も泥棒して善いと云ふ理由が何處にある。人の非を擧げて我非を是認せんとするは何たる卑劣である。群衆が罪惡と心付かず、滔々として之を行うて恥ぢざるときは、之を矯正すること中々六ヶ敷い、何んとなれば一人で罪惡を行ふよりも十人で行ふは易く、十人で行ふよりも百人で行ふは易く、百人千人で行ふよりも國民擧つて之を行ふは易い。故に國民の罪惡は一個人の敵し難いものである。國民の罪惡ほど一個人を滅ぼすものはない。何の罪惡を問はず、國民の罪惡となつた以上は、殆んと自から救ふべか

らざるものとなる。一個人の罪惡が個人そのものを亡ぼすやうに、一國民の罪惡は國民そのものを滅ぼすのである。その實例を見やうと思はゞ、韓國を見るほど適切なるはない。

國王の利己主義は勢ひ人民を虐待し、人民の虐待は一轉して自然界の虐待となる。自然が滅ぶるときは人民は何に由て生くべきであらうか。人民が貧困に陷つたときに、國王は何に由つて生くべきであらうか。しかして國民の滅亡は一に國王の利己主義にかゝつて居る。一個人の滅亡も先づ各自が公明正大なる良心の聲に耳を傾けず、小弱なる一己の快樂を旨とし、その理性の活動を阻碍して、專らその身骨の欲情に重税を加ふるに由來す。精神痲痺し身體疲勞し終るときは、罪惡そのものも亦滅亡する。故に罪惡は自滅するといはねばならぬ。若し夫れ良心の聲に聞き、忠實にその啓示を實行し、智能と意志とを强徤ならしむるときは、情感は自然と爽かとなり、所謂義と和と聖靈に由れる悅樂の心情を實現し來る。此義と和とは各自の正義が罪惡と奮鬪勇戰して得たる結果にして、此立脚地より觀ずるときは、罪惡は强健なる人格を形成るになくてならぬものである。罪惡は自

滅するものなるが故に、天地經營の上より論ずるときは、毫の損害ないのである。獨り此大なる經營の途中に於て罪惡を征服して超脱すること能はざる者は禍なるかな、彼は罪惡と偕にその運命を同うせねばならない。罪の價は死なりとあるは眞に道義界の事實である。

希望の生活

近代獨逸精神界の明星として尊ばるゝレッシングが、自分の生涯の希望を言ひ表はした言の中に、若し神が右の手に完全き眞理を携へ、左の手に此の眞理の探求、而も其の途上兎角迷に陷り易い探求を持つて、左か右か何れを爾に與へんかといひ給ふとすれば、自分は謙つて神の前に俯し、その左の手に縋つて眞理の探求を授け給へ、全き眞理は唯父のものである、我如き者の有すべきものでないと言上するとある、是は啻にレッシング自身の眞理に對する態度でなく、實に彼れ以後近代の大精神を克く言ひ表はしたるものである。誰しも全き眞理を願はぬものはない。故に其の願を滿足せしめんとして、昔から往々特に完全圓滿なる眞理を有すると

主張する。例ば聖書は全たい眞理を示す爲に神が授け給ふたものと思ひ、人々は難有い福音と信じて喜び滿足した。處が此聖書中の事柄には一々其儘受け取られぬものもある、寧ろ誤謬の聲として斥くべき所も見出さるゝ。そこで全いものは唯人の理性である理性の中には全たい眞理が刻み彫けられてゐると、理性萬能主義を主張する唯理論者が起つた。是は近代人の誇とする一種の迷信である、レッシングは斷じて之を取らなかつた。人が完全の眞として認めたものも、復ゝ之を調べなければならぬ、色々の疑をも起して來て探求せねばならぬ、中々絕對の眞理に到達し得るものではない。是には一面疑惑に閉ざゝるゝ憂も有るが、又尊い信仰に伴ふ健なる望がある。信仰は未だ見ざる者を眞とするものである。

凡て淺慮の人は忽にして完全な眞理に達したと思ふ。科學が盛になれば、早や科學萬能主義になる。此の傾向は昔から續いて來た一の迷である。絕對の眞理は獨り神のものとしたレッシングの心は、眞に信仰の精神其の儘を言ひ表はした謙讓の宗敎的精神である。一躍して完全に達し得られない、しかも日日之れに近づき進む、其の長い精進の人生が寔に健なる尊い意義を有する。直に完全を握れ

ば人生は短かくして滿足し、怠慢に陷り易い。摑んだと思ふもの聽て不完全であるからして、人生は長き旅行にして、且つ面白いのである。早く眞理を摑んだとして止まれば、人生は極めて淺薄、夫こそ小成に安ずる外はない。併し吾々には所謂滿足がないから、勉强もし、且つ働らきもする。こゝに健全なる能力が宿つて居る。一般に基督教は宗教として滿足平安を與ふるものだと謂ふが、實は中々與へないのである。我が基督教は不滿足の中に滿足を示すもので。最も善く人生を表はして居る。古の豫言者が「天國は近づけり」と野に呼ばゝつたが、其の「近づけり」に無限の意味がある。こゝに多大の將來が存し、永遠の望が孕で居る。既に到來したものでもなく、又前途遼遠のものでもない。「時期は滿てり、神の國は近けり、爾曹悔改めて福音を信ぜよ」といふ基督の宣言は更に面白い。天國は將來にしてまた現在である、入口もあれば、奧行もある。又神の國は爾曹の衷に在りとは、最も尊い實驗である。神人父子の境界には階段がある。基督の在世中、弟子達は大望を懷いてゐたが、彼の十字架の爲に大頓挫が來た。彼等は殆んど復び起つ可らざる悲境に陷つた。而も驚ろくべき復活の大事件は起つたのである。一度失つたと思つ

た望が、再び彼等の中に復活した。而して彼等の欣喜は意想外であつた。斯くて握つたと思つたキリストは、復天高く神の右に昇られた。併し爰に至つて最早永久の望が彼等を活かして來た。彼等は再び基督の來臨を信じて疑はず、十字架を執つて戰ふ事が出來た。

保羅の如きは非常に高い精神上の實驗をかちえて、罪は悉く赦されて神と和らぎ、平安は日々に加はつた。彼も初めは此平安が何よりも欲しかつたらう、噫我困苦人なる哉と、悲慘の聲を發した、彼には唯平安のみが苦悶の焔を消す水であつた。

彼は素より自ら欺く事の出來ない人であつた。われ願ふ所の善は之を行はず、反て願はざる所の惡は之を行へりといつて、深き人生矛盾の苦痛を叫んだ。しかも彼は基督に由つて神に感謝した。爰に保羅は心の落ち付き所を見出したとはいふものの、猶ほ未だ此の平安は最後の滿足ではなかつた。彼は更らに神の榮を望んで欣をなす所の望を持つて居つたが、そこには誠に尊い心根がある。神の榮光を望んで其の中に入り、其の榮光に與かるべき信仰の望を懷いて、欣喜を爲して進む、其の望の生活に此の人生の尊い所以が知らるゝのである。我儕は荏弱くし

て艱難の爲め惱む事あると雖も、聖靈みづから言がたきの慨歎を以て我儕の爲めに祈れるを知るが故に、我儕が救を得る望の欣喜は尠しも減ずる筈が莫い。即ち患難にも欣喜を爲すは是が爲めである。

　若し人が突然にも患難に欣喜を爲すと言へば、夫は人情を離れた事の樣に聞ゆる。併し保羅が謂ふ所の欣喜は無理にも喜ばんとする我慢から出たものではない、何となれば患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、そして練達は希望を生ずるからである。茲にある忍耐は只の心棒強いといふのでなくして、練達を生む忍耐である。人生は唯耐へ忍ぶばかりとすれば、夫は苦痛より外はない。然しながら忍耐が練達をかちうれば、忍耐の功亦侮るべからず、蓋し練達に由りて人格が研かるゝ。故に先には患難と見しものが、聽て患難でなく成る。患難の中に希望が孕んでくる、此の希望こそ實に神の榮光に入らんとの健なる希望である。此希望は常に我が心にそゝぐ神の愛によつて養はる。宗敎的實驗にも色々の階段が在る、しかも此の希望は之を一貫してゐる。保羅は此の消息を言ひ表はして、「然れど望を見ば亦望なし、旣に見る所ろの者は何で尙これを望んや」といつて居る。山上の

垂訓に於ける心の貧しき者の天國と、義の爲に責らるゝ者の天國との間には、多くの段階が存して居る。前者は未だ神の國の入口に過ぎない。故に猶も神に近づき奉らんとする望に動されて、深く進み行かんと努むるのである。

人生は道行である、未だ不完全である。其處に人の生き甲斐が有る。人生は希望の生涯である。希望の存する所には生命が働らいてゐる、活きた經驗が積まれつゝある。最初は裸一貫の人が無一文の所から、稼いで數萬の貯蓄を作り、更らに十萬百萬と增加して行く人の經驗には、慥かに活きた希望が輝いてゐる。其の如く靈界の貯蓄に於ても、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、彌々以て大丈夫と成つて行く。

人生は何處までも不完全である。しかし此處に進步の生活あるを忘れてはならぬ。若し現實の人生がそのまゝ吾人の生涯の初であり、又終であるならば、夫は苦痛であり、又不幸と言はねばならぬ。昔歐洲に淺薄なる樂天主義が唱へられ、人生は與し易しと大安心を懷いた。然るに思ひ懸けもなく、西班牙半島に大海嘯が起つて、瞬間の中に驚ろくべき人が捲き逡はれた。於是彼等樂天家も忽焉として

醒め、人生の悲哀と無常とを感じた。若し人が將來を望む事を得なかつたならば、奮鬪しても高い生活は取れない、奮鬪しても自由の生活に入られないならば、人生は奴隷の生活か、又は大矛盾の間に苦む生涯である。

若し封建時代の婦人のやうに、自分は女だとして何も彼も諦めて居れば、或は夫で濟むかも知れぬ。併し今日は最早不可能である。妻が夫の惡事を公にして、而も憚らぬといふ樣な時代に成つて來た。實に個人相當の權利を認むる時代とはなつた。この不滿足の中に人心の進歩が有り、高き生活の理想が生まれて來る。

保羅の謂ふ如く、神の嫡子と一體たらんとする望は、人の理想の最も尊きものである。斯る高き理想の希望を有するものは、眞に不滿足の中に希望の生涯を送るのである。曾ては虛榮心を滿足せしめて、人生を樂しんだ人も、基督者となつては最早昔の虛榮心があさましく成る。又嘗ては吾に罪惡なし、吾は潔白であると誇つた者も、我が罪を赦し給へと日々祈らねばならぬ樣に成る。又昨日は我が良心に責められなかつた君子も、今日は其の苛責に苦しめらるゝやうになる。此の如く基督者に成るといふ事は、決して阿片を飲んで陶然として醉ふ心持ではない。

恐るべき患難がある、しかも之れは忍耐力を增す方便となり、練達を積む道場となり、從つて不撓の希望がそれより生れてくる。この希望に導かれて、人生は聖化せらるゝのである。

封建の道德は上を看るな、足る事を知れと敎へた、是は佛敎の敎も贊成して居つた。基督敎も旨と之を傳へた時代もあつたが、最早之を過去に葬つて、近代は之を顚倒して足る事を知るな、上を見よといふ樣に成つて來た。上を望んで進んで行け、どれ程の大學者と成らうとも、大學者と思ふな、進んで行ける所まで行け、安心して留まつてはならぬ、是が今日基督敎の與ふる望の敎である。此の望には勿論努力が常に伴うて居る。故に古來東洋流に靜的に育てられた人には、苦痛を增す事に成る、寧ろ悠々として靜かに蓮花臺に往生せん事を欲する傾がある。然し此の平安は墓の平安である。吾々は斯る靜的平安よりも寧ろ患難ある動的希望の生涯を冀ひ、神の嗣子の冠を得る望の平安を有し、不斷の努力を要する生活を撰ぶ。われ「平安を爾曹に遺す、我平安を爾曹に予ふ、我予ふる所は世の予る所の如きに非ず」と言ひ遺して去つた基督は奮鬪中の平安を擇んだ。「爾曹懼るゝ勿れ我すでに

世に勝てり」との離別の一言、我等が執るべき希望の光明である。

我儕が宗教上の實驗では、神の様に成らねば滿足が得られない、我儕は永久に向つて進んで行くを忘れてはならぬ、神の事業は永久に駭くべき發展を爲しつゝある。我儕が生活も發展しつゝある、神の事業と偕に進む望を有する。吾人が過去の十年、又は十五年、又は三十年、何ぞそれ淺薄なる。今日猶ほも上へ〳〵と進むのだ。絕對の眞理を得たと思ふ人は禍なるかな。彼は恐るべき絕壁に臨みつゝある。

　我々はレッシングと共に永久眞理を探求するの人たるを神に感謝する、同時に不完全な不滿足な人生を呪咀ふ至愚と不敬虔とを免るゝ事を喜ぶ。

　神は我儕を捉へ、高きに至らしめんと健なる望を與へ給ふ。吾人はこの希望の中に生活し、永久に活きた經驗の積まるゝ事を神に感謝せねばならぬ。保羅が信望愛として、望を三德の一とかぞへたことは、實に能く高尙なる宗教の生活を歌うたものである。

利己主義の自滅

使徒パウロが熱心なる猶太敎の信者であつたに拘はらず、ダマスコの途上基督に依つて眼覺めて遂に其信者となり、基督敎を猶太敎の羈絆から脫して、廣く羅馬の天下に傳へ、以て世界の宗敎たるに至らしめたのは、深き神の攝理の存する事と思ふ。宗敎も世界的宗敎となるのは、餘程むづかしい事である。基督時代に於て猶太敎には三派あつたが、此等の敎派を調べて見ると、一種の利己である。サドカイ派の如きパリサイ派の如きは云ふ迄もなく、セツセネ派の如き神秘に隱れて人知らず貴い慰安を求めたものも、亦利己の外に出かねて居る。其處へ基督が出て、之を根底から打ち破り、即ち利己主義は罪なりと斷じた。これは實に非凡の見識であつて、深い根底を照らし破つて居る。罪惡の根底は獨り異邦人にばかりあるのではない。パリサイと云ふ勿れ、サドカイと云ふ勿れ、罪は悉く人心の奧に秘んで居る。當時の猶太人は自を正しとして、異邦人を罪ある者と見た。けれども自ら正しとした人の中にも利己もあり、汚穢もある故に、罪惡の見地から見ると、人の

子は皆罪人であると云ふ世界的の考になる事が出來る。此民族に罪はない、彼の民族に罪はあると云ふ樣な皮相觀ではない、民族論ではない、國民論ではない。彼にも我にも共に惱みの種なる根底の意識を捕へ來つて、此處に人々相憐む博愛の基礎を建てたのである。如斯平等の考は基督以前にも多少無かつたではないが、さりとてパウロが古詩を引いて「誌して義人なし、一人もあるなし」と云ひ、或は「善をなす者なし、一人もあるなし」と高調した時に、驚魂駭魄時人をして殆んど端睨に遑あらざらしめたのは無理もない。

勿論多き人の中には義人と呼ばれ善人と呼ばるゝ者も尠くはない。けれどもそれは皆相對の話で、雲幽かなる至高の點よりすれば、五十歩百歩の違である。富士の高嶺に攀ぢて眺むると、白雲に漂ふ函根の山は眼下遙かなる裾野にかゝつて居る。況んや限りなき神の眼に映ずる我々は誠に果敢なき罪の身であらう、故に孔子も「義を聞いて移る能はず、不善改むる能はず」と歎かれた、釋迦の大悟は暫らく置くが、彼處迄辿りつくには、隨分骨が折れた事と思ふ。釋迦も佛になつたと云ふだけなら、利己は免れぬ。悟つてから正覺を得た嬉しさ喜ばしさに充たされて、鳴

呼之を離れたくないと云ふので、菩提樹の下に止まつたなら、未だ充分ではない。けれども涅槃の境を抛つて、更に衆生濟度に出た所には云ふ可らざる貴い所がある。パウロは一面に於て有ゆる人を罪の子と見た。併し己を棄てゝ神に立ち返へるに非ざれば、神の人たるを得ないと主張するに當つては、彼は既は利己ではない。一大勇猛心を起して神を愛する所は、一面から云ふと非常な個人的のもので民族にも團體にも拘らぬが、其處には最も大きい世界的なる、否な宇宙的なる神を見出して居る。即ち己を殺して神に生きる所に、吾人の生命が存するのである。けれども、人間世界の狀態は引き下つて考へて見ると、利己は或程度迄は必要だと思はるゝ場合がある。社會的に行くには自己がなければならぬものかどうか。斯云ふ事は道に志す者の一大疑問である。「己」は家庭に於て見れば、親に對し、子に對し、兄弟に對する。夫婦は一體と云ふが、それでも分つて云ふ時には、彼と我とは對照せざるを得ない。更に之を大きく見れば、內國と外國との關係となる。獨り形ある者を分つて、彼此相分つのみならず。全能なる神に對しても一個の我を立てんとするのが人の本性である。故に時として之とも爭はねばならぬ事がある。

併し之より更に大なる物が出る時には、勢ひ亡ぼさざるを得ない。何となれば我々の心の中には、己より大なるものが動いて居て、一度天來の妙機に接すれば、滾々として泉の如く湧き出るからである。我々は之を目して心の中に神宿ると云ふ。それは西洋人も云はぬではないが、東洋人殊に日本人は早く此の點を云つて見やうとする。それは何故かと云ふに、吾人は儒教を通し、佛教を通し、幾千年來修養に修養を重ねたからである。然るに不思議に感ぜらるゝは、一方に神と云ひ佛と云ふが如き宇宙的のものを自覺し乍ら、一方には又夫婦と衝突し、國家と衝突し、人類と衝突することである。これは非常な矛盾の樣に感ぜらる。小さい〳〵物があると同時に、無限宏大のものがあると云ふ。如斯物をも撞着と云はないならば、何をか撞着と云ふ事が出來やう。一應は恁うも思はるゝ。けれども人生の面白い所は此處にある。喜劇も悲劇も此の反對の宿る所にある。彼と此と衝突し矛盾する所を見るは實に堪らない。一方には天地に普からんとする博愛の心あり、人道の大業あり、我は之を慕ひ慕うて握らうとするに、悲しい哉風屡雲を誘うて之を蔽はんとする。右せんか左せんか、十字街頭日暮れて道猶遠きが如く、心ある者を

して眞に血の思をなさしむる。戯曲小説乃至は淨瑠璃等に於て種々の活劇となつて、現はれて居るものは即ちこれである。或時は孝と云ふ形で我と衝突する。その時は親は非常に高いもので、子は絶對に服從せなければならぬ。又或時は忠と云ふ語が無限の意味で出て來る事がある。その時は親に盡す孝も私情となつて、之と衝突せざるを得ない。日本では實に孝を私として殺した、そうして忠を大なるものと見た。即ち主君を國家の大公人と見て、こゝに忠孝の論は定まつた。視よ、中には其子が此世の思ひ出に、最後の別を告げ來たのを見て、忠義に缺くるとなし、自殺した母もある。母が生きて居ては、忠は遂げられぬ。孝の念慮があつては、後髮が引かるゝであらうと云ふので、潔く刄に臥した。如斯は誠に壯烈の極みであつて、例へば衆草奇姿を沒し、凝霜異類を殪すの時、卓然として獨り高枝を見るが如き感がある。百年二百年の昔に於て忠孝は時として衝突を免れぬと思はれたのは是非もない、低く考へれば、忠孝が衝突するのみならず、忠君と愛國とも衝突する樣に考へられた。今は幸にして天下事なく、誰も衝突するなどゝは夢更に思はぬが、若し一朝事ある時には然うとばかりは云へぬ。忠君を國家から離れて考

ふると、主君は孤獨の一人のみとなる。故に忠と云うて腸を絞つた義烈の精神も、一歩を過ると國家と衝突するに至る。愛國は結構なものである。誰しも然うなければならぬ。けれども世界人類なる大きなものと關係して見ないならば、何物かと衝突せないとも限らない。或人は愛國心と世界主義とはどこ〳〵迄も衝突すると考へる。果して然らば、愛國其物は自滅せなければならぬ。これは近頃の大問題である。ハルピンの慘事の如きものを見ても分る、我伊藤公を殺した者は勇敢なる者である。決して臆病者ではない。何が彼等をして大膽ならしめたか。何が彼等をして傍若無人ならしめたか。彼等は自ら忠臣義士と思つたに違ひない。故に心にはちつとも恥ぢなかつただらう。之を日本人に懷いて、利を得やうとするものに比すれば、雲泥の相違がある。暗殺を是認するのではないが、彼等が俗輩の利己主義より一歩も二歩も上進して居るを認る。利己主義では義烈の精神は出て來ない。インスピレーションは出て來ない。然るに之に反して生命を拋げ出して盡すと云ふと、時には我知らず力が湧いて來る。顧みて竊に思ふと、日本開國のとき西洋人を殺したも矢張この種の人であつた。神州の士を洋夷に汚

さしむる勿れと、叫んだのは、僅に五十年前の事である。伊公を殺した韓人の如きは、正に此の如き忠臣義士であつたらう。けれども彼等の愛國心は世界的意志に背く。我日本に於ても攘夷説と開國論との大衝突が演せられた。開國論が勝をしめたのは我國の幸にして今日ある所以である。若し地を換へて今日迄攘夷で押し通したなら、其結果はどうであつたらう。攘夷は開國に比して利己である。世界に持ち出せば、愛國だけでは利己たるを免れない。朝鮮の運命を開くにもこの世界主義によらねばならぬ。所謂忠臣義士も世界の利益に思ひ當らないと、利己主義に陷る。王政維新の時にも幕府方が德川家ばかりを思つて居つて、日本の大勢を思はなかつたら、その忠義は一私事となつてしまつたらう。しかるに帝國の事を考へ干戈を止めたのは偉い。太政官を組織するに當つて、時の政府が榎本の如き、勝の如き賊であつた人物を入れたのも流石である。今日之を直に朝鮮人に當て嵌める譯には行かぬが、朝鮮人は世界の形勢にも思ひ及ぼさず、偏にその獨立の事のみ考へたならば、其愛國は利己主義となる。國を開いて積極的に行れば、一時は國を賣るとか何とか云はれるか知れぬが、此の如き勇斷は獨り世界の爲に

益となるのみならず、また自國の運命を開く所以となる。そうする時は亡ぼさる可きものも亦振興するのである。スコットンランドがイングランドと戰つて軍利あらず、遂に結んで一國となつた時の資格は得らるゝと思ふ。若し夫れ朝鮮に一人の勝伯があるならば、日本に西鄕のない筈はない。昔は城を枕にして打死することを唯一の忠と思つた時代もある。けれどもそれは唯一の仕方ではない。基督はユダヤの滅亡を憂ひ、聲を擧げて傳道されたが、彼は叫んで、云はれた、人なんぢの右の頰を打たば亦左の頰をも廻らして之を向けよと。當時基督の議論は愛國に背くとして、排斥せられた。ユダヤ人はエルサレム城を枕にして亡びた。彼のパールコッパの如きは愛國者として崇拜せられた。けれども之れは我執的愛國心であつて、之れが爲に國家は反つて滅亡した。個人に於ても同樣である。諺に親不孝の子は永くいきないと云ふが、社會の爲に盡さない個人が永く保つ筈はない。近頃我日本の青年にインスピレーションの無い事を見て歎はしく思ふ。何物が彼等をして血湧き肉躍らしめざるか。生活の事ばかり考へて居るものにインスピレーションの起る筈はない。今の青年に元氣がないと云ふのは、獨り老人の批

評ではない。彼等は利己主義である。學問するにも自分、修養するにも自分、何にもかも自分ならざるはない。獨り男子ばかりではなく、女子も亦利己主義である、彼等が嫁に行くにも、第一に考へるのは己の幸福である。幸福を考へるのは固より惡い事ではない、それ丈では何等價値あるものではない。忠臣義士の間にある結婚を見ると、必ずしも幸福ではない。否これが爲に外の見る眼もいぢらしき程、悲慘な目に出遭つて居る。けれども斯の如き義烈なる精神を有し、斯の如き忠勇なる思を抱く大丈夫を夫として仕へる事を光榮としてをる。自分が手に取る盃は緣の結びであるが、同時に別れの水盃である。けれども斯る人と夫婦となり、夫と呼び妻と呼ばるゝならば、よしや共棲する事の出來ずとも、遺憾などとは云うて居らぬ。凛潙たる覺悟を以て短劍を抱いて嫁したのである。今日斯の如き精神ある女子が何處にあるか。勿論我々は今の青年が昔ながらの思想を以て動くものとは思はない。けれども世界の爲に盡すと云ふ見識が開いて來なければならぬ。佛蘭西は今日士氣振はないやうなれども、其佛蘭西にさへ日本の貴族などの想像されぬ事がある。立派な家の令孃が凡ての樂しみを抛つて故鄉を離れ、癩病

島に行つて、終生看護に盡す者もある。救世軍に入つてみすぼらしい風をして、下等社會の間を廻つて、自分が受けた施を頒て居る者もある。金剛石の光を捨て、勞働者の中へ入る者も尠くない。日本にそんな令孃が何人ある。遠い地は暫く置いて、一葦帶水の朝鮮に行き、無學の者を敎ふる者何人ある。腹の立つのを抑へ涙を以て彼等を諭す者が何人ある。青年のうちに野心家はある、肱ばかり張つて爭つて居る人はある。けれども世界的事業に一身を捧ぐる者がどれ丈あるか。特に歐米を褒めるではないが、何千萬の金を出して道の爲に捧ぐる者もあれば、又言語も分らぬ土地に入つて、一心に神の旨を傳へんとする人々を見ては、吾々賞嘆の聲を放たざるを得ない。殊に妙齡の婦人にして名譽を棄て、地位を棄て、亞弗利加の暗黑界に入つて、人にも知られず、さびしく終る者を見ては、我々日本人は恥ぢ入らざるを得ない、思ふに日本人に斯の如きインスピレーションの出ないのは、世界人類を思ふ大精神が缺けて居るからである。博愛の精神は日本を救ふ精神である。何があつても自分の國だけの事を考ふるなら、正しく國民的罪惡である。我々は天地神明に祈りて、何なりとも世界に功獻する大なる事業をなさねばならぬ。

彼の利己主義の如きは何の形式を取るも、到底自滅を免るゝ外はない。民族を雄大ならしめ國家を盛大ならしむる活火ではない。利己主義は遂に自殺に終る。吾々は常により大なるものゝ中に生きて居らねばならぬ。

信仰と國民の品性

國民の性格と國民の信仰とは切り離す可らざる深い關係のあるもので、國民の性格に伴うて信仰が起つたものか、又は信仰が基となつて國民の性格が作られたものか、其區別が分らぬ程關係が深い。歐羅巴諸國を見ても、其國民の性格と信仰が結ばれて居る事は著しいものである。信仰は同じ信仰で、國民の性格が違ふとか、性格は同じだが信仰が違ふとか云ふものは無い。之を東洋に見るに、佛敎の信仰に依て磨ける國民の性格と、マホメットの信仰に依れる國民の性格とは餘程違ふ、恰も宗敎の異れる如く、異つて居る。又基督敎國々民の性格と其他の國民の性格とも同樣に違ふ。歐洲各國は大抵基督敎であるが、同じ基督敎を奉じて居ても、佛蘭西、伊太利、英、獨皆違ふ。これは啻に宗派が別であると云ふ計りでなく、同時に

宗派は國民の差別であるとも云へる。希臘教は露西亞に、天主教は伊太利、佛蘭西に、プロテスタント教は英、獨に發達した。其經過を考へて見ると、先天的に定まれるものではないかと思ふ。嘗つてエマーソンが國教と民立教との信仰の趣の異つて居るのを見て、英には二つの人種がある樣だと云うたが、恰もその言の如く違ふ、教師を見ても服裝が一目して分る程違ふ。服裝ばかりでなく、顏が違ふ、と云ふ樣に相違を生じて來る。其相違は民族の性格にも依るが、生長發展の程度にも依る、恐くは程度問題かと思ふ。歐羅巴も一時は凡て天主教となつたが、三百年前に至つてプロテスタント教が勃興した。而して、今や天主教の人民がプロテスタント主義になりつゝある。之は見逃す可らざる大事實である。思ふに信仰の發展は終に此に來らざるを得ないのであらう。然るに中にはプロテスタント教より天主教に行く人もあるが、それは極く少數で、大體に於て今日はプロテスタント教が潮の如く汪溢せる時代である。

若し宇宙人生の無常に心を注いで、此世は果敢ないものだ、朝の紅顏夕には白骨となると云ふ樣な事ばかり考へる國民は、物事を爲すに怎うするであらうか、果し

て永久的であらうか。然らば信仰にさからうのである。盛者必衰と云ふ事を兎角念頭に置いて居るものは、如何なる事業をやるにせよ、永久的の大事業を爲す事は出來ない。何故なら、無常を人生と觀ずる人の覺悟は變に處する道であつて、夜半の嵐が何時吹き寄せて、花を散すやら分らぬ、其時かくせねばならぬ、と云ふ方面のみ修養する。故に一番適切に來るものは死である。死際に狼狽してはならぬ、恨んではならぬ、と一々其場合の態度を心掛ける。それも大切の事である。無常觀を起さしむる事は宗教に於ては缺く可らざる事である。殊に日本の如き天變地異が屢起る處に於ては其必要もある。地震などは微なるものを合すれば、日として無い日はない。或外人が余の家を訪れた時、地震が起つた。すると其外人は吃驚して顏色を變へた。所が彼は信仰が無いと思はれてはならぬと考へたと見えて、恐い譯ではない、我國にはかやうな事はないものだからと云譯をした事がある。去年の水害の如き、實に酸鼻の極である。暑を避けんとして、海山に行つた者迄が流されたと云ふ。天地の變は豫測す可らざるものである。萬事が斯變轉窮り無き中に居ると、修養の方法も兎角無常の方に奔る。併しそれでは何を經營し

ても、永久に續く事はない。例へば、家を建てるにしても、流されるに違ひないと思ふときは、堅固な物を作る氣になれぬ。かく無常の風に委せんとする者の平生は餘りに見るべきものも無いやうだが、スハ事起れりといふときは、すばらしい事をする。其立ち働は恰も戰士の如くである。

之に引き換へて、永久的の信仰に思を注ぐものは變に處するよりも、常に處することを考へる。無常は何處の宗敎にもある、舊約にも、新約にもある。パウロなども一面無常を觀じて居る。買ふ者は買はざる如く、喜ぶ者は喜ばざる如く、持つ者は持たざる者の如し、そは此世の事早く過ぐればなりといつて居る。流石彼にも悲哀があつたらしい。けれども最も大切なものは變る所でなく、永久に續く所である。詩にヱホバはわが巖、わが城、われを救ふ者、わがより賴む神、わが堅固なるいはほ、わが盾、わがすくひの角、わがたかき櫓なりと歌うたのは、神は永遠に變り給はぬと云ふ深き信仰である。よし天地は變るとも、神は變らぬと云ふ信仰である。さらば神を信ずるものゝ事業は永久に續く筈である。惡人の成せる事は亡ぶるが、義人の成せる所は、永久に續くといふ信仰が、その事業に及ぼす影響は察するこ

と六ヶ敷ない。

此信仰を以て養成せられたものは、イスラエル民族である。イスラエル國は大國の間に挾つて居た小國である。或る時はバビロンに破られ、或る時は埃及に征せられ、大帝國の起る毎に彼に就き、此に從ひ、基督の死後七十年に至つて終に滅亡したのである、實に治亂興廢常なき國であつた。けれども此民族には動かす可らざる信仰があつた。それは何に基くかと云ふと、變りなきエホバの神を信じて、神の道は正義公道であると云ふ點であつた。而して彼等がその思想通りの國を成す事の出來ないのは、民族が正義公道を十分に守らないからと思つて居つた、若し夫れ、此民族が正義公道を守つたら、必ず永久に動かぬ國を建ることが出來ると信じて居つた。イスラエル民族は不幸にして國を失ひ、四方に流離して居つたが、その國民的性格は之を失はない。嘗つて此民族を征服したベルシャ、バビロン、埃及等の大國が何れも滅亡して、その存在を失つたときに、獨りイスラエル民族は歐洲人の中に立ち混り、凜乎として動かす可らざる性格を持つて居る。或人は之を穢多の如く思ふだらうが、然うではない。彼等の中には偉い力がある。此民族より

ビーコンスフヰールドも出た、スピノザも出た、而して獨逸の大學敎授の中には今も多くのイスラエル人がある、其處の大臣、此處の宰相にも多くある。北米の如き、銀行と云ふ銀行は彼等が持つて居る。コロンビヤ大學の敎授の如きに至ては、イスラエル人ならざるものは甚だ尠い。多くの人々は彼等を賤めてヂュウと云つたが、しかしスピノザを出し、メンデルゾーンを出した民族には他の國民の及ばざる特長がある。尤も利に賢い所はあるが、併しそれは止を得ぬ。既に亡國の民となつて、土地所有を失つた以上、金を賴む外に道はない。けれども彼等を金だけの人間と思ふのは誤つて居る。彼等は金以上を知つて居る。紐育四百萬の市民中比較的品行の善いのはイスラエル民族であるといふ。彼等は又昔から健康で病氣も尠い。その體格の健全なるは、品行方正である爲と認めねばならぬ。我日本人の如き、品行方正ならば、まだ〳〵健康になれる。それを壞はしてるのは、耻づ可き行が多いからである。品行と體格とは非常な關係がある。健康な者は繁殖力が强い。男子も品行善く、女子も品行が善いなら、其間に出來る子供は健全である。イスラエル人の神は永遠限りなき神である、宇宙にあるものゝ中、公義正道なる者

は神必ず之を守り給ふが故に、此公義正道に合はぬ以上は如何に祈り願ふとも、神明の加護はないものと信じて居る。この信念は亦大に學ばねばならぬ。

此點は天主教などゝ趣を異にする。天主教では權威を以て人を壓しつける。從つて人民の安心立命は教會に委せてある。彼等は教會と云ふ助船に乘つて居る。罪を犯しても、教會に行つて告白すれば、それで赦される。甚しきは女子が夫にも云はれぬ不行蹟をなしても、僧侶からその罪を赦されたと云はるれば、夫の前にでもその罪は消えたと思ふ者もある。故に天主教を奉ずる民族の性格には顯然として他力信心の面影が見ゆる。ラテン民族の女は思慮乏しくして、一體に饒舌る。アングロサキソン民族の女とは大に違ふのである。我にある所のものを自覺させずして、形式的に外から壓しつけられた信仰は、云はゞ印袢纏を着て居る樣なもので、着て居る間だけは、會社の雇人ともなり、官省の小使ともなれる。けれどもそれを脱げば、何の關係もないものである。或時去る基督教の學校に行つて見ると、仕事師であつたらうか、「聖」と云ふ字を大きく染抜いた印袢纏を着て居る者が三四人も居つた。この聖の字の袢纏が餘りに目立ちて滑稽に感ぜられた。外

から規律を以て押しつけた信仰は決して人格を高からしめない。内なる人の止むに止まれぬ聲に應じ、奮然として起ち上らしむる所に、基督の使命がある。宗敎の一面は己の中に動かす可ざる偉いものを認むるのである。世の中には洗禮を受けたこともあるが、近頃クリスチャンは廢めてしまつたと云ふ者がある。それは信者となつたのでなくして、印袢纏を着たのである。我の中に永遠限りなき道があり、公道があり、正義がありと自覺すべき筈なるに、こゝに氣附かずして、外の權威に依つて動くとは情ない事である。

天の神は我が公義正道の源、眞の法則の根底である。こゝに悟入するが基督敎である。然れどもこの自主自由の靈よりも却つて規則が欲しくなる人が多い。この點より見れば、日本人の信仰は淺いと云はざるを得ない。無常觀に責められ、地獄極樂に責められ、因果應報に縛られて、善い事をした陋習が中々脱せられぬと見ゆる。昔の武士道とても主君の申付けとて相互に壓し附けた樣な所が見ゆる。自動的に自己の中に永遠の力を認めて、我に明なる道あるを自信するでなくては、天主敎の懺悔では斷じていかぬ。心から悔いて、進んで行かうと決心するのでな

くば、良心は發育しない。

儒敎に養はれ、佛敎に陶冶せられたる日本人の性格は、基督の精神に來て根底より變らねばならぬ。日本には指を屈すれば偉い人がある。藤樹の如き、仁齋の如き、無常や天堂地獄で縛られた人ではない。公義正道を認めて起つた。けれどもそれは一般の人民の宗敎とはなつて居らない。我々は此等の儒者などに存した信仰を基礎とせねばならぬ。啻に死の覺悟ばかりでなく、日常に處する道を考へねばならぬ。死は二度は無い。一度か無い死の事を考ふるよりも、每日〳〵怎うして生くるかと、それを考へる必要がある。赤穗義士などの中には、平常の品行は之を恣にして、まさかの時に人を驚かして居るのがある。然う云ふ人を見て偉いと云ふはいまだしだ。平常は眠つて居て、唯事ある時毅然として起つといふばかりではいかぬ。それも惡くないが、一小方面の眞理に外ならぬ。何ぞ戰を待つ。何ぞ亂を待つ。我々人間は朝に夕に君子たるの修養を怠つてはならぬ。

無常轉變の宗敎では大事業は出來ない。商賣を初むれば幾年ならずして必ず廢業をするであらう、萬事一時的となるだらう。吾々日本の移り變り易き弊習は、

從來の信仰が無常觀に即した爲と思はれる。若し永遠の神が我々と共に働き給ふと信ずるならば、其の成す所は永久的となる筈である。形は變るとも魂は變らぬと信ずるならば、其處には精神を以て貫く仕事がある筈である。日本に忠君の精神が無かつたなら、浮草の如く流轉したに違ひない。けれども幸にして萬世の皇室を仰いで、之に仕へた爲に、一方には無常を觀じながら、他方に不朽の精神を宿した。正成死するに當つて、七度生れて國賊を亡さんと云うたと傳へられて居る。事實果して然るや否や分らぬが、善く忠君の思想を現はして居ると思ふ。此心は猶太人に現はれし正義公道の精神と結ぶ事の出來る所である。基督は死した。けれども其心情には我は死ないと云ふ確信があつた。從つてその事業も滅しないと云ふ精神があつた。我三日の後、甦る可しと云ふ所には、基督教の大信仰が刻まれて居る。

我が日本人は祖先の旨としたる義烈の精神を奮ひ起して、永久の信仰に入らねばならぬ。今日の青年には公義正道に起つと云ふ意氣が足らない。此世の中に出るには惡い事もせねばならぬと思ふ者が少くない。如斯弊風は根底より打ち

破らねばならぬ。倒れても善い、一歩も讓らずして正義公道を貫かねばならぬ。この正義公道を旨とする信念が日本人を支配するに至らば、日本人の性格はより多く倫理的になるを疑はない。たゞ武士に限られた性格が更に潔められて、民族一般の性格となるであらう。プロテスタント敎が果して日本人の宗敎となるや否やを一大疑問とする人もあらうが、吾人の見る所によれば、日本民族の興亡盛衰は、倫理的宗敎がその勢力を有するや否やにある。此强大なる意志の力を要求する宗敎が、日本人の心底にその根を深うすること不可能ならば、日本民族は自主自立の性格を贏ち得ないものと斷定せねばならぬ。日本民族は果してプロテスタント敎を信奉し得ぬであらうか。吾人は日本民族を信するが故に、プロテスタント敎の自力主義を我同胞の中に鼓吹せんと欲するのである。

新道德の基礎

今日吾々は非常なる時代に遭遇して居る。確かに日本の精神界に對して一大解決を與へねばならぬ狀態になつて來た。基督敎が抑々日本人の中に信仰せら

るゝやうに成つた其時から、斯うなるものと考へられた事が、近頃に成つて愈々明かになりつゝある。夫は外の事でない、日本の精神界の狀態が甚だ困難に成つて來た所である。是は當然斯く成るべき徑路であつて、今更止むを得ない次第である。早く謂へば日本今日の敎育なり、法律制度なり、悉く歐米に學んだ所である。從つて日本は全く新らしい國に成つて居る。併し此の新らしい日本も一面精神界に立入つて見ると、未だ〳〵昔其儘の姿でやつて居る。形の上では西洋其儘であるが、精神界に於ては一向通はぬ所がある。故に今日のやうに大なる矛盾と衝突とが出來た時代はない。而も此の點に深く心付く人が極めて少ないのは歎はしい。唯精神だけは日本の昔の儘にして、西洋の物質的文明のみを容れやうとするから、此の衝突が起る。今日の文明は物質の文明だと言ふが、一體文明といふものは、單に物質だけでは進んで行くものでない。常に精神界と共に發展して行くものである。故に西洋の物質的の文明の背景には、偉大なる精神界の流が、黑潮のやうに非常の壓力を以て流れて居る。然るに日本人は其の本流たる道德と宗敎とを防がんと工夫して居る。故に其等の人々の爲す所を見ると、若い人々の眼底

には凡て虚僞のやうに映ずる。故に青年は自然反抗もして見たくも成る。人間に起る自然の儘の考や、思ふたまゝの事を、其まゝに爲し遂げて行かうとする人には、日本の昔の義理立ては自分を欺く、虚事のやうに思はるゝ時勢となつた、非常な變化と謂はねばならぬ。斯る思想が廣く青年男女の間に行はるゝ程に、我が日本の新らしい精神界は違つて來た。

是は一面尤な所と云はねばならぬ。或る人々は眞に虚事、をして居るのである。腹の底から出るのでもなくして、仕方なしに外から强ひられて、形式でやつてゐる事が澤山ある。だから虚僞だといふ。自らを欺くものだといふ。故に昔の道德は片端から僞だ、虚事だと疑惑する人が出る。それかといつて、自然の事、大膽に遠慮なく思つた通り、欲する如く、感じたまゝを行ふと、夫れは〳〵何とも言はれない卑しい墮落の狀態と成る。すると忽ち家庭の破壞となり、國家の存亡にも係るので、壓制的に上から之を抑へやうとする。極端にも祖先崇拜の如き幼稚な仕方を以て弊風を矯めやうとする。日本の精神界は彌々混亂に陷るのである。

爰に我が基督敎はその使命を帶びて、傳播しつゝあるが、さてその使命といふは

其の儀式や制度を日本に傳へる點でない、更らに深い重大なるものである、即ち日本の精神界を新たにすることである。その日本に貢獻するものは明確なる良心と深遠なる崇敬心とを發揮することである。基督がユダヤの元老院議員ニコデモに向つて「人若し新たに生れずば神の國に入ること能はず」と敎へられたが、其新しい人を作ることが基督敎の使命である。

今日の如き動搖定まり無き道德は如何にしてその動かぬ基礎を有することができやうか。之は倫理學の能くする所ではない。新道德の基礎は靈に於て甦つた、潔められた精神を有する新人其人である。斯る人々の衷に日本道德の基礎は建られねばならぬ。忠孝も封建時代の忠孝ではだめである。彼の忠臣義士の鑑として、謳はれた赤穗の義士も明治の忠臣としては、其儘譽むる譯には行かぬ。今にして其儘之を擔ぎ上ぐるは、大變な見當違ひ、昔の人が心を躍らせたとて、今の若い人々の胸は批評といふ勢力に支配せられて居る。お手輕な持ち合はせでは容易に滿足はせぬ。

或る眞面目な朝鮮人が予が友人に尋ねて曰ふに、伊藤公を暗殺した者は、日本人

の道德に照して見れば、義士に相違ないと。吾々日本人は果して之を駁し得やうか。吾人は昔時の道德に返へることは出來なく成つた、只血を流すを以て忠烈の士とした時代は過ぎ去つた。忠の根底は怎うしても愛でなければならぬ。博愛の中に融け合つて來ねばならぬ。是が爲めには人々の心の奥底の精神狀態が變つて來ねばならぬ。さればとて自然主義の如く、如何に自己に眞實なればとて、又虛僞に依りて人目を飾らぬとは言へ、其自然の儘といふ根底では餘りに淺薄である、野卑である。人の靈性を滿足さすることは不可能である。動物禽獸の自然は人に取つては何等の道德上の價値はない。

茲は怎うしても新らしく生れたる神の子の精神から出づる靈性の本能でなければならぬ。潔められた靈性の要求より、力を竭し精神を盡し意志を盡して神を愛するの愛心に新道德の基礎は見出されねばならぬ。廣い寬たりとした、暖かい世界に這入つた新しい人の衷より沸いてくる靈性の聲に傾聽せねばならぬ。

斯くして建てらるゝ新道德は、清い神の精神を基礎として居る、強ち肉を卑しめ、猥りに罪惡の塊の如く之を慊惡するのではないが、新道德の基礎は怎うしても肉

體上の生活を以て律してはならぬ、新しい而も永遠の潔い精神に動かされて、己がまゝに吹く風の如く、肉の累を超脱したる悠々たる狀態に辿り付かねばならぬ、早く言へば、基督の心の如き麗はしい潔い崇い心が、日本に於ても今後の道德の基礎とならねばならぬ。此の淸い精神を作るのが日本に於ける基督敎の使命である。現代の日本には基督の語が繰り返へされねばならぬ。基督曰く「爾曹の義が學者とパリサイの人の義よりも勝れずば、天國に入ること能はず」と。パリサイの人の行ふ所は外より人心を壓する形式の義であつた、神の命令として畏れかしこむ義理であつた。是では天國には行かれない。外から强ひられるのでなく、心の奧底から潑溂として迸り發する愛の泉、實に敵をも愛する精神が天國の義である。是れが新道德の基礎ではなからうか。

セオドル、パーカーは有名なる新英州の牧師であつたが、奴隷廢止の爲めに其の有らん限りの力を竭した。彼が未だ幼少の頃、或る日路邊で少さい龜の子を見付けた。子供心に忽ち手にしたる鞭を振り上げて、之を擊たうとした、其刹那思はず可愛相なといふ聲が心の中に起つた。其處で彼は此さゝやきに驚き、不思議に思

ひ、直様家に歸り、母親に斯々と告げた。するとと母はさも嬉れし相な顏色で、そうかそは眞に神の聲だ、善く龜を打たなかつたと答へた。彼は其一生を貫いて此聲に傾聽し、粉骨碎身奴隷廢止の爲めに盡したといふ。人々が斯る明確の聲に動されて、初めて神の道が世に行はるゝ。内心のひらめき、靈性の轟きを自覺して、そのまゝ斷行するものが新道德の實行者である。

此の如く我が衷心の聲に道德の根底を据ゑねばならぬ。神か常に吾々の「良」心を通じて語り給ふ其の聲、神が示し導き給ふ方向に馳せ進む決心、是れが日本の道德に新らしい生命を與ふるのである。昔の人の義理、今の人の放埓、皆非なり、清い美しい靈の要求に聽くべし。斯くして初めて尊い自由の眞味が解る。眞に束縛の無い世界が展開して來る。深慮のない婦人の醜い叫が、何んで自由解放の榮を齎らせやうぞ。神の聲をも聽き得ず、良心の萎びた人に、何んで束縛が去れやう。束縛を免かれたと思ふ束の間に死といふ恐ろしい重荷に壓し潰されて了ふ。

併し神の思召は深いかな。幼きパーカーも神の聲に驚ろき、白髮の老人も手に縋る。嗚呼、此の天地の神を父と仰ぐ幼い心に、怎うして隔が有らうぞ。是が我が

基督の心である。玆に吾々は基督の心と一つに成ることが出來る。故に靈の世界には共通なる心がある。老たるも若きも此の世界に於て同じ神の子である。爰にはアングロサクソンはない、ラテンもない、インデヤンもない、只皆我が隣人である、同じ神の子である。耶蘇は人類に此の秘義を敎へた。「己の如く爾の隣人を愛すべし」、こゝに道德の源泉がある。

日本は最早昔時の日本ではない。鎖國の日本は過去の日本である。封建の道德を振り舞はした所で追つ付かぬ。然り日本は最早世界の日本である。新しき道德が生まれねばならぬ。吾々の使命は愈々明かになつて來た。義理にあらず、餘儀なきに非ず、神の聲に聽く眞の自由、パウロの曰ふ「靈のある所に自由あり」との境地をば日本の精神界に開かねばならぬ。

基督曰く、「眞理は爾曹に自由を得さすべし」と、自由の道德、外より束縛せられざる道、是れ即ち信仰に由れる義人の道德である。此義人居らざれば、到底義理の道德に終るか、さなくば放肆に陷らんのみ。新道德は新人を要す、信仰の人を要す、義人を要す。此人なければ、砂上に家を建る愚を學ぶのみ、幾回建直しても暴風來る毎

に顚覆は免かれぬのである。

新生の風光

第一世紀に於て基督教が羅馬帝國に漲つて居た所の暗雲を破つて現はれた光明の一路を辿つて見ると、世界的大宗教の起るのも決して偶然でないと思ふ。云はゞ誠に善い畠に播いた種が五風十雨天地の氣に合して、此に穰々たる秋を見る如き者である。昔は神の御業と云つて沙漠に森林の出來る様なことばかり考へて居た。けれどもそれは神業でなくて、妄想である。基督が天國は人が畠に種を蒔く樣なもので、善き地に落ちた物は三十倍六十倍或は百倍となるが、路傍や磽地や荆棘の多い地などに落ちたものは、よしはえても果實を結ばぬといはれた、それが神業である。然らば羅馬には如何なる準備があつたかと云ふと、當時羅馬人の中には我が心裡に、深くして廣い宇宙的の性格を見出しかゝつて居た。今の言葉で云へば、人の靈性を認め初めたのである。更に轉じて猶太人を顧れば、其處にも人心の奥に徹せんとするものがほの見えた。即ち彼等の母國なるパレスタイン

の天地に於ても、又遠く地中海の南岸に位するアレキサンダーに於ても、共に智慧の書と稱せらるゝ尊きものを一ならず出した。その中一部は舊約書に依て傳へられてあるが、此智慧の書に依ると、天地創造の前に智慧は造り成されて、天地の創造に參加して居る。而して智慧は天涯地角至る所に遍滿して、その宿る可き宮は無いかと、あちこち探し廻つて居るとある。故に神を尊び義を爲さんとする人には、智慧は鳩の如くして降ると云ふやうな、面白い考も出て居る。又多く人の知る如く、希臘に於ては大聖ソクラテスを初めとして、幾多の哲人が人間の心の中には、人間以上のものゝ宿れる事を說いて居る。ソクラテスはダイミオンと云ふ一種の靈が我を指導し我を敎訓すると云つたが、其ダイミオンとはソクラテス其人に非ずして、ソクラテスを動すものである。又ソクラテスの思想の系統を受け嗣いだプラトンは、シンポシオンなる一篇の對話の中に、人の心の中に抑さへ難き憧憬の情の存する事を記して居る。彼は之を愛と云ふた。其愛とは深い〳〵人心の要求であつて、嘗て有して居つた前生のイデアの世界を得んとする努力である。故にそれが燃え立つと、心は云ふ可らざる快感を覺える。言ひ換へて見れば、眞の

美を仰ぎ慕ふて己を忘るゝ、神人交通の境界に、人を完全ならしむる力があると見たのである。降つてストイック一派の人々にも、意味深いものがある。就中セナカの言は面白い。彼は云ふ、我が心には神が宿つて居る。けれどもそれは自分ではなくして、旅人として我が中に居るのである。それであるから接待宜しきを得ざれば、忽ち我を離れて了ふと。其他或は一種の神秘家となつてアラビヤの曠野にさまよふひ、其結果神に交つて無上の福を得たと云ふ者や、或はエピクテトスの如き快樂主義を立て乍ら、水より淡き心を以て世を送つたなど、思想界は誠に百華一時に開くが如き感があつた。其の思想實驗が種々なる形式を取つて羅馬帝國に流れ込んだ。併し此等の諸説の多くは一人二人の者が人影を離れた所で秘密に得た結果である。故に未だ社會的に出る事は出來なかつた。而も此神秘的實驗を得るには親を棄てねばならなかつたのである。人生は何が最も酷いと云ふのに、肉親の親や子を棄てる程酷い事はない。然るに彼等は此忍び難き苦痛を忍んで、無限の神に觸れんとした。其處は實に偉い。けれども彼等の神は冥想の神であつた。故に人類を愛し社會を愛して、之が爲に身を殺して悔いざるが如き、犧

牲獻身の熱血は迸らなかつた。而して又當時の社會狀態を覗へば、萎微頽廢殆んと救ふ可らざるものであつた。よし七丘市上アウガスタスの御世長かれと謳はれたるにもせよ、或一部の間には世界的靈性の萠芽を見たるにせよ、多數の間には苞苴行はれ、内謁行はれ、或は姦淫、或は黄白、滔々たる羅馬大帝國は罪惡の中に在つて、罪惡を知らざる有樣であつた。されば猶太人が一面神の國の現はれるのは、やがて羅馬天下の亡びるのだと見たのも、決して無理ではない。否啻に猶太人がしか信じたるのみならず、廣く地中海に瀕する國々の間には理想の國が表はれると同時に、理想の王が現はれると云ふ事が口に傳へられた。道義地に落ちて人々理想の國を想ふ、これ實に眠より覺む可きの時であつた。社會は現狀では滿足しない。人心は變せねばならぬ。けれども唯徒う思ふばかりで、之に應ずるものがないならば、それは片思である。思ふのは惡い事ではないが、それ丈に止れば、想像に終らないとも限らない。どうしても時代は歷史的一大事實を要するのである。

時なる哉、ヨルダンの水清く、ヘルモンの山雪に輝く約束の地に神の人基督は現れた。基督とは何ぞ。萬人の慕ひあこがれし、理想の人格其の物である。於此か

人々の心の中に豫ねて望みし事は迷に非ず、空想に非ずして、嚴たる大事實として現はれたのである。即ち彼等は未だ基督を見ざる時、既に基督の面影を宿したのである。

基督一度出でゝ凡てのものは變化した。前には唯單なる希望であつたものが、今は我が眼の見る所、我が耳の聞く所、疑ふ能はざる神の子に接したのである。さればヨハネは更に之を高調して「彼を受け其名を信ずる者には、之に力を賜ひて神の子となせり」と云ふに至つた。基督は生るべき多くの神の子の長子となられた。神の子と云ふ言葉は基督以前にも無いのではない。けれども之が確な實驗となつたのは基督以後である。さらば人は信じた結果、始めて神の子となつたのであらうか。然う思ふのも精神の一狀態ではあるが、神の子たる裏面には既に信仰が伏在して在るので、時機に應じて出て來ると云ふ事は、更に大なる眞理でなければならない。信仰は靈性の深い所の狀態であつて、我々は之を神の恩惠とし賜物として感謝する。信仰を有せざる人は到底人格の人として立つ事は出來ない。試に思うて見よ。人は信なくして何が出來るか。親子の根底は何か、夫婦の根底は何

か。何が働いて互に親しくなれるのか。孔子は信を朋友にのみ用ゐた。けれども信は限らる可きものではない。儒者は五常の中の仁義禮智を四季に配したが、信の置所がないから、信は何れにもあるもので、四季ともに之れを缺く事はない。例へば土用が春夏秋冬を通じてある樣なものだと說明した。これは巧な云ひ方で、例へば父子有親ありと云ふ、親しみの深い〳〵所に於ては信ずる事より外にない。一時は疑ふ事もあれどドンヅマリは信である。若し夫れ不幸にして父と成つて子に信ぜられず、子と成つて父に信ぜられぬならば、彼等は親ではない、子ではない。名は親子であるが、旣に死んだも同樣である。かゝる時に當つて其親の心はどうであらうか、子の心はどうであらうか。恐らく人生にかばかり悲慘な事はなからう。若しこれが理窟であるならば、學術であるならば、何とかならう。けれども信は附け加へたものでなくして、生え拔きである、靈性である。而して此信は獨り人と人との相對的關係に止らずして、天地に對する絕對奉仕の祈である、卽ち我にある分身の一部が其本源を慕ふ憧憬である。故に其親しみは親子の關係よりも密であると云はなければならぬ。親子の親しみは猶斷つ可し、神にあこが

る丶我情に至つては斷たんと欲して斷つ事を得ない。我中に苟も靈性を自覺するならば、どうして宇宙の靈に觸れずして居る事が出來やう。神を信じないものは、我靈性を信ぜぬものである。内顧みて聖き靈性の存する事を知るものが、何で天地を貫く神の光を仰がずに居られやう。靈は夢である、幻である、うたかたの泡と消え行く果敢なき迷であると云ふならば、其人に信はない。けれども神は眞である、靈は眞であると信ずる時には、それは實在でなければならぬ。既に神を信じ靈性を信ずるならば、ナザレの耶蘇の人格を信ぜずに居られない。故に基督は云つた「眞理につく者は光明に來る」と。基督を信ずるか、信ぜぬか、これ實に靈性を信ずると信ぜざるとの境である。世には道は信ずるが、耶蘇を信ぜぬといふ人がある。けれどもそれは道を信じて居るのではない。道を信じて立つ者が歷史的に現はれた此事を信ぜずに居らるゝ者ではない。基督を信ずるは己が靈性の發揮した狀態、否己が靈性を見た狀態である。其意味でヨハネの「彼を受けその名を信ずる者には權を與へて之を神の子となせり」と云ふた言葉は深い意味がある。よし人の心の奥には神の子たる靈性があつても、自覺せぬ時には無いも同然である。

けれども幸にして之を自覺すれば、在天の父より汝は我が子なりとの聲を聞く事が出來る。それならばかゝる意識はどうして生れて來るかと云ふと、一旦豁然として發心するものあれば遲々としていつとも知らず醍醐の味を甞むるのもあつて、其狀態は必ずしも一樣ではない。併しかゝる人々が縹緲たる高嶺の姿を眺むるに至るのは、血族に依るにあらず、情欲に依るに非らず、各自の努力に依るにあらずして、靈能の發揮である、誕生である。

人は天然の子であるから、己が住む國、己が居る民族より離るゝ事は出來ない。羅馬は世界を打つて一丸とした趣はある。けれども民族的人種的のものは全く取り去られたのではない。故に羅馬人は系統を以て權利を主張し、猶太人はアブラハムの子孫たるを誇り、希臘人は文藝を以て自ら高しとした。古に於て之を見るのみならず、其氣風は第廿世紀の今日に至つても、尙消えない、アングロサキソンと云ひ、日本と云ひ、支那と云ひ、將たスラブと云ふ。民族各その精神を照らして世界を横行せんとして居る。それは惡くはない、其を打破るのは健全な事でもなし、よし又之を打破らうとしても出來る事でない。日本人はどこまでも日本人、猶太

人はどこまでも猶太人でなければならぬ。けれども神の子たる性格は一切民族的色彩を超脱したものである。パウロが「キリストにあつては、猶太人なく希臘人なし。キリストは凡ての物を以て、凡ての物に充ち給ふ」と喝破したのは、正に此の意味である。獨り猶太人と云はんや、希臘人と云はんや。一小鄕を出でゝ又大鄕に入る、宇宙廣濶苟も人とし生ける者あれば、彼と我とは根底に於て同一となれる者あるに違ひない。火星にも、水星にも、人があるならば、我々と共に宇宙的精神に入る事が出來る。此性格は地上の生活をなすものと同じ性格のものではない。人肉に依つて生るゝものは肉、靈に依つて生るゝ者は靈と、はつきり區別がある。人の心に依るに非ずして、神の性格でなければならぬ。靈に依つて生るゝ事は極めて深い所であつて、唯變化と見るのは間違である。其處は神學思想が變じたと云ふ事ではない。オルソドックスが進步主義になつたと云ふ事ではない。人の心に依るに非ずして、神が成し給ふのである。靈と靈とが相接して、其間に生れた性格である。我々は之を受けては居るが、神の子たる內容は未だ分らない、やつと呱々の聲を揚げた計りである。

今の青年は宗敎を研究すると云ふ。けれども研究では分らない。宗敎的學識を得たからとて、神の子に成つたのではない。昔一青年が基督に來つて限りなき生命に入る方法を尋ねた。基督の戒は即ち是れである、爾も知つて居る通り、十誡を守らば、生くべしと答へられた。青年は先生それは極めて平凡であつて、家に於ても外に於ても常に聞く所であり、よく暗誦して居ると答へた。今の青年が我が神は父なりと云ふのを聞いて、それは分つてる、本郷敎壇はいつも神は父なりだといつて居る。青年が汝一を缺く、汝の所有を賣りて之を貧者に施し、しかして我に來れと云はれた時、彼は何と答へたか。此の言葉を聞いて、彼は今更の如く驚いた。今の青年は丁度これである。智識では分つて居る。けれども斷行は出來ない。斷の上に躓いて居る爲に、神の子と名乘つて、進む事の出來ないものがどの位あるか分らない。新に生るゝには有ゆる物を棄てねばならぬ。此處は基督敎徒が幾度か疑はれた所で、世の人に容易には分らない。けれども去つて聖書を繙き基督がエルサレムに上る途上の一節を照し合せるとよく分る。我に從はんとする者は、父母妻子を拋つて來らざる可らずと叫んだ、しかるに離婚の許すべきを論ずる

者に對しては、神の添せ給ふ者は人之を離すべからずと答られた。父母妻子を棄てゝ勇進する人が、行々一夫一婦、家庭の神聖を說いて居る。一寸不思議の樣に見える。此邊の消息は西行では分らない。西行が世の無常を觀じて發心するや、彼は夫婦を滅却した、否いたいけ盛りの愛少女をさへ足蹴にした。けれども基督は深く人情の眞を認めて、家庭の神聖を保全した、彼は最後の奮戰が刻々に迫つて來る其折にすら、祝福を受けんと欲して、子をつれ來る者があれば、喜んで之を撫でながら、天國にある者は斯の如しといはれた。こゝは實に貴い默示である。神の國を建つるに子は煩ではない、手もつれ足もつれのものではない。自分は喜んで抱いてやるとの厚意を示された。十字架にかゝつて命を捨てる人が、凡の物を抛つて我に來れと云ふ英雄が、可愛い幼子を抱いて天國のものは斯の如しと云ふ。これは禪で分らない、神秘で分らない。基督の神子たる一面は民族を打破し、國家を打破し、家庭を打破する如く見えるが、それは皮相の考である。破るが如く見ゆるのは建てんが爲である。汚れたる古き物を抛つて、初めて新生命に入ることを得るのである。我々が此狀態を自覺せずして走屍行肉の生涯を送るならば、夫婦も

眞の夫婦ではない、親子も眞の親子ではない、親子、兄弟、夫婦と云ふは自然にして誠に貴い、けれどもその眞價は人々皆神の子となつて始めて實現する事が出來るのである。

信仰と忠君

我が基督教が日本に傳へられてより、基督者が殊更に忠君を鼓吹したといふ事は餘り聞かない。此の事は從來の忠君の形式と多少衝突する所あるを以て用心し過ぎたかも分らぬ。或る門外漢は言ふ、忠君は國家道德であつて、宗教の領分ではない、敎壇から之を主張するは世俗にこびるのであると。併し吾々は日本民族として國家の道德に就て默止する譯にはゆかぬ。基督の敎は本來出世間的でない、隣人を愛する敎である、であるから忠君といふ國家道德は敬して遠けるものでない、吾々は充分に之を解釋して、一廉の見識を有つて居なければならぬ。日本にては宗敎といへば、家庭や社會に直接關係ないものと思ふ人が多いのであるが、基督敎に在りては神を愛することゝ隣人を愛することゝを結び付てある、之れが佛

教を超越する基督教の特色と見てよからう。

然らば國家道德の忠君と吾々の信仰と如何なる關係を有する乎。神を愛する心が如何にすれば君を愛する心となるか。日本では宗教家は敬神を鼓吹すべく、教育家は忠君を主張すべく、恰も分業でゝもあるかの如く思ふ教育家が少くない。吾々は先づ迷想を破らねばならぬ。歐米に於ては此の如き議論はない、教壇から時の政治を堂々と論じ立てゝ、大に人心を指導することがある。彼の米國の獨立戰爭の際の如き、教壇は是が爲めに献げられた。又奴隷廢止問題の際に於て教壇の主張は二派に分れた。殊に新英國の諸教會の如きは有らゆる精力を是が爲めに捧げた。又英國に於ても總選擧の行はるゝ際は、大抵の民立教會は自由黨に後援して、盛に教壇より論じて居る。總選擧の際名有る牧師が自ら打ち出て、代議士に當選したこともある。此の如き事は日本に於ては未だ想像しても解らない。乍併余は偶々感ずる所あり、今後は國家道德につき宗教家も大に教壇より論ずる所がなければならぬと思ふ。

先づ之を聖書に就て見るに、忠君は聖書の中に著しく表はれて居る。基督教は

實に忠君敎とも謂ふべき節が見ゆる。一體忠とは如何なる精神狀態を言ふのである乎。元來忠とは人格と人格との間に起る最高の精神狀態であつて、非人格と人格との間には起らない。宇宙を眞理とか眞如とかに解すれば、忠は出て來ない。儒敎にて言ふ上帝は人格であるが、宋儒以後の天は理とか道とかに解せらるゝが故に、之に對して忠の心は起らない。併し基督敎に於て說く所の人格ある神に對する人の心は、正しく忠の至誠である。最もよく此の間の消息を漏して居るのは、十誡の第一である、卽ち『我れの外汝に別の神あるべからず』。多神敎に於ては完全なる忠はない、何んとなれば不貳の心を保守されないからである。けれども唯一神の崇拜を旨とする宗敎にては、神に對する不貳の心を旨とする。我は嫉妬の神なりとは、神がその歸依者に忠の至誠を要求し給ふ意志を、洵によく言ひ顯はしたものである。基督が最大の誡として示されたるは「爾心を盡し精神を盡し意を盡し智惠を盡して主なる爾の神を愛すべし」といふのである。是れ正しく忠誠の精神である。又基督の祈に「天地の主なる父よ」とある。主は卽ち君であつて基督は自ら忠臣を以て居り、又父は慈父であつて、自ら孝子を以て居る。爰に忠孝が一

體に成つて居る。又主の祈に「聖名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ」とあるが、忠誠の精神狀態であるは誰れも疑ひない。一般の基督者の僕といふ時の意識は卽ちこの忠節ではないか。

偖て次に來る問題は神に對する忠が、直ちに取つて以て國家の君に對する忠と成り得るか否乎である。是は一言で明白に成る、我衷心に欝勃たる忠誠を國家に捧ぐれば足る。何もないものを喚び起すのとは違ふ。彼の封建時代の一藩主に對したる忠すら、王政維新を生み出す靈能となり、天皇陛下に對する不滅の忠となつた。小を轉じて大にしてすら猶然り、況んや大を小に應用し來る靈能の如何に大なるかは、推して知るべきのみ。

凡そ忠なる精神は何處にも移すことが出來るのである。人事に顯はれた忠を舊約書に遡つて尋ねて見ると、美はしき忠が現はされて居る。詩の第百十篇の如きは正しく忠の歌である。「エホバわが主にのたまふ、爾の敵を爾の足臺となすまで我右に坐せよ」といふ所から、「主はなんぢの右にありてその日に王等をうちたまへり」と謳つてあるは、則ち忠良なる人民の叫である。又詩の第二篇にも「しかれど

も我わが王をわがきよきシオンの山にたてたり、われ詔命をのべん、エホバわれに宣まへり、なんぢはわが子なり、今日われなんぢを生めり」と稱へてある。其他サムエル書にもダビデが飽くまでソーロ王に仕へた忠義の譚が書いてあつて、日本の歴史に比して毫も遜色ない。更らに驚くべき事實は初代の基督者が羅馬皇帝に對した精神である。パウロの與へたる敎訓は實に愕くべし、殘虐無道なる皇帝ニローに對して忠なれとは、殆んど考へ得られざる所であつて、剩へ彼等は多く羅馬の爲めに亡ぼされたる屬領亡國の民である。故に彼等に取つては羅馬人は不倶戴天の仇敵であり、又忍び難き殘酷なる迫害を蒙つた、そしてパウロもペテロも讒訴せられて、自らも畢に死刑に遇つた。十字架の刑は續々屬國人に課したものである。然るにパウロは良心からして是に服へと敎へて居る。是故にユダヤ人は屢謀反を企てたが、彼等は何處までも非戰論であつた。實に善く忍んだと言はねばならぬ。果せる哉紀元三百十四年帝位に登りたるコンスタンチン帝は基督者の極めて忠良なるを認め、之に依つて立たんと決するに至つた。當時羅馬帝國は亂れて三分せられて居つたが、遂に之を統一するを得たコンスタンチンは、全く基

督者の力に依つて、その目的を達したのである。爰に新羅馬帝國の基礎が据ゑられた。是に由りて之を觀れば、基督敎は復讐を企つべき人民をも忠良なる臣民と成らしめ、國家萬全の基礎たらしめたのである。況んや吾人は祖先傳來實に二千餘年帝國の臣民として生れたのであれば、羅馬帝國の基督者とは全く其性情を異にして居る。基督敎が吾が日本國民の國家道德に於ける、猶高山流水を山下平野に流すが如しで、その感化を受くるもの更に益忠良ならざるを得んや。余は思ふ、朝鮮人をして眞の忠良なる國民たらしむるには、大に基督敎に由るものがなければならぬと。何を以て言ふか。神に對する忠は取つて以て國家に對する忠と成るからである。

根無き樹は水灌ぎても終に枯れん、されど既に根を有する者は僅に培養すればよい、僅に巧妙なる植木屋の手をかるのみ。而して基督者の心事は即ちこの活ける根である。顧みて我が二千五百年の歷史を辿れば、實に神の攝理の著明なるを觀る。基督敎の神は天地の神と同時に亦歷史の神である。神の建て給へる國と君とに忠なるは、神に忠なる所以である。吾々は信じて疑はない、基督者の精神は

我が日本國民の精神を一入深うし、高くし、廣くし、淸くしたものといはねばならぬ。是れまで多くの敎育家の所謂忠は極めて淺薄である、皮相である、從つて又甚しく形式的である、吾人の眼より觀れば、右しても可、左しても可なる事柄をば、さも大問題であるかの如く八釜敷論難して居る。寔に笑止千萬の限である。吾等が朝に首を上げて神を仰ぎ、夕に跪いて感恩の情に充ち、朝な夕なに力を盡して神を愛する心事は實に何等の貞節何等の忠誠であるぞ。我が君上の外に仕へざる誠忠の心は祈禱の中に養成せらる。その淵源の深さは唯物論や利己主義の窺し得らるゝ所でない。故に吾人が有する國家道德の精神は憚る所なく、侃々として發表すべき價値ありと思ふ。從來の淺薄なる國家道德に調和するの要はない。寧ろ彼より我に調和して來ねばならない、進み出でゝ同胞を指導すべき使命がある。有識の人は今更の如く大陰謀事件に由りて初めて驚愕して居るが、吾々は其驚愕の余りにおそかつたことを遺憾と思ふ。彼等は果たして何人に責任を歸して居る乎、學者先生又何と思ふか。他に非ず、他に非ず、彼自ら其責任を負べきである、猥りに形式を論じ、徒らに無神無靈魂を說く彼等敎授や博士が責任を負はねばならな

い。彼等に果して忠の根據があるか。明治昭代の清き歴史に一大汚點を殘したるものは尊き精神の忠を取り去らんとしたる唯物教育の惡結果である。今にして悔いずんば、啻に二十三十人の人々に止まらないのであらう。吾國民は深く事物の根底に立ち到り、敬神の奥義より忠君の至誠を養ひ來らねばならぬ。

目に見えぬ神の心に通ふこそ
人の心のまことなりけれ

とある御製の心を窺ひ知るべし。我が國民は茲に尋ね見て始めて忠君の淵源に達することをうる。吾人の祖先を通じて涓々として流れ來りたるこの忠誠は、吾人クリスチャンの胸底に滔々として沸き出るにあらざるか。基督教は宗教としてのみならず、國家道徳の基礎として、我帝國に貢献するもの多きを知らねばならぬ。吾々は爰に之を宣言して、吾人の國家に於ける立場を明かにせんと欲する。

自信

宗教に依りて贏ち得る自信は生れながらにして自覺する處のものと大に其趣

を異にして居る、生れながら實驗して增し加ふる自信は自力のたまものである。赤坊が成長しつゝ何時とはなしに這へさうな力を覺え、又間もなく立ち得るやうな心地がして、自から這へる立てるの自信が生ずる。その自信は中々强いものである。漸く立ちて少し步き始めると、直に百間も二百間も步けさうな心持がする。小學校の兒童が物の名を五つ六つ知ると、もう何もかもわかつた樣な氣がして來る、其處にどんな六ケしい事でも學問さへすれば、必ず出來るといふ自信が起つてをる、始めには身體の力に信を置き、次には自分の智慧のはたらきに信を置く。この自信が種々の技藝にも働きて何事でも一通りは出來さうな信念が生ずるのである。尤もこの自信力は人々に依つて相違がある。或者は自信力が非常に强い、餘りに强くて誇大妄想狂になるものもある。そんな人は只自分をのみ信じて、人の云ふ事は決して聞き入れない。之は餘りに行き過ぎて居るが、兎に角此等の自信力は全く自分の力に基く實驗より來る。

所が宗敎より來る自信の念は全く反對である、宗敎は自分よりも更に〳〵えらい者を認める、或は神或は佛、これ皆自分よりも遙に力あり自分よりも遙に優つて

ゐる尊い者である。因つて之を畏れ之を敬ひ、之に倚り頼むのである。この動機よりして或は禮拜し、或は供へ物をなし、或はかしづくのである。子が親に事ふる如く、臣が君に事ふる如く、之を自分よりも大なるものとして敬ひ、自分を小なるものとして卑めるのである、この信念が愈深くなればなるだけ、己れを卑めるやうになる、これは殆んど凡ての宗教にあらはるゝ現象であつて、舊約書にも人の卑しく又つまらない事を歌うてある、佛教にも亦同じ感想を論じてある。そのつまらないといふのは自分の身體の弱い事をいふので、この鼻を以て呼吸する者に何の倚り頼む事が出來やう、斯る人に何の力があらうかと、はかなき命を蜉蝣や草花になぞらへてその無常を哀んでをる、かゝるつまらぬ者に倚り頼む程馬鹿〳〵しき事はない、よろしくかの廣大無邊なる神に信頼せよとは、昔から熱誠なる宗教家が自から深く感じて、その同胞に勸めた處である。昔しから英雄の成した大事業は畢竟何物であるか、神は天より之を笑ひ給ひ嘲り給ふのである。大なる國家を作りたりとて何であるか。數千年の過去を顧る時は、英雄の墓はいづくにある、又その事業は荒れて跡なし。その建てた國もその作つた町又城も見る影はない、かゝる者

に倚り頼むといふは如何に愚な事ではないか。

人は海の波の如き者である、浮いては沈み寄せては引く、結局浮沈極りなき波である、人生は糾へる縄の如し、誠に人ほど墓ないものはない。しかも更に深く探つて見れば、底知れぬ深い罪悪が人生の奥に發見せらるゝ。甚しい墮落の狀態に陷りて居るが故に、何の頼むべきものが人生に存して居るものぞ。

人は自から頼むべきものを自分のうちに見出し得ぬ、到底他力本願宗に頼る外はない。是れ人生の一大結論である。故に些しにても自信のある人より觀れば、宗教ほど卑屈なものはないと思はる。無常觀も罪悪觀も人よりその自主たるの權能を奪ひ、之を卑屈にし又奴隷にして毫も顧みない。偉人パウロの如きも罪悪の奴隷たるを免れると同時に、キリストの奴隷たるを光榮とした宗教的實驗に深く入る時は、パウロの心理狀態は誠に人を欺くものでないことが分る、彼は力ある意志强い堅い自信の人であつた。しかるにキリストの奴隷を以て自ら光榮として居るアウガスチンも、亦之に同情して奴隷の仲間に入つた、ルーテルは强大なる意志を有する獨逸人の標本であるが、亦キリストの奴隷たるを以て甘じて居る。

しかのみならず英國の偉人クロムウエルもキリストの奴隸となつた。悉くこれ自力に依り賴まずして他力に賴りすがつたのである、かくなれば自信は果して何處にありや。己れが身體の中にもあらず、心情の內にもあらず、自分のうちには何處にもない。その賴む所は獨り神ばかりである。しからば宗敎よりは自信は贏ち得られないのであらうか。否々大なる自信がかちえらるゝ。絕對無限の神を信ずる中に自信の土臺が据ゑられて居る。神と自分との關係は信仰の進むと偕に親密になつてくる、始の程は全く緣の無い程遠いのであるが、段々深くなり近くなれば、遂には我神と云ひ、又自分は神のものなりと云ひ得るやうになる。かうなると神と我れとは切つても切れぬ緣となる。

我々のいふ神は氏神のやうなものではない。氏神と氏子とは自からの關係がある、祖先とその家族との關係のやうなものであつて、神と個人とのそれではない。之を大にしていへば、皇室の御先祖と國民との關係の如きは、國家の上より見たる君臣のそれであつて、嚴格にいふ所の宗敎的關係ではない。

しかるに吾人のいふ神人の關係は自分一人と宇宙の神との人格的關係であつ

て雙方の靈感がこまやかになれば、間髪をも入れられない程に切つても切れぬ不思議の間柄となるのである。

この關係ばかりは世に類例のないものである。この關係の眞面目に達した以上は、王侯貴人の權威も、父親の嚴命も、又は母親の愛情も之を奪ふ事が出來ぬ。神と我とは本來離るべからざるものである。人間界に於て切ても切れぬ關係の最も切なものは親子の緣である。宗敎界に於て神を親とし自分を子と自覺するは、この親子の緣を更に深く自識するものである。基督は人にして神、又神にして人なりといふは、誠にむつかしい理屈のやうではあるが、神人の最も深い關係をいふたのである。クリスチャンはこの基督と自己との關係を兄弟ともいひ、夫婦ともいひ、朋友ともいうて居る。皆その親密なる間柄をいふのであるが、遂に葡萄樹の比喩となり、爾我にをり我れ爾に居るといふが如き、相互の間柄を說明して居る。是れに由て觀れば、基督とクリスチャンとは一身同體である。既に基督と一身同體であれば、又神とも一身同體となり得る。かくなれば自分は最早孤獨の自分ではない、神のうちに生きる自分である、然り神が自分のうちに生き給ふ自分ともい

へる。

宗教は永遠に變らざる宇宙より考へ來つて自分の身をつまらぬものと觀じ、之を亡ぼしてしまう。然るにまた直に自分を宇宙の中に見出して、自分と神とを結びつくる。先には罪ありとして自ら輕蔑して來たが、こゝに神を信ずる信念より割出して、我を基督の弟とし神の子と云ふやうになる。かくして自己觀が全く變化してしまう。

自己を蒼海の一粟と觀じたときは、自己に何等の自信がある筈はない。けれども自分が神に結びついてその中に生存し、その中に活動するといふ自分を自覺するときは、その自信は實に大なるものとなり、自ら見て自ら驚かざるを得ざるに至る。最初は絕對無限の神は身外にいますとばかり思ふのであるが、何時とはなしに同じ神は我が衷心にいますと自覺するやうになる。

パウロが「爾は神の宮にあらずや」と云つたのは、人の身體が神の宮なりといふのではない。此身がそのまゝ神の宮とは尊い考には相違ないが、淺はかな考の誹を免れない。我々は我が人格の奧底に神の存在を認むるのである。聖靈は即ち我

れ自身の奥底にいます本尊である。これクリスチャンの生命であり又その人格の基礎である。吾人は聖なる哉〳〵と歌ふのであるが、是れやがて我が衷心にまします聖靈をもあはせて讃美して居るを自覺せねばならぬ。茲に尊き自信の價値があり、又深い意味がある。宇宙の中に滿ちて宇宙を司配し、始なく終なき活ける神を信ずることは此上もなき安心立命の信念である。この信念は實に永遠の神に捕はれて居る精神狀態である。その强大なる力は世に較ぶべきものはない。此偉大なる信仰は我れより作り出したものではない、正しく神の恩賜なりとはクリスチャンの自覺する所である、然るに此偉大の信仰はやがて神に捕はれ、神のうちに生きる己れを信ずる事になる。言ひ換ふれば、全能全智の神の聖靈を信ずるは取も直さず我れ自から最善なるものを信ずる事になる。之を眞の自信といふのである。

　この身體は如何に力があるとも、知れたものである、智力とても亦知れたものである。我々は無限絕對のものに信を置かねばならぬ。我々は自信の根底を改めなければならぬ。自然界より贏ち得る自信は、身體の衰弱と偕に、智能の消耗と偕

に萎縮する。然れども絶對の神に据ゑたる自信は永久に衰微するとはない。米國のロイスと云ふ哲人の書いた The Spirit of Modern Philosophy といふ本がある。これを繙けば實に面白い事がある。大我の中に小我が段々發達する事が書いてある。始めは大我と小我とは全く別者であるが、しかるに實驗を重ぬるに從つて、小我がだん〳〵成長して遂に大我と一致するに至るといふ。しかし之れは神と同一になるといふのではない。神は永久に我が父である。クリスチャンはしか實驗せざるを得ない。之れが基督の宗教である。

キリストの自覺自信は誠に誤の無い正當のものと思ふ。「天地の主なる父よ」と云はれたが、父と自分とは全く區別して居り給ふ。しかも神と人とは二にして一、一にして二である。こゝに吾々の自信は深く根ざして、つよく且つ大なるを期して居る。

この尊き自信に依つてパウロは「我はキリストに依りて何事も成し能ざる處なし」と云ふて居る。之は斷じて誇大妄想狂の説ではない。看過してはならぬ、彼れの自信は「キリストに依りて」といふに存するを。しかしてこのキリストはパウロ

の中に生きる彼れの本尊である。クリスチャンの自信は自らの中の、尊い自らを信ずるのである、其自からは無限の神の中に孕まれて居る自らである。此自信あるが故に尊い、何事でも出來ないものはないと確信する事が出來るのである。驚くべき自信力ではないか。然れども此自信力は自から重大視する自信力を放擲して、無限の神の懷に飛び込まねば、斷じて得られないのである。大なる犧牲を拂はなければ購ひ得られないのである。

國民道德と基督教 終

明治四十五年一月卅一日印刷
明治四十五年二月三日發行

國民道德と基督教
定價金壹圓拾錢

不許複製

著作者　東京市小石川區林町四十三番地　海老名彈正
發行人　東京市小石川區櫻木町六番地　葛岡龍吉
印刷人　東京市京橋區日吉町十番地　高城寛雄
印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　民友社印刷部

發行所　東京市小石川區櫻木町六　北文館
電話番町三五八一番
振替口座東京一四四八四番

海老名彈正著

斷想錄

定價六拾錢
送料六錢

斷想錄は著者が敎壇獅子吼の餘響也。片言寸句宗敎を論じ、人生を語る、斷想の細漣其轟きや大ならずとするも、よく洋々たる靈海の壯姿を偲ばしめむ。想を言外の妙趣に走せて、遠く連想の興會を恣にせしむるは蓋し斷片の尊むべき所以なり。

北文館發兌

早稲田大學教授
文學士内ケ崎作三郎著（裝釘優美挿畫七葉
四六版四百十餘頁）

英國より祖國へ

定價　金壹圓
送料　金八錢

本書は著者が滯英中オックスフォルドを中心として獨、佛、以等歐洲の諸大陸を始め米國に漫遊し或は碩學鴻儒を訪ひ或は名勝古蹟を尋ね或は今古の文學美術を鑑賞し折に觸れ所に接したる感想を輯錄したるものにして正に之れ趣味深く含蓄多き最近歐米の文明史論を著者獨特の快筆を以て描出したるものなれば苟も歐米最近の消息を知らんとする紳士淑女の一讀せざるべからざる者たるや論なし

北文館發兌

文學博士元良勇次郎序　文學士岡田恒輔著

悲哀の情緒の研究

菊版挿畫數十
定價金壹圓四拾錢
送料金拾錢

吾人の經驗中悲哀程深刻なる者はあらず。加之日常の生活を始め、宗教、道德、文學、藝術、教育、哲學等人生の事皆悲哀と密接の關係を有す、本書は有らゆる方面より研究して悲哀の心理を解明せんと試みたるもの元良博士の嘆賞せらるゝ如く明晰なる思想と流暢なる文章とを以て記述せらる、啻に學者の好指針たるのみならず、一般世人必讀の好著なり。

北文館發兌